

【日記翻刻】 奥田八二日記（1997・2001年）

川島, 浩子
奥田日記研究ボランティア

藤岡, 健太郎
九州大学大学文書館 : 教授

<https://doi.org/10.15017/7410632>

出版情報 : 奥田八二日記研究会会報. 16, pp.1-158, 2026-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)

バージョン :

権利関係 :



【日記翻刻】

奥田八二日記（1997・2001 年）

翻刻 川島浩子

校訂 藤岡健太郎

凡 例

1. 本翻刻は 1996 年と 2001 年の当用日記を翻刻したものである。なお、2001 年日記の筆記者は幸夫人である。
2. 原文は一部を除き縦書きであるが、横書きに直した。
3. 漢字の旧字体および異体字は固有名詞等を除き、常用漢字体または印刷標準字体に直した。また原文に「𠄎」と記されたものはすべて「経」とした。
4. 明らかな誤字・脱字については適宜修正した。疑問のあるものについては「ママ」を付した。判読できなかつたものは「^(不明)□」とした。
5. 踊り字のうち「くの字点」は文字に直して表記した。
6. 原文の振り仮名はそのままとした。
7. 原文では句点と読点が明確に判別できない書き方がなされているため、本翻刻においては文脈等から適宜句点・読点を判断した。また、句読点が打たれていない場合も多いが、その場合についても文脈等から判断して適宜句読点を追加した。
8. [] で記されたものは原文の記述である。
9. 日記本文記入欄以外に記入されたものは【欄外記入】とし、原則として各日の末尾に掲載した。
10. 原文中に差別用語等がみられるが、歴史資料としての意義に鑑み、すべて原文のとおりとした。
11. 日記に貼付または挟み込まれている新聞記事等については、その記事名・掲載紙の情報等を【 】で記し、文面については掲載しないこととした。
12. 翻刻は原則として日記全文を対象としたが、研究会の判断により省略した部分がある。
13. 【 】内は研究会による註記である。

1997年

年頭所感

わが家は東側と南方展望を高いブロック塀に取り囲まれ、太陽からさえぎられ、孤立状態になってしまったので、今後のしばらくの生活上の設計を改めざるを得なくなったように思う。土地所有の境界線一ぱいに高いコンクリート塀にするとは一寸あつかましい。当方がそれと同じことは出来ない訳だ。もう一つ、私自身「カラ出張」問題で年末この方、マスコミから追っかけまわされ、できるだけ身を隠し、オープンな公衆の場には出ないようアクロス事務幹部から取り囲まれることになってしまった。これ又孤立、私的な発言が他に迷惑を及ぼすことのないよう強く求められている。さらにこれに関連して、六〇億円ばかりの公金の「無駄使い」が指摘され、最高責任者の前知事は一五〇〇万円の返還金に加え、アクロスなど公的位置から退くよう市民オンブズマンから求められるに至っている。これは例えば知事時代の報酬二年分に相当する。物的にも裸になれとの注文である。私は裸で生まれ、裸で死ぬことを拒否するわけではないが、福岡県を、そして前知事の私を特に孤立させて責めようとしているマスコミ又は世論のあり方には納得できないものがある。理屈や理由を云々する前に責任感を見せる返還と引退が「先である」「申開きは後」という。がめつい攻撃というしかないが、私は一切自己主張をやめ孤立を通したい。

1月1日（水）

不吉予告を感じさせる新年荒天

さんさんとふりそそぐ陽光の中、一族揃って一〇人、表の部屋に集って十時半に新春を祝う朝食となった。輝かしい迎春といえたが、沙理の求めで宿題の書初め作業に入っている間に（午後）太陽は黒い雲にさえぎられ、風が強くなり小雨どころか雷まで鳴るという天気急変ぶり。正月に外出を日程に入れていた人達にとっては不運な天気になった訳で、この天候、多くの人に迷惑なことだったに違いない。占いの見地からすれば、わが日本、さらにわが家、私自身、今年はこんなことになるぞと予告されているようにも思える。なぜ正月から雷が鳴るのか不思議とすらいえる。年賀状がたくさん来ている。今回は未だ私の方から出してないし、午後5時現在、一枚一枚見る気にならない。いろんな状況から判断して最近孤独感が強まっているが、賀状への対応も、それと関連しているのかも知れない。監視のマスコミ記者は帰った模様。

1月2日（木）

健康御守

直美が太宰府から梅ヶ枝餅のほかとくに私にお守り袋をもらってきてくれた。天満宮の「健

康御守」である。早速左の腕のポケットに入れ込んだが、何か重要な意味がありそうにも感じた。若い時には所与の条件で気にした事は殆んどなかったのに、近頃はそれが一番の関心になっている。だがこの正月一週間、その前の東南アジア旅行の一週間、確実に食べ過ぎている。敢ていえば自己コントロールがきいてなく、衝動食いをしている。今夕のスキヤキもみんな揃ってのつつき合いに巻き込まれてしまうわけだ。自分ひとりになると、小便が近すぎたり、手足の力が落込んでいることに気づくし、机に向っての仕事の中では視力の衰弱を痛感する。糖尿病、肝臓病の進行の結果であるに違いないが、それへの自己配慮が足りないようだ。年頭に当って、この点への反省から行動を決めていかないといけないと思った。孫たちは漲る成長だ。

【「窓際に立たせ “人間の盾、” (『朝日新聞』1997 年 1 月 3 日朝刊) の切り抜き挿入】

1 月 3 日 (金)

新聞を読む気持も時間的ゆとりもなかったこの一週間だが、疎遠になったままではいけないと思って「朝日」の三日号を見て、切り抜いて、自分の頭にふれた証拠として貼りつけてすませることとする。以下……

【「一般参賀に 6 万人弱」「元日の年賀状 27 億通」(『朝日新聞』1997 年 1 月 3 日朝刊) の切り抜き貼付】

1 月 4 日 (土)

内の者みんなで味えるチャンス

みんな帰京し、うちの中も潮がひいたように閑さんとなった。寝具、食品など後片付けもそれなりに大変。持って帰れなくて宅急便にした小荷物もたくさんあり、これらすべてみゆきの仕事となっている。部屋の掃除もある。食べカスの処理もある。こうして八人ふえた人口で一週間居を共にしたわけである。重荷には違いないが、姿を見る、確かめる、語り合う、共に味わうなど他人からみれば何のこともないが、内の者互いに説明し難い有益なチャンス、シーン、味わいを肌で感じとったに違いない。とくに私にとってはこういう味のあるチャンスが今後ありうるとは思えない。それはゼニ、カネの問題ではないし、苦勞、面倒の問題ではない。雑煮、すき焼、まぜ飯、梅ヶ枝餅、紅茶いずれもが特別の、よろこびの味が添えられていると感じられた。また二人だけの平凡な生活に戻るわけだが、これは何日くりかえしても意味あるとは思えない。

1 月 5 日 (日)

労働組合の別の任務

午後原鶴温泉サンライズ杷木で高教組班協の学習会に出席しての感想だが、教師は生徒の

受験競争の社会に何十年もはまり込んで、凡人がもつべき常識や、組合員としての常識を失う傾向が強い。組合活動の基本は労使対立というふうな事よりも、人間回復がむしろ基本なのだと感想をきき、むしろこっちがびっくりさせられた。有名校への合格の率を高めることを至上とする教壇生活は五年十年二十年とつづくうちに、その教師を常人でなくしてしまうという。人間としての常識の外に出てしまう。労使間の問題が少なくなった現在、教師を平凡人にかえす運動の役割が大事になってきた。そのことを任務とみない労働組合は自己使命すら失っていく。こんなことが原鶴の雑談の中から明らかになった。組合幹部は経営者並みの給料と遊び、ゴルフなどに通じなくてはならぬという者がでてくる程に労働組合は自己喪失している今日なのだ。

1月6日（月）

書道界の新しい展望が必要

師村妙石氏が近年毎年やっている書初表彰式と先日の中国旅行報告会が黒崎のプリンスホテルで行われた。中食をかねたパーティでもあり、北九市・福岡県以外からも参加者があり、二五〇人は集ってくれた。韓氏（中国総領事）も来てくれた。剪紙の芹田氏も見えた。被表彰者の中にも、参会者の中にも女性が三分の二以上の割合を占めていたと思う。私は挨拶の中で「アジアの時代」が来たことにふれ、世界的視野からも書道界は文化の面で注目されるだろう今日の被表彰者はもちろん、参会の諸氏も「アジアの時代」の文化の先導者になるとの自覚をもって今後ともこの道で活動して欲しいという意味の発言をした。西欧文化になかったものなのでますます重要度が高まる、その意味で趣味・余技などでみられるどの分野よりも注目されなければならないという事も含めて挨拶に入れたのだが、印象を改めた人も確かにあったらしい反応を覚えた。この道が今後どう開けていくのか、注目に値する。

1月7日（火）

カネの負担問題がとび出していて当惑

暮れまでblankだった手帳の予定らんがどんどん詰っていくので驚いている。世の中があわただしく動き出し、私もそれに巻き込まれていくのである。困ったことに、そのための出費が嵩んでいく。やむない借銭と思うしかない。今ふりかかっている金銭上の問題は「カラ出張」問題と納める上で首長としての責任罰返済にかかわることである。県議会、知事部局が58億円と指摘されている。公費乱用にどの程度、誰彼が弁済して県民の怒りを鎮めるかであるが、今日林県議から聞いたところによると一月下旬に開かれる予定の臨時県議会でカタをつけようようにするとのこと。それまでこの件について私の態度表明などは行なうべきでないとの合意に達している。もう一つ筑豊で用地買収をめぐる当時知事だった私がかかなり巨額の賠償をすべく個人名ざして訴えられ被告となっている事件がある。

無茶というしかないが一月中に反論せよという。弁護士費用もいる。

1 月 8 日 (水)

裏と表、部分と全体

劉個展に、昨日につづき寄ってみたら本人に会うことができた。ただ期待と違い体調がよくないので、本人の現場揮毫はできないかも知れない。しかし所望があるので復古堂に連絡して毛氈をもって来てもらう所までいったが、私はアクロスに予約の人が来ているので、早々に引揚げた。予約は毎日新聞の島岡氏。記事にしないとの約束で「カラ出張」問題について素直な意見を交換しようとの森山氏の提言に沿うものであった。言葉には部分と全体など、よく話合っておかないと一方的に都合よく解釈され誤解を与えることがままあるので本根の知り合いが必要である。「知っている」といえば5%知っていて九五%知らないこともある。九五%知っていてあと5%知らなくても「知らない」という方が正しいと思われることもある。「知っているといいながら対応しない首長」という非難を受けている今、私は、「知らない」といった方がよかったのにと周辺からたしなめられている。「正直にいうもんな」ともいわれるが、正直かウソつきかわからない。

1 月 9 日 (木)

「カラ出張」への考え方一つの峠を越す

「カラ出張」損失については役職者及びその OB が 70 億円の払戻しという線で詰めが動いているらしい。新聞では約 70 億円だが、細目は、そして分担はまだ計算中で一月下旬には概要が決まる様子。いろいろ疑問も異論もあるが、大勢に逆うわけにはいかないようだ。今日ライオンズホテルで職組の川崎委員長の態度をきいたが、別の動きは不可能のようだ。一応これでキリをつけ、労使問題の他の条件との関連の解決については後日の課題としたいと委員長はいつていた。県民の目の前に労使問題を見せて争うわけにはいかないという。例えば「カラ残業」など問題は少くないが、これを解決しないと「カラ出張」には対応しないというのでは世間に通らないからだと言った。一筋が通っているので私は疑問をもちつつも納得することにした。収奪搾取の面が喰い逃げされる心配はあるが、問題の局面は別との組合側の言い方は了とせざるをえないと考えるようになった。私の悩みもこれで一段落としよう。

1 月 10 日 (金)

62 歳で新しい就職を求めるインテリ

福田正明氏から来た手紙。顔も名前も思い出すが、もう 40 年近くも前に知り合っていたことが、手紙が導いてくれた。主旨は就職の世話頼むということで、九大経済学部時代の成績表まで同封してある。三池闘争時代の向坂イズム、総評の全国決起、ロックアウト、闘

争敗北について原稿をまとめているとも書いてあった。年は62歳。三池闘争にはいろいろの角度からの批判が既に出ているが、それは各自の思いから、それぞれになされてよい。しかし62にもなる人が私に就職斡旋を求めてくるとは驚きである。私としては彼は彼なりにこの40年間の人生の延長線上でもっと頼みうる縁をもっていて然るべきだと思うので自分の出来上った型を自己判定すべきであろう。可塑性はもうない。又、今日は「起業」ということが盛んにいわれている時代だが、就職という言葉から抜け出て、ベンチャー心を持ち、スキ間事業を自分で開拓するのがベストである。折を見て彼に伝えよう。

1月11日（土）

寒さにめげず、つつしまやかに控え目に（侘助）

講談社の「四季花ごよみ、冬」に侘助を見る。

侘助の落つる音こそ幽かなれ 相生垣瓜人

さざんかが盛りを越した。うちに一本高い侘助花木があつて冬の庭を支えてくれている。さざんかと同様、もう落つる頃が来ていてほんとうに侘しい。ただ花名の由来は関係ないようだ。——豊臣秀吉の朝鮮出兵のとき、侘助という名の男が持ち帰り京の竜安寺の方丈の中庭に植えたとの説、戦国時代の堺の町人笠原宗全が好んだので、その還俗名をとってつけたとの説もあるが、いづれもツジツマ合わせで、やはり閑寂を表わすワビ（侘）とスキ（好き、好け）と解するのがおだやかだ——花は寒風の中で、小さく、艶やかで控え目という感じで茶花に適することというまでもない。

浮雲やわびすけの花咲いてみし 渡辺水巴

侘助のひとつの花の日数かな 阿波野青畝

1月12日（日）

水仙に支えられて

曇りでぐっと冷え込んで一日在宅机に向つてばかりの中で一寸庭に出ると、梅花がぐっと蕾をふくらませ、サザンカは盛りが過ぎたと思える紋った空気の中、正月以来、花としてがんばっている水仙が今尚がんばっている。昔から潮に乗って渡来したとして自生し、どんだん品種もふやさされ、日本文化に絵にも紋様にも器具飾りなど、欠かせなく愛されてきた水仙である。「四季花ごよみ、冬」から、いくつかの句を……

水仙を囊のひまに切りにけり 高浜虚子

水仙に光微塵の渚あり 水原秋桜子

水仙や来る日来る日も海荒れて 鈴木真砂女

野水仙ここに香を溜め香を放ち 稲畑汀子

水仙を抱きくる海も巖場かな 宇佐美魚目

牛追ふや磯水仙を手にしつつ 山田孝子

水仙の束解いてゐる海女のこゑ

加藤 勝

1 月 13 日 (月)

万両と千両

表の椿は太い蕾をたくさん著けている。西側の侘助はまだ花をつづかせる。万両についてもふれておきたい。うちにはあちこち万両が豊かだ。蔭で力一ぱいついて赤、西の松枝の下にはたくましい白万両が数本ある。自分で繁殖するようだ。関東以西に自生するらしい。

万両にかかる落葉の払わるる

高浜年尾

座について紅の万両憑きにけり

阿波野青畝

書には白実の万両のことが出ていない。別ものなんだろうか。

関連して千両だが、仙蓼と書くのが本来のようだ。うちには南の窓下にある。この赤実も亦美しい。正月の縁起物として欠かせられない。万両と違って生花に使われる。

千両の実をこぼしたる青畳

今井つる女

名は千両といふ明るくて寂しくて

有働 亨

万両も千両も蔭に実るのだが、どちらもわが家を土に着けてくれる。

1 月 14 日 (火)

アロエのこと

いま、うちではアロエが四株花穂を著けている。切ってきて机上でつくづく見るのもどうかと思いながら、そのまま咲かせている。アロエの株は五〇とはいわぬ程たくさん育成している。花はいつ咲くのかよく知らない。葉には鋭い針がついているが、その青汁がよく利用される。ヤケド・傷に有効であることは誰もが知っているが、青汁が健康保持によく、それを瓶に詰めて商品にもされているようで時々広告に見る。私は葉を五〜六センチ程度そのまま口に入れて噛み砕き、食べることが多い。ニガみがあると一般にいわれるが私は馴れているせいか、調和的に受け入れる。近いうちに花を切って花瓶にさし身近かにおきたい。又東側に植えてたくましく育てゆくアロエが数本コンクリート壁工事人に踏みつけられ、葉が踏みちぎられているので、使えるようなのを拾い集め利用する方がよいと思うので、洗ってミキサーにかけ青汁の形にして飲むつもりでいる。育ちはわが家の力との印象だ。

1 月 15 日 (水)

さっさと働く小鳥

正月に頼りになるわが家の草花は唯一水仙といえるが低木の蠟梅も際立っている。今は花も盛りを過ぎた。満開ともいえる。正月の花瓶にいくつも利用した。枯葉にこそ意味があ

ると思って枯葉もつけて花瓶に入れると趣きがある。二週間後の今は枯葉も落ちてしまっている。応接間に通した客は窓近くに目立って咲いているのにいち早く気づき「あ、蠟梅が」という。パッと目につくのである。ヒヨだろうと思うが注意深くサッと来て小枝をゆすりながら止り花をついばんでサッと飛び去る。蜜があるに違いない。小鳥たちの動作をみながら、あれたちも真剣に生きているんだ、この寒い中を自分で生きていくしかないわけだ。一寸注意しているところの蠟梅より三メートルほど左の万両の実も同じく鳥がついついでいる。地上三〇センチほどの低いところだから鳥はつばみにくそうだ。だが鳥は木の実の運び屋なんだ、確かに。

1月16日（木）

自然を見る

劉基 1311～1375

宋時代 浙江省の人

風駆急雨灑高城 風、急雨を駆りて高城にそそぎ
雲圧軽雷殷地聲 雲、軽雷を圧して地をとどろかす声あり
雨過不知龍去處 雨過ぎて知らず竜の去りし処を
一池草色萬蛙鳴 一池の草色万蛙鳴く（劉基）

「漢詩日曆」の七月六日のページに出てきた「五月十九日大雨」と題する詩で今日小筆で書いたもの。灑とか殷とか平素使わぬ字に接するのもいいが、この詩の中には高城という人間のなせる物はあるが、他はすべて自然。どの国どの時代でもいい。雷が地をどどろかし、雨がやんだあと、あの「龍」はどこへ行ったのかととぼける作者。そして池で鳴き競う蛙を雷のあとに置きかえる作者。これはどんなに発達した文化をもってしても、かんだんに代人を見出しえない文化人である。書いて、読んで胸を打たれたので、季節はあわないが書き止めることにした。文明の発達が是非なくてはならぬといえないのが何よりのポイントだといいたい。

1月17日（金）

救急車で運ばれて

「空出張」問題対応につき、OB三役、林と池田と私の基本姿勢を示す必要があるというので、十時から三人がアクロス福岡で談合することになった。私は林氏に万事一任する旨発言したものの、急にぐらくらして意識不明となり、周りの人の手で救急車を介して済生会病院に入院することになった。十一時すぎには平常に復帰したと思うが諸情勢を勘案すれば入院続行となった。けだし、このような目まい入院は初体験である。老化を意識する程近頃は足腰が弱っていたことは確かだが、今日はアクロスに到着するのに若干急ぎすぎ、途中異常の前兆を感じなくはなかった。その続きのように談合がはじまって数分後に目ま

いが来たのである。貧血というのか、自分ではこれで事終るかも、と思った。救急車で運ばれるのは僅かばかり意識し得た。無理・欲の結果か、慌てる必要もないのに途中一寸あわてたのがいけなかったように思う。多くの人に迷惑をかけることになってしまった。

1 月 18 日 (土)

協同組合論に光を

病室に九大工学部の森氏が来てくれ雑談の中で大学生協にふれた部分があったが、私は生協について近頃若干重みをのせた意識をもちはじめている旨、彼にも伝えた。資本主義も崩れはじめているので次なる社会について言及する論者があちこちに見受けられるようであるが、未だ協同組合への期待を言う人にでくわさない。私は、経済組織として大は大、中の中、公は公として現在の延長を考えてもいいが、小及び零細なものは幾重にも協同という形で活動する時代になると予期している。そして個人は多重の協同体に関係することによって生業と生活を全うするし、この点を通じて各人は自由、平等を確保するというシステム、これがポスト資本主義の社会構造の基本となる。農業面ではこれが始動している現在ではなかろうか。もちろん現在の農協や生協は資本主義の悪い蔭に染っているので、これが延長は考えられない。これが変革を要する。そして諸々の資本主義腐敗不平等が解消される。

1 月 19 日 (日)

蔵書をどう処理するか

病床にいるといろいろ冥想にふける。その一つに、己れの老化に関して、とくに古^{ふる}りし年々に積った物、とくに一番に書物類の始末について考えたり悩んだりである。全部灰にしてしまうのもよいが未練が残るので、どこか山村の空き家でも借りて並べ直してみたら、と思ったりする。浮羽郡のどこかにないか、築上郡はどうかと思うが、具体的な構想は出てこない。実際に当たってみないとわからないとは思ふ。しかし、そうした方法の具体化にもかなり骨折りを要する筈である。コスト、時間、苦勞、それほどにまでせねばならないだろうか。二〜三〇年も前までは、古本屋に小出しに売って金銭に変ええたらう書籍も、今ではゴミに等しいだろう。同じような立場にある人、あった人の経験や方法をきいて参考にするのもいいだろう。いずれにせよ、全部とは言えないが、価値あるものだけでも選出して保管し利用者に望みを繋ぐという方途はないか、ぐるぐるめぐりだが病床で考えつづける。

1 月 20 日 (月)

劉文波講演会

台北からの書道家劉文波氏のチャリティ書展が三和ビル地階で行われている (一月五日～

一月二十四日）が、その一環として私の提唱で今日午後一時半から「日中伝統文化」と題して劉氏に講演してもらおう業事を組込んだ。折悪しく入院の余儀なきに至ったので私はこれに深く関わる事ができず、今日はせめてと思って外出許可をとってアクロス福岡での講演の冒頭主催者の立場で挨拶をした。その中で、書は単に日中伝統文化ということだけでなく、アジアの時代といわれる二十一世紀に向けて、世界文化の先頭に立つという位置にあるということを強調しておいた。書を志す人はそれ程の自負心をもっていいのではないかということでもある。漢字は一字ごとに意味をもつ独異な文字でもあるともいっておいた。世界文化の中で、そのような文化分野が今後注目されることは興味深い。水墨画、篆刻についても同じくいえるだろう。あっさりしているのが好きだ。只、残念ながら興味をもつ人がもっと表に出て欲しいのに少なすぎる。

1月21日（火）

「個縁」について

24日に予定していた「いきっ子会」でのテーブル・スピーチの概要を森祐行教授の要請により、短文にまとめ、出席者にコピーして配布することとなり、早速原稿を書いた。テーマは「縁」ということで、血縁、地縁、職縁と分けその変化動揺をとらえ、更に「個縁」というものに今後注意を注ごうと呼びかける内容である。個縁という表現は一般化してないが、私はこの言葉を使うことにした。好縁といってもいいのだが、まずは個縁としよう。さきの三つの縁に次ぐもので、今後とも益々重要な人と人との結び目になるだろうとの見方である。各自の好み、選択で取捨できるが、今後の社会生活で誰彼を問わず重要な「縁」となることが指摘できる。誰もこれには積極性主体性を発揮できる。今回の私の入院についても血縁の見舞は妻だけ、地縁者なし、職縁者はさすがが多いが個縁といえる人の見舞も少なかった。縁は生活に不可欠な人間関係だが、結びの糸は生活態度によってであろう随分違ってくるものなのである。

1月22日（水）

時代が違う、社会が違う。

岩崎隆次郎氏が見舞に来てくれた。彼は自己説明の中で炭鉱労働運動の終期のことを原稿にしている——とくに炭坑爆発に関連して——ようだった。私は、古いなとは思ったが、これも歴史の大事な一齣であるに相違なく重要な仕事。ただ、今時どう発表するか探すに迷うと感じたがいい案が浮んでこない。県立大学で講義の時間に、炭鉱労働について一寸ふれたが、学生から炭坑とは何か、石炭とは何かとの質問が出てびっくり。以来私は炭鉱の話をつづけないこととした。知事時代に新採用職員に井戸のことにふれた折、「井戸って何ですか」と質問され同じびっくりを経験していたのである。地球の裏表どころかもっと人間、時代が変わっている。西欧の科学でものを見ることに馴らされてきたわれわれは、

その目で東南アジアの社会を判断してはいけないのであろう。あらゆる分野で同様の誤ちをしてきたようだ。日本の ODA 援助も、高度技術の機器が現地で雨ざらしだときくが、これも同断、国内大資本生産物の押売りにすぎないのだ。古いものは古いように…

1 月 23 日 (木)

荒天・冬日

高橋実氏の南花畑公民館での講演要請をキャンセルせざるを得なかったのが残念至極である。これも森山氏の意見によるマスコミ対応である。同様の不義理がこの関係であちこちにばらまかれ私自身顔をつぶしてしまった感がある。院長から借りたラジオは盛んに天気予報をする。九州地方は寒のピーク、荒天に蔽われ積雪の所もあれこれあり阿蘇は一五センチの雪ともいわれている。病室から時に窓を開けて外を見るが空間はほんの少ししか見えない。大変寒そうだし、雨も降っていることはわかるが、室内では実感が湧かない。血糖値は依然高いが、退院して自宅で静養してもよいと思われる。ただ眼科の指摘される白内障の進嵩にはどうしてよいか迷う。一層の自粛を食生活に向けねばならないことは確かである。食欲があるのは有難いという声もあるが、その食欲を押えるには別の努力が必要だ。老化が著しいので足腰をどう保っていくか、これも日常の心得の一分野であろう。

1 月 24 日 (金)

「カラ出張」問題にさとりを開く

入院してなければ今日は私にとってたくさん消化すべき会がある日だったが、凡てキャンセルすることになってしまった。地区労の大江敏夫氏を励ます会、いきっこ会、ローフレンドの会、^マ教授を送る夕あれこれかけ持ちみたいだが、できるだけ顔を出したかったのに自重せざるをえないので病床にいた。又臨時の県議会も開かれ、例の「カラ出張」問題の調査委員会報告や知事態度表明もあるということだった。この日を越えれば退院してもいいという予定になっていた。時の流れを凝視しているしかない私である。「カラ出張」問題についてはマスコミの一方的に報道^マに対し、言いたいことは山ほどあるし、返還金問題についても一般職員以上に馬鹿くさいという気持があるが、マスコミが作った世論を鎮めるのが先決というので、これら諸問題については一切コメントなしという態度を当面続けようと思う。裸で生れ、欲で生き、裸で死ぬのが凡庸の極みであるから割り切った方がいい。その点さとりを得た気持である。

1 月 25 日 (土)

末期認識

「国の借金が四百兆円を超え、日本から金融資産も現実資本も逃げ出しつつあります。一次産業は二・六%に縮小し、二次産業も急速に消失し、三次産業(その内容は投機とバクチ)

が七〇～八〇%を占める末期社会になりつつあります。最後の仕上げは金融機関の連鎖的破産と、居直った政府による超インフレでしょう」……これは今日送ってきた労働新聞一月二五日号からの引用であるが、去る一月十二日に東京で開かれた労働党新年旗開きへの各界メッセージの一つ、帝京大学教授降旗節雄氏の文、締めくくりの部分である。教授のそれは「あやしくなった「資本主義」」という見出しで、私の目をひいた。彼は今の状況を似而非資本主義ともいっているが、私は資本主義の終末像といった方がよいのではないかと思う。政治・政党・金融・経済・労働・社会組織などどこをみても精力がない、先行きへの自信がない、内面はぼろぼろになっていっている。「居直った政府が……」という所にゆく。

1月26日（日）

今回の年賀状対応

いずれはタッチせざるを得ない賀状に遂に手をかけた。四〇〇枚ほど来たろうか（確かめではないが）。昨年について今年も当方から賀状は発信しなかった。恥ずべきことかも知れないが引きつづく無礼である。今日からの点検は、まずは再度読むべきは読み、当方の住所録との照合である。この照合にも時間がかかる。今日は五分の一ほどの照合で疲れて一応打止めにした。このスピードでは照合だけで一月が終る。返信を出すべきものを選んで返信を書いていくとすれば、二月半ばまでかかってしまうだろう。電話で済むものは電話で済ませたいが、電話ではツラ汚しになってしまうので嫌だなどと思う。ともあれ、今回ふりかえてみると賀状を書きうる状況になかった。それに私自身、この人に出すか否かの選択に迷うので、来た賀状にあとで対応するという心情に陥り勝ちで、前回も、今回もその影響があった。アクロスで名を使ってくれた賀状は若干は行ったと思う。

1月27日（月）

寒さとのたたかい

こんなに寒い冬日がつづくとうがなかつた外に出なくなる。窓をあけて小雨を確認する。ついでに水仙の花をながめる。紅白の梅樹は蕾も小さい。一途に引きしまった感じ。藤棚も落とすものは全部落としたよと、ちじこまっているが、春にはぐんぐん伸びてやると言っているようだ。鉢の紅梅は次々に咲いていこうとしているのに、こう寒いと外に出て鑑賞する人がないのが勿体ないようにも思う。春にそなえて土を入れかえる必要があるようだが、わが身がちぢこもってしまうのが事実。若い学生・生徒は今からが入試などへの挑戦時、寒い寒いといっておれない。日本海沿岸の各地海岸でロシアのタンカー事故で流出した石油の広大な地域にわたる汚染対策で漁民をはじめ被害地域の住民が寒さ荒天、荒波をまともに受けつつ清掃に骨身を削っている。気の毒でしかたがない。収入もないのに、この環境汚染と直に闘わざるを得ない苦痛なのだ。

1 月 28 日 (火)

俳句は極楽

句誌「玄海」を読む。冒頭の小島氏のものから二句選ぶ。

志成りし如くに梅真白

春潮に神の置きたる島二つ

「島」といっても博多湾にひそかに浮ぶ全くの小島、ついである。それから「俳話」のページの坊城氏寄稿の中に次の箇所があって傍線を引いた。「俳句は極楽の文学である……悪魔の情念の束縛から解放された時にこそ達成される……真摯に自然と人を詠いつづけることが極楽への道である」……こういうふうには極楽へと俳句を導入する態度は長年月の間に磨かれた心の表現と見てとりたい。欲にまどわされることがなくなっている。あるいは俗念を脱いてはじめて到達できる心境だろう。その意味では俳句のほかには多くの分野で心が到達する頂点だともいえるだろう。俳句は西欧や中国では見られない文学領域といえよう。

1 月 29 日 (水)

大牟田三池鉱の閉山

三池炭鉱が三月二九日でいよいよ閉山になる。「三池闘争」から三二年、労働組合も新労に吸収されてしまったといえる。田川や山野という三井の大炭坑閉山で三池の労働者補充にやってきた労働者も新労に入らないと再雇用してもらえないし、新規採用の場合も同じだろう。坑内保安が緩み大事故で多数者が命を失ったケースはよくあった。二ヵ月後には全員が失業する。あらかじめ対策でどの程度新たに職にありつけたかしらべてないが、効果は私には疑問。三井側は社会的義務感に薄い。土地・施設をもっている新規企業でもする気は薄い。三月には直接雇用一、二〇〇人、下請や関連を加えると三〇〇〇人が失職する。高齢者や化骨したような坑内多年就労者には再就職は無理だし、現今の不況は環境としては最悪である。政府・自治体がどう手助けするか、わからない。妙案はないのではない。保険給付で当面つないでいくしかない。

1 月 30 日 (木)

NTT の分離分割に一応の目途、評価が得られた

第六回 NTT 九州在り方懇が熊本のニューキャッスルで開かれた。年末六日の郵政省と NTT との合意内容を一応了とすると共に、今後、どう対応するかについて話し合った。われわれ九州在り方懇としては、九州電気通信監理局長 (栗谷川) 氏も認めるように、今回の両者合意の形成に際し NTT が名を捨てて実を取るようになった結着には重い役割を果たしたといわれ、よかったとの安堵を得たように思う次第である。全国を二分しそれに長距離を加えて「分離分割」の合意が得られたのは力関係上ベストといえる。その上統合の一〇

○%持株会社（特殊）が乗せられたのだから分離分割は最小限にくい止められたといえるであろう。労働条件の全国均一も可能になり NTT 労組（全電通）としても一難去るといえるほどの成果だったと評価している。今後は人員整理、非常勤の増加、賃金抑制の圧力にどう対応できるのかというところに問題は移るであろう。アメリカやジョイント・ベンチャーがあとどう注文をつけてくるかが問題である。

1月31日（金）

熊本駅早朝の列車不通

一年の12分の1である一月の終る今朝早々八時前に熊本駅に着き博多に帰ろうとしたら、ボタ雪で竹が鉄道の架線に蔽いかぶさって上りは不通ということになっていて、開通まで二時間待たされた。泊をやめて昨夜のうちに帰福しておればよかったのにと後悔したほど。それに昨夜はホテルに泊ることを一旦は止めるとのことだったので睡眠薬をもってきなかったため、全く眠れぬ身であった。悪条件が重なり、苦難に挟まれて迎えた一月末日早朝、辛かったこと辛かったこと。老化の目立つわが身につみかさなる悪条件であった。全電通本部に電話して休憩させて欲しいと思って買った切符を清算した直後、只今開通との構内放送十時頃だった。乗車した特急が動き出すまで二時間半熊本駅で待ったことになる。悪運の重なりで今年是不吉なスタートになった思いがする。「カラ出張」問題、で多額の返済に追われることは既に明らかで、わが身がどこまで耐えられるかが試されるようだ。

2月1日（土）

路上での凍死者

夕刊をみていて、65才の男が三号線よりの路上で凍結餓死していることの周辺説明を知って感ずるところが多かった。まずは高齢・ひとり暮らし・無収入・家賃請求・生活保護行政の不適用などであるが、近頃考えていることに二点大きなバックがあるように思える。まず失業・無収入だが、今全国的に失業率は三・四%、これは高ピッチで増えている。日本経済は既に危機に突入していて円安が進んでいる。当分よい展望はない。ジャパン・バッシングは進みそうだ。行革、財政難赤字国債累増で増税の反面社会保障諸給付は下降といった状況。他方高齢化が進むだけではなく高齢世帯が急増し過疎化が進み都市部でも人との地域連帯が薄まっていく。私はこれを血縁・地縁・職縁の稀薄化という視点から、社会問題視している。若い人、職にありつける人、健康な人はまた「物余り」現象に浮かれているが、そうでない哀れな人がふえる。

2月2日（日）

ペルー日本大使館ゲリラによる人質事件

ペルーでのリマ日本大使館テロ人質問題は長期化していく中、フジモリ大統領の武力行使

論と日本側の否定（平和解決論）はくい違ったままだが、カナダのトロントで開かれた橋本首相との会談でフジモリの方が折れた。現在の人質は七十二人。ゲリラ側は「仲間の釈放」に固執している。日本側は不測の事態になり、人命尊重ができなくなると対外的に困るのであくまで話し合いをとしているが、ペルー側は「仲間」の釈放は拒否としている。日本には日本のメンツ、ペルーには国内政治上の理由があるようだが、一応ペルー側が前に出ないことにしたようだ。今日で事件発生後四十七日だったか経過している。ゲリラも全力をあげているだろうが、とぼっちちを受けた人質者及び家族など関係者の被害も考えると、一定の譲歩はあっても一刻も早く解放されなければならない。常識が許す自己貫徹方法ではない。ゲリラ側にも疲労の増加など効果を勘案して団結の崩れはあるだろう。

2 月 3 日（月）

記憶力の衰え

二時からアクロスの理事長室で十二月下旬の東アジア視察旅行の総括会があり、今後関係日程、あり方も協議した。出席はアジア女性フォーラムの三隅、石橋、理事の秋枝、山口それと私理事長の一行五人。14 ページに亘る報告書がよくできていると思った。それからスナップ写真、ビデオ映写、それぞれ総務の石橋氏の努力は大した成果を生んだと思って感心。来年度になるが、四月一九日にムーブで一般の人を対象に視察報告会を行うことも決った。スナップ写真約九〇枚、ビデオもそれくらいの齣数だが、私以外の四人はみな場所やシーンについてよく記憶されているのに、私だけが憶えていないのにはびっくりした。場所の固有名詞がすらすら出てくるのが当り前のようだが、写真を見ても私はこれほどだったか頭に浮ばない。固有名詞がはじめてから判っていなかったり忘れてたりである。通訳、案内者の名前にしても同じである。ボケがかなりひどくなっているようだ。

2 月 4 日（火）

繭と蛹の心境

賀状への返信を書きはじめたが、西原忠毅さんが、いい短歌を五首書いてあり、ほぼ同感なので、ひとの力を借りてであるが……

- 1、元朝に孫と子十二居並べりわれ象徴となりて上座に
- 2、走り根のボルガの流れ遠々にその行くさきは極洋の昼
- 3、このごろは耳がいよいよ遠くなり博多がハダカに聞えて寒し
- 4、眼もかすみ字を読むにさえことかくに夢は妖しくこの世に遊ぶ
- 5、塀立てて一切合財かたづきぬぬくぬくと繭に蛹たるべく

教養部時代に英語の先生で私より三年ばかり上か（？）老化の度が私よりひどいようだがとくに第一と第五はほとんど同じといってよい。繭の蛹とは実にいい表現と感嘆した。私もそれに近いとの自覚が始まっている。賀状対応では孤独と表現しているにすぎないが、

明日からの対応にはもっと適切に文学的にもしたいものである。西原さんは私の知事出馬にも実に力をかしてくれた人であり感謝にたえない。

2月5日（水）

野焼なければ新芽なし

県の高原貴智氏のくれた賀状にペン書き添えとして「野焼きがなければ新芽も出ないと出直しのつもりで努力します」と書いてあった。今の県職員の心境を正直に、まともに表現しているなと思って感心した。その通り、その通りであるが、果たして努力が実のりのかどうか心配が残る。「カラ出張」問題は歴史的、全国的体質から形成されている悪弊、欠陥状況であると私は問うのである。そのへんの事が正されないと、行政職員という労働人事、職場雰囲気が濁々まになってしまふに違いない。間違っていました、では正しましょうというような気付きの足りなさから出た問題ではないのではないか。その点が吹聴するマスコミとそれに踊らされている住民一般にさっぱり理解されてなく、夫々がわが身こそ正義を貫いていると思込ませているのではないかと私には感じさせられる。いずれにせよ、私は蛹のように繭にとじこむのが最善であると思っている。

2月6日（木）

梅花は絶対

聞道梅花圻曉風 目加田「漢詩日曆」二月六日

雪堆遍滿四山中 陸游一梅花絶句

何方可化身千億 （一一二五一一二〇九年南宋）

一樹梅前一放翁 号は放翁、浙江省紹興の人

すごく難解な漢詩である。「聞くならく梅花曉風ひらに圻くと 雪堆あまねく四山の中に満つ 何ぞまさに身を千億に化し 一樹の梅前一の放翁たるべけんや」と読む。

読んだとて意味の理解ができるかどうか。——梅花が寒い風吹く曉に咲いていると聞くが来てみると雪が積った如く四方の山々に梅花が咲き満ちている 今こそ身を千億に分けて一本の梅樹にそれぞれ一人の放翁（わが身）が立つようにしたいものだ——後半のしめが面白い。どの梅樹もこの目でしっかり一時の間に観賞したいが、身が千億に分けられたらいいのに、と思う。今は梅花、中国は梅花である。

2月7日（金）

巨額にのぼる不良債権くい逃げの公算

朝刊に「不良債権」の問題が報じられている。多くの事例が過去に何件もあっているが、今日のは大阪信組の元理事長らへの逮捕状（乱脈融資の件）についてである。「文春」二月号に H₂O（兵庫、阪和、大阪）、それに F（福德）加わったとの記事があり、H₂は既に潰え

OF が今問題との説明だった。朝刊のトップ記事は不良債権をもつ 24 特殊法人のうち百億円以上の 13 法人で会計検査院の調べでは、96 年三月末に前年より 15%増の一兆四千六〇〇億円とのこと。国民一人あたり一万円をこす。国民金融公庫及び住宅金融公庫夫々一九〇〇億円、海外経済協力基金三九四七億円、中小企金融公庫一八七四億円、輸出入銀行九四〇億円、中小企業事業団九九〇億円等々とみてくると、われわれ国民が身近かに信頼してきた団体が軒並みに乱脈経営をやっていたことが改めて知らされる。バブルの崩壊と景気不調で、投資の回収こげ付きがひどく、正常化の展望はありえないようだ。政治を通じて国民にかぶせるのだろう。

2 月 8 日 (土)

暗の冬、明の冬

寒い冬になった、という捉え方と、もう春が近いという捉え方とでは暗と明というか、一寸違った位置づけになる。今はもう春も近いので寒さの進む一月とは肌ざわりすら違う。ケルト的視点を一度覚えたが、冬になっても深化する寒さの限りでとらえるのではなく、春への展望、循環の一部局としてとらえるのとは違った姿勢になってくる。寒さを暗と受けとるのは寒の極点で視点を止めてしまう。春の前段と考えると寒さも基礎づくり的にみえてくるであろう。人はあれこれ利害や感覚にとらわれ見る目が極部に限られてしまう。草も木も、主観はなかろうが、それなりに自然に、春に備えて新しい芽をふくらませていく。われわれ人間も草木の芽のようなのを、この寒さの中で育んでいかないといけないのではなかろうか。受験生は寒い教室で問題への解にベストを尽くしている。自分の将来に向けてといおうか。

2 月 9 日 (日)

つつましい生活を覚悟できるか

賀状の対応をつづけているが、返信に対し中山日出子さんから電話があり、老衰を感ずると書いていた点について、まだそういわない方がいいではないかとのこと。彼女なりの見方を語っていた。徳山さんは二〜三才上、秋枝さんは同年の女性活動家で気力に充ちている。自分は教会のことなどボランティア面で動いており、時間があれば墨絵を楽しんでいるとのこと。社会主義協会九州支局の時代によく働いてくれた。今はほんの僅かだが年金と貯金引きおろしで生活するのがやっとなが、食費より交際費に圧迫されるという。その通りであろう。交際費の占める割合が高いのは退職者に共通の悩みといえるようだ。被服その他身廻り品には出費しないで済ますことができるが交際費はそうはいかない。そのためには完全な引退、どこかに籠るしかない。自分も時にそう思うことはあるが、身の雑物を考えるとダメである。老人ホームなど身辺洗うようにする必要がある。

2月10日（月）

物置きに何でもかんでも押し込んでいる

物余りの時代といわれる。そのせいもあって、わが家は部屋の棚、家具入れ、物置きなどぐいぐい詰め込んで、場所に窮することがしばしばである。既存の空間は何か押し込んでいる。新規な物の置き場に窮するのである。「捨ててしまえ」という意見もあるのだが、私の場合は何でも保存しようとする。心懸けもよくないのであろう。時に、こんなものがあったと思うことがある。捨ててもよいのに保存しているのである。特段価値があるわけでもないのに保存している。この癖はなおらないだろう。このような根性は生れ、育ち、時代とも関わりはあろう。貧しい生活の体験は、家庭の貧乏、戦争との関係で物不足を長期に体験したという内容である。いわば育ちと歴史である。それが根性となり物余りにつくるのである。押し入れにある物は殆んど今はなくてもいいものである。年賀状やカレンダーが押し入れにたくさんあるが、何の価値もないといえはいえる。しかし、捨てる気にならないのである。誰か処分するだろう。

2月11日（火）

近代建築物の価値

「金や財産、地位や肩書きは、株価と同じで、すぐ変わってしまいます。いつも相手の立場になって考える『心のあたたかい』人間に育てて下さい」（相田みつを）〔門司奥田正氏からの賀状〕というのが、今日私の目をひいた。数年前私は大濠のNHKの食堂で外を眺めながら、ある人に、ここから見える建物でいつまでも残したいのがありますかと言ったのを思い出す。ニューヨークでも東京でも、他のどこにでもカネのかかった建物は少くないだろうが、心のかかった建物はどれほどあろうか。法隆寺、姫路城その他後々の人が見たいと思うのがどれだけあるだろうか。「すぐ変わってしまう」物、「いつまで残る心」という捉え方で、今までわれわれが励んできた西欧文化の物質面の真似ごとは、将来に向けて反省すべきではなからうか。住宅も2LDKから4LDKへ、勤務先に便利という尺度だけで見ていいのだろうか。

2月12日（水）

年賀状への対応やっとならぬ

来た賀状への返信という形で行った賀状整理は今日夕方やっとならぬ。正確数えてはいないが、九日間で三五〇枚を量といえよう。大ざっぱに言って一日四〇枚、相手を頭に浮かべ、来た賀状にとくに關心を寄せた方がよければそれで、表現も違って来る。一律に印刷したハガキそのものとは違う。郵便番号を調べたり、虫めがねで見直したり、書き間違いの字を修正したりしていると能率に混乱が生ずるけれども、できるだけ整ったものとして投函する気持からは修正は避けられない。はじめ分類した時に返信不要の部に入れたのにあと

で「要」の部に組みかえたのもある。そういう意味で対応の気持も動揺したのが事実である。しかし総じていえば一人一人記憶をたぐった事に他にいえぬ意味があったと思う。ただ印刷してある通り一遍なもので差出人の顔が浮かばないのもかなりあったことは事実。こんなものには当方も気節挨拶しか書きようがない。

2 月 13 日 (木)

梅と雪

漢詩を小筆にて書きつけるこの頃だが、中国の人は昔から梅雪によく気を寄せる。2 月 10 日のページ (漢詩日曆) に――

梅雪争春未肯降	梅雪は春を争い互に譲らず
騷人閣筆費平章	詩人は閣筆して審判する
梅須遜雪三分白	梅は雪に白さ三分を譲り
雪却輸梅一段香	雪は遂に梅に一段香で負ける

騷人は詩人、平章は審判という意味らしい。宋時代の盧梅坡という人の詩なんだが、ここでは梅と雪の比較までやっている。もちろん詩の対象としてもあそんでいるのであるが、まじめに捉える詩もたくさん見られる。寒さに耐えて咲く。一面に咲いて雪のよう。又山の谷を埋め尽くして青味の対照となす。ある場合は山裾の霧だろうかとすら見える梅花。こんなのが詩によまれている。咲く期間も、桜と違ってうんと長い。蕾が次々に開く。この性格がもてるのだ。

2 月 14 日 (金)

福岡県職労五〇年史と社会主義協会

大牟田の久保田武己氏から手紙が来て三池争議につき向坂派の関与が問題だったということをお小さい字で綿々と綴っていたので妙な印象を念頭片隅において夜春吉の「壺天」での県職労五〇年史執筆の関係者懇談会に出席したら、橋口甚之輔氏が、三池争議、向坂教室、社会主義協会抜きには五〇年史は語れない、同時にこの故にこそ福岡県職労が全国唯一の誇れる歴史をもつに至ったということを強調し、その線で話がはずんだのであるが、久保田氏の手紙と偶然にも同じ時に関連ある問題が私の目前に現れてきたのに驚かされた。是非又は効果評価を抜きにして県職労のリーダー達が社会主義協会とのかかわりの重大性をかくも強く認識し全国史の中で位置づけしているとは思ってもよらなかった。私についても生き証人であると存在意義が強調されたのである。この五〇年史はそうした基底を外すことなく篇纂するとのことであった。

2 月 15 日 (土)

経済大国日本をどうとらえるか

送ってきた「進歩と改革」誌で福留久大氏の「世界経済の動向と日本の進路」（続）というのがある興味をひいたので読んだ。戦後五〇年余を中程のドル紙幣の金兌換停止とオイルショック即ち一九七一年から七三年の辺で二つに分けて考えることが第一点。日本にはこれという資源がないのでドル稼ぎに力点をおいて後半の成功をもたらしたが、それは他国には真似できないことであったというのが第二点。大企業を拠点とする「重厚長大」よりも、小規模資本でも可能な軽薄短小型へと技術及びニーズが移動していくという時代の流れにマッチできたというのが第三点。これが日本を経済大国にまで進めていったのだが、八〇年代になって他国に追いつかれ、社会主義国の崩壊、バブルの崩壊を経て今日に至っているとの説明が主流だったと思う。ただ、今後についてはその延長しかないとはいえ、まだ形にあらわされていない。

2月16日（日）

ナツメロ会に思う

ナツメロ会は主催の側が歌詞を綴ったプリントが渡されるから正しく発音できる。これは基本の一つであろう。知らない曲もあるが、何となく出てくる曲でも歌詞が正しく出てこないのが多いので、このプリントは大変に役に立つ。主催者側が前もってよくしらべているなど感心する。曲もちゃんと録音してあり、それが演奏されるから、いい加減な節が正しいものと並べられて正しくなる。その上で、参加者は声に出したり、外にあらわさぬ心で歌う。それぞれのナツメロは人それぞれに感慨をもたらしているに違いない。人々の表情でわかる。懐かしくもあろうし感動もあるに相違ない。三時間ほどの、そうした感動の時間が与えられるということは、われわれ年輩者にとっては他に替え難い。今現在多く体験できる曲目やケース環境ではナツメロに代えられない。全く主体的になれない。ナツメロは年輩者が形こそ違え多少の差こそあれ主体者になれる。それが楽しいのではないか。

2月17日（月）

三池炭鉱の閉山労組側に提案

三井三池がこの三月末で閉山になる。数年前から知らされていたし、会社側は公式に通知すべき筋には明言してきたので、今回は労使協議会の場での対労組提案で夕刊各紙が報道したものである。

【「閉山提案の骨子」の記事（『朝日新聞』1997年2月17日夕刊）貼付】

来るべきものが遂に来たといってもいいが、ズルズルだったともいえる。解雇者の再就職斡旋、水道、港、用地、社宅、保存遺蹟など具体的には地域振興もふくめ、後始末にはたくさん問題が残る。行政課題も山積する。

【「女性4人」「奥田」等の人名が書かれたメモ挿入】

2 月 18 日 (火)

三池闘争の総括を残したい

昨日につづき今日も三池炭鉱のことで新聞紙上はかなり埋められている。(アクロスからの連絡で、当時の総評事務局長だった岩井章氏が逝去したとのこと。弔電を打つという)。三池争議、組合分裂、その是非が多く語られている。太田薫、嶋崎譲の発言、会社の課長、第二組合結成の話も出ている。現在もっと手当を出せとの主張を含み坐り込みをしている人達があるようだ。共産党は国内炭をもつ必要性の観点から閉山反対の立場を明言している。三池争議を勝敗からの視点だけからとらえるなという意見もあるし、行きすぎは反省すべきだとの意見も出ている。太田さんは職場闘争の行きすぎにも言及していた。数日前久保田武己氏から向坂教室の執着性とその害毒についても体験者として所見を綴った手紙がきた。今は、そうした角度の違った見方を総合してまとめる人、仕事が必要ではなからうかと私は思う。

2 月 19 日 (水)

重荷の返還金

県の公金の不正使用の返還について、OB 三役の対応が新聞に報道された。前知事奥田一、六〇〇万円という大きな見出しが人目をひいただろう。一彦からも啓二からも電話があった。一彦は交通事故にあったと思いあっさり諦めるがよいといていた。ていねいな励しの手紙もきている。逆に、この際もときびしくやっつけろという声もあるようだ。県の条例・規則の改正もすぐ取組むと知事はいつている。広範な重い処分が既に行われた上での話であり、職員は萎縮している。対応に奔走している。正義の味方のような顔をしてもっとやれやれという人もあるが、県だけで効果があがる筈はない。他の自治体も締め直そうとしている例が新聞には出るが、国が対応しないとどうにもならない面、国でも対応できない面がある。スポーツの応援団でも思うにまかせない。国、自治体の政治も理屈や厳しさでは片付かない面がある。その辺を応援団もわかって欲しい。

2 月 20 日 (木)

鄧小平氏の死去

またまた大きなニュース。鄧小平が遂に死去。92 歳というから高齢。すでに江沢民の指導する体制は数年前から引継ぎの形で進んでいたもので、内外の変動はとくにないようだ。中国共産党中央委員会が 19 日発表した「人民に告ぐ」の骨子を拾っておこう。

- ①我々の尊敬する鄧小平同志は十九日午後九時八分北京で死去した。
- ②鄧同志は偉大なマルクス主義者で中国の特色をもつ社会主義建設理論の創設者だ。
- ③鄧同志は文化大革命の誤りを正し、社会主義近代化への新しい道を切り開いた。
- ④江沢民同志を中核とする党中央のもと、必ず鄧同志の社会主義改革・開放と近代化建

設の偉大な事業を完成させる。

[パーキンソン病と肺炎、機能不全（呼吸循環）による死去]

25日に追悼大会の予定。一般的にいう外国（香港などでない）の代表は招致しないとされている。

2月21日（金）

家屋の新改築

別の日記をつけていて今年の今日の欄を見たら網干の小嶋芳男が入院したと書いてあったので、早速電話して今の安否をきいた。まずは快復しているという。ついでの話で、現在は朝日山の麓に移転借住まいの状況、七月半ばには旧屋敷に新築完工するとのこと。思えば近頃は新聞折込広告、新聞広告にはすごい住居宣伝。現在のわが家の周辺でも工事中が五カ所ある。家並み相が変わってしまう事確実。逆にいえば、わが家はもう旧式の最たるものだ。ロンドンなどでは考えられない。日本はバラックが多いということだろうか。打越、刀出など私の生涯と密に関係した二〇〇年三〇〇年の建齡をもつ家が、今の世代によって、いとも簡単に改築されてしまうこの傾向は、豊かになった面もあろう。家具の近代化、浴室などの近代化、家族一人一人の部屋持ち要望、家族相互の縛の変化、電化器具、自家用車など改築を促すニーズは大きい。しかしかんたんに改築を発想する今の若者の気持は私にはわからない。

2月22日（土）

供給過剰

新聞はさみ込み広告といえは季節ものとしては「塾」が多い。そして常期のものだが女性むき美容、服装、一般に医療・健康に関するものであるが、ここで特に指摘したいのは自動車販売と外国向けツアーである。恐らくこの二分野は今大変な供給過剰又は過大競争なのであろう。アメリカ軍が沖縄で古くなった核兵器を使い捨てしているのが新しい沖縄問題で急浮上しているが、元来、安保の拡大解釈や米軍基地の在日問題は兵器兵力の過剰供給がバックにあるのであって平和維持に不安があるからではない。不安があるように外交を展開しているアメリカ当局にこそある。ともあれ軍事分野は別として、さきに指摘したような住民日常の面では供給過剰が業者に圧力をかけている。需要を上廻る供給が固まってしまっているのではないだろうか。需要の側の購買力を高めるとか、供給側が供給分野を転換するとか、流動性を高める努力がお互いの中でもっとあってほしいと思う。

2月23日（日）

瀛洲のこと

漢詩を書いていたら蓬萊という言葉がでてきてなるほどと思った。夏の酷暑に耐えねばな

らぬ中国では蓬萊の地が夏でも涼しい場をもつ理想の別天地とされていたらしい。大字典をひいてみた。「支那の伝説に、東海の東にあって仙人の住むという三神山の一つ（三神山は蓬萊と方丈と瀛洲）といわれる。旨の下に夙と書いてエイと音す。漢詩を書いていると当用漢字ではとても間に合わない。視力が衰えたことも一因だが、活字の綴りがわからないので、虫眼鏡を使う。それでもまぎらわしくてわからないので大字典をひく。それでもこの瀛の字は最後のところ夙というあたりがあいまいになってしまう。めったに使わない。蓬萊は使っても瀛洲は使は^マない。大字典をひいても他の意味に使う場合はないようだ。しかしここではその箇所を見たということを残しておいてみたいのである。

2月24日（月）

小物ばかりの余物

毎日小筆で字を書く。それを残す。応接間や書斎には片付けなければならない事情がつづいている。書いた物は捨てないで、片付けねばならぬ対象の増加になる。三日前八女に行った時に私が演壇に立っている今年の写真一枚をもらってポケットの中で邪魔になるのでアルバムに貼った。十分以上の時間がかかった。平素は面倒ということで放置されてしまう。思えば五〇年、その半分がこの住居。毎日何かがたまっていく感じだ。棚や本立ての上など空間がぎっちり置物で埋まっていく。捨てればいいのにとの意見もあろう。ひとに差上げて然るべきと考えることもある。だのに物がたまっていく。物置の奥へ奥へと押し込められ、己れの日常にかかわらないようになっていくものがたくさんある。性格がそうなっているのか捨てられない。困った行き詰りである。死んだら誰かの結論で灰になるよう処分してくれるに違いないが、自分で区分する決意ができないのが残念極まりない。

2月25日（火）

橋のさまざま

中国の詩をみていて村落の橋のことが気になった。何百年、否、何千年というか大昔から、村落ができ自然な農耕によって月日を過ごす人達は共同のニーズとして「橋」が必要になってくる。一メートルほどの溝でも、三メートル、一〇メートル、五〇メートル等々の川幅に応じて、ニーズを共にする人口も大小違うであろうが、橋が必要となる。川幅の広い所ほどニーズはおそく生れ、それを充足する橋の大きさ、強さ、工法など違ってこようが、一枚の板ですむのから、二枚になり、それぞれが繋がれ、橋脚が臨時的にか恒久的にか架けられた橋になる。洪水（出水）ごとに流される板が流れに応じて繋ぎ留められるように工夫された橋もある。今日の鉄橋に至るまで、いろんな橋と共に生活してきた人類の体験が中国の詩の一角に表現され、私自身子供の頃の橋についての様々な思い出が湧いてくる。架橋とは実に面白い。

【「特集 アトピー性皮膚炎」の新聞広告切り抜き（掲載紙・日付不明）挿入】

2月26日（水）

今日の詩、文学を知りたい

ほとんど毎日のように小筆を握って「漢詩日暦」を書いているのだが、中国の農業ないし自然な人間生活の様子が四季折々の情景としてでてくる。もちろん、山水花鳥はいうまでもない。役人や文学者が詠んだのが多いことは当然だが、一、〇〇〇年といわぬ昔から、ほんの最近まで誰にでも通用する感覚がでていていると思う。だとしたら、今の人間、今の社会はどう受けとめるのか、今はどういう詩が通用するのだろうか。私には今日の詩人が何をどう表現しているのかを知りたい、そういうことを知りうるチャンスを自分で作りたい。今の社会があまりにも機械化、情報化、合理主義の進出支配にとらわれすぎると思うので、否、自分自身がそれに埋れてしまっているのだから、自然と人とその心が、どう接し表現されているのかさっぱりわからないとの反省がある。アジアの時代という新しい世紀の中心課題は一般にその反省だと思う。

2月27日（木）

地域性の変質

昨日「あるきさん」というのが子供の頃あったのを思い出して家庭での話題にした。今、回覧板というのがよく目に付くのでそれとの対比である。「ムラ」というのが自然に出来、そのムラ生活の中で、今の市政（回覧板）と関係なしに、ムラの人達が「あるきさん」を作ったのだろうと思う。今日は今日でそりなりの成り行きで回覧板ができていようが、回覧板はどこか上からの指示指令のようにも思う。ムラには圃場への給水溝掃除、大葬場維持清掃、洪水のあとの復旧などいろいろな共同作業が必要で、そのための相談会など「あるきさん」が伝えていたと思う。今日は混住社会だし、行政がかかわって対策することも多からうから、地域共同のニーズではなくなり、関心事ではなくなっているのではなからうか。開発が進み「都市化」が進めば、地域の人と人との共同性、協同ニーズが変わってしまう。隣は誰か、何する人かわからなくなる。

2月28日（金）

漢詩の訴え

小筆で漢詩を書いているこの頃、漢字が意義をあらわすとか事柄を表わすということの不思議な魅力にひかれることが多い。日本語になったもの、ならないものの別はある。日本語になって平常よく使われるもの、あまり使われないものなど、は当然常識になっている。八百屋とか百貨店などむしろ日本人が最近になって作ったものでなからうか。千梢万葉、千里煙波万壘山、百轉千聲など面白い。一晴一雨もよい。風蒲獵々、蕭々遠樹など巧みだ。

光赫々、香沈々、蛩唧々、霧濛々、流悠々、水濺々もよくわかる。それぞれに自分で体験を通して考えればよい。一池万蛙、白日斜などうまく表現したものだと思う。字を読む人の体験、能力が前提となっていることはいうまでもない。この世界には西欧的合理主義はあってはならない。絵にかき漫画にしないといけな。細かく視覚に訴える表現でもない。読む人が頭の中で自在に画にし、感覚に響かせる必要がある。アジア的なのだ。

3 月要記

三池炭鉱が三月末で閉山になる。一〇八年の歴史が閉じられるし、産業の近代化に貢献した石炭だが、世界経済のグローバル化の中で、農村の米作同様、価格競争の面で存立不能となった鉱山である。累々積み重ねられた炭坑史と共に国内炭が消える寸前まで来た訳だ。一般国民は石炭を知らなくてもいい時代になっているのである。ある面からいえば、残念な時代になった。国際化、自由化、規制緩和グローバル化の中で日本はいよいよ小さくなって生き延びる道を模索しつづけねばならぬ環境に包まれるわけだが、私は資本主義を基底とする世界観とは別れた方がいい時代になったとも考えるようになった。資本主義を基底とする価値観で何でも見ていると世の中は暗い方向に行っているが、もっと価値尺度を変える生き方を求める流れが表面に出てくることを期待する。豊かな方がいい、早いのがいい、大きい方がいい、学校の成績が大きい程いいというような物量を価値尺度から引き込めてもらいたいのだ。草花や動物の命、人間との関係の中で意義ある情緒、金銭収入より親子血縁の尊重、仕事のために旅行するのもよいが、景観を味わうための旅というようなものの見方が欲しい。考えてみれば妙な環境の中で七〇余年過ごして来たものだ。この生き方に対し、今後はできるだけ反省をした生活をつづけたい。

3 月 1 日 (土)

もう春に入った？

数日、暖い晴空がみられ春が来たとの実感がわく。西側の紅梅が一面にはなびらを散らしている。それも美しい。それにしてもどの梅の木も約束したように花を終らせているのが不思議なほどである。マージャンに来た上田氏の話では、スキーもいいが、そろそろ限界に来たと思うとのこと。足の衰弱をとくに感ずるだろう。私も体力があれば、わが家の梅花散るのに感心したりする狭い視野ではなくて海岸に、森に、島に、高山にと、もっと視野の広い風光の中で季節の変り目を肌で感ずる方途を選ぶべきかと思うけれど、今はそれは叶わぬ夢になっている。逆に微小なことだが、アロエを植えかえていたら、小さなトカゲがほっと目についた。土を返したら放り出された姿で、急いで逃げる様子もない。なるほどこれが蟄というものか。外に向って自在に動く時節には一寸早いのであろうと思った。彼等も春を待っているのである。アジサイの芽がはつきり現われてきた。

3月2日（日）

細谷治嘉宅への弔問

松田初善氏が随行してくれ、大牟田に行き、細谷治嘉氏宅への弔問と、三池閉山に当面する組合関係者慰問懇談会の二つの課題を果すことができた。細谷さんの合同告別式は二月八日上宮斎場で行われたのだが、「カラ出張」問題でマスコミから追っかけまわされていた私は出席の条件になく、以降気になっていた。84歳という。その間、組合長、市長、県議、衆院議員というようにあらゆる要職を消化された傑出者であるといえる。誰もが、なかなか同様の道は歩めない。阿具根さん、小柳さんは未だ存命だが、小野参議、多賀谷衆議を失ったので、細谷さんで三人目。松本英一氏を加え四人目。いわば戦後史を形成していく上で、旧社会党の中央指導者としての偉大な行績を残した部類に入る。今日辞去する時に贈呈されたテレホンカードに刷ったサボテンをみせて頂き、温室での余技^{ママ}を立派さにも深い感銘を覚えた。有能、まじめ、誠実。静かな余技どこからみても見本だ。

3月3日（月）

中国古代作詩者

目加田先生たちの出版された「漢詩日曆」（昭和六十三年）三六五首を半紙1/2の大きさに小筆で、二回目書き上げた。一回目より少々よいものになったと思うが、字そのものに未だ誤りが残っているかも知れないが、自分がこの分野で一步前進したと思う。この人は、と前から頭にあった作者は月日順にあげてみると、王安石、楊万里、范成大、白居易、武則天、朱熹、陸游、王維、孟浩然、韓愈、杜甫、李白、蘇軾、欧陽修、杜牧、司馬光、柳宗元、虞世南、王士禛などであり、この本にも何首か選ばれている。軍人、行政官である人も少ない。文学や作詩だけを業としていた人があったであろうか。煩雑な文字を使用していることを考えると、よく勉強した人に違いない。社会や自然、人の心を理解する能力が底にある。ただ想像するに、権力の中心部におれなくて、むしろ地方に左遷（？）された人も多いようだ。閑職におかれたり、高齢化した人が少ないようだ。

3月4日（火）

余生一般論

人生五〇年というのは昔のことで、今は七〇年を越えて八〇年もおかしくない時代になった。でも、いわゆる余命というべき期間が長くなり、過剰な（？）医療、治療に支えられ、家族や行政に生きるだけのために（？）多くの負担をかける者が多くなったという状況である。安楽死をめぐる意見が飛び交うのも当然といえる。もちろん、生きることに意義ありとの意見もあるので、ここで決定的な意見を出すのは遠慮するしかない。先日逝去の細谷治嘉氏は美事なサボテンを作っていたという八四歳。中国の大人物鄧小平は九二歳。だがこの例は別扱いが必要だろう。だったら一般的には無駄な余命、特殊な人なら長生きも

いいということになりそうであるが、その結論はよくない。意義ある余命が少しでも多くなるよう、みんなで努力しようと提案したい。昔の隠居もいいんだが今はできそうにない。

3 月 5 日 (水)

男女の性差

北九州女性フォーラム主催で十時から今回の JICA 研修で来日中のアジア九ヵ国の研修生によるカントリー・レポートが小倉駅北の国際会議場で開かれた。四人の研修生の報告の後、中食となり、席上、男女機会均等について、話題が高まった。いつものことではあるが、なかなか明快な説得力をもつ発言がでてこない。しかし今回は男女の自然差と社会的差別についての指摘をうけることができた。更に、歴史的ないし実際的な経験の濃淡の違いを早く克服すべきだとの意見も出され、有意義だと感じた。とくに女も男同様やってみるという経験を積ませるべきだとの指摘である。ただ子を産むという問題から育児について、家事労働について、均等という理屈が先んずる声が強すぎる。性急すぎるのではないかという感じがした。歴史的な社会的な、肉体现状的な視点を観念が乗りこえればいいという意見は俄かに賛同しかねる。

3 月 6 日 (木)

総合高齢者福祉施設

女性フォーラムの基金援助のお願いで、八幡東区の福祉法人西峰会に芳賀晟寿氏 (アキトシ) を訪ねた。以前県の教育委員長をしていた人で顔見知りだが、このような幅広い福祉施設の経営に努力されているとは知らなかった。もらった封筒には次の七施設の名が並んでいる。養護老人ホーム西峰園、特別養護老人ホーム大蔵園、併設デイサービスセンター、老人保健施設正寿園、付設デイケアセンター、在宅介護支援センター、地域給食サービスセンターである。西峰会はこれらの統轄法人である「長寿者の里」との通称がある。高齢化が進むにつれて医療、保健、介護サービスの分野でさまざまなニーズが急増しているし、他方、家族、地域の果してきた従来の機能が急激[↑]している今日である。西峰園は医療分野をもたないが、他の分野ではそれぞれ連繫しつつ専門的に対応している。個々の老人がわが家と施設入居との選択に迷っているとの問題もある。

3 月 7 日 (金)

協同組合主義

渡辺氏が西区の米屋さん (吉岡氏) と一度ゆっくり懇談する機会を設けたいとアクロス理事長室で関心のある発言をして、そのことで何分間か思いを述べてみることになった。以前私は生産、流通、消費の流れに沿った新しい協同組合構想を彼に開陳したことがあって、それが今日又懐想されたのである。大空想であろうが、私は資本主義の次なる社会の骨格

を新協同組合型でえがいてみようと思っている。西区のような農業がまだ残っている地域で、米の自由化や減反対応で将来を暗くえがくのではなく、協同組合型で利益を追うのではなく自分達の協力でどんな環境にも頑として生き抜いていく社会の基礎部分を開拓してみたいとの野心がある。どんな産業分野、消費分野でもいいが、まずは自由化にさらされている農業分野での試行が最もわかり易いと思うのである。勿論、今の農協では話がさきに行かない。

3月8日（土）

立派な人の心でも許されぬ？

漢詩日曆の二月十八日の項に新雨水と題する朱元璋の詩がある。注を見ると彼は明王朝の創始者太祖洪武帝である。（一三二八～一三九六年）

片雲風賀雨飛来　頃刻凭着遍九垓
檻外近齡新水響　遙穹一碧見天開

高殿に昇って天下を見、大空の雲の動を見ている。感動も常人と違ったものがあつたはずだ。私は近年民主主義オールマイティ論に疑問をはさむようになっている。民主主義なら皇帝がそのような感嘆に打たれるのは勝手だが、それが行政財政、人事を左右するのはいけませんということになる。カリスマ的在り方は許されない。衆愚だっても仕方がないということになる。衆愚というのは見識のすぐれた人の意見はど（不明）□□もあって、多くの人が感情で燃え立つことにより、それが支配することであろう。

3月9日（日）

自分の社会を自分の努力で維持しよう

公式な関わり、仕事、役目がだんだん少なくなってくると、人もだんだん寄りつかなくなってくるとの実感が強まる最近である。いわば自分は、抹殺されたとはいえなくとも、消え去ったら誰も何もいわない。以前、参院の副議長をしていた小野氏逝去のあと北九州の彼の奥さんに弔問した時「誰も来なくなった」との歎きの声を耳にしたことがあるが、その通りであろう。逝去でなく引退したら人は寄り付かなくなる。今日はナツメロ会で東市民センターに行った。それなりの効用はもちろんあるのだが、もう一步進んで何か役割を果たすことを考えると効用がプラスになる。今日の話の中からいえば、どこか旅行したら、お土産の幾つか買って来て近所の人に贈呈する。それは後日お返しもある。顔つなぎ、不在報告など声かけ、こうしたことで地域（昔の部落）、隣組のよさ、必要性が持続できるという。マージャンなど自分で友を確保する努力が必要という。

3 月 10 日 (月)

福祉政策の切捨て

職組の福祉職協議会が四〇年史発刊記念集会を三時からサンヒルズで行い、出席した。四〇年史には表紙が私の揮毫した「歩」という字を出してくれていたし、県政 12 年についても福祉行政にどうかかわったかにふれているので、私にとっても記念になる本だと感じた。今後炭鉱鎖山、失業、ケースワーカー、福祉事務など福岡県戦後五〇年を知る上で貴重な資料になること間違いない。今日の集会では田川の県立大学の城島氏がトップ・マネージをしていたし、保田井教授が福祉行政のもつ自己矛盾について行った講演はよくまとめたかったと思った。われわれの過去の突込み方の不足を教えられたように思った。福祉切り捨てが云々される現在、資本主義は福祉による延命策どころではなく、もっとはげしく尻に火がついた思いで福祉切捨て、大衆・弱者、弱国搾取を荒々しく打出さざるを得なくなってきたという見方が成立つ時が来たといえる。

3 月 11 日 (火)

引込み思案だけではいけない

「お忙しいでしょうね。この頃週にどのくらい外での用件がありますか」とたずねてくれる。引退した直後とくらべると、かなり少くなりましたが、「多ければ三日、ふつうは二日、一日しかない週もありますよ」と答える。意欲をもやさない代わり引込み思案の態度もとらないので、この程度が客観的かとは思っている。但し、この数年で感ずるのは主観面、客観面双方からの作用だろうが、ぐんと存在性が微小になって来たということである。仮に一つの表現だが、ひとは相手にしてくれなくなっていく。年末からのマスコミの動きに代表されるように積極的に抹殺しようという傾向もある。それで思うのは、マージャンであれ、ナツメロであれ、今日の NTT あり方懇であり自分をもっと積極性をもつ必要があるということだ。売って出て誘うことも試みるケースがあってもよい。女性フォーラムはこの三月で任期満了、チャンスが一つなくなる訳。主観的には老衰も進んでいるのだが。

3 月 12 日 (水)

甲という字

大字典で改めて甲の字を読むことになった。張耒(北宋時代)の詩に「蔬甲」という言葉がでてきたからだ。(3月22日の部)次のように書いてある。「象形、草木が初生の際種を戴き地上に芽を抜き出す」貌を象る、ハジメ、第一、ヨロモ、ヨロイ、十干の第一キノエなどの説明が加わる。カブトとも読む。カイワレをさすともいう。甲の字を字典で読んだのははじめて。中学生の時もその体験はなかったと思う。ともかく今日は納得できた。芽が出た野菜の甲の字になった形と思うと実に適した字だと思う。第一という場合、カブトという場合、その転義がよくわかる。このような勉強をもっとじっくりやっておくべきだ

ったとは思いますが、西欧からの科学に添って人生をころがしていると、こちらには時間がさけないし、無用の努力になる。しかしやはり今又評価し直しているように、われわれには必要な分野なのだ。

3月13日（木）

気にいらぬ日刊新聞

近頃、新聞を読むことに関心が大きく後退している。視力が衰えたのか、眼鏡が合わないのか、新聞を読むのが消極的になっている。どうでもいいという気持すらあるのに気づく。昨年以來マスコミに追いまわされた嫌な気分も加速している。中味がさらに気に入らない。官僚や財界筋の汚職めいた記事が満載され、広告がやたらと多い。新聞社がいい顔をし、安上がりの「紙」を作り、カネモウケに走っている。紙数（ページ）が多すぎるのに、減ページを考えない、型にはめこむ工夫がありありである。ひとの悪口を常に念頭にした記事で埋め、自己反省はない。「報道の自由」なんて勝手な自由主張に外ならない。ひと迷惑を考えたらどうだろう。消費税の三→五%値上がりで新聞も高価につく。「行革」の悪口は書くが、自分たちも合理化（行革）によって価格上昇に歯止めをすればいいのに、それはしない。新聞の自由は迷惑かけの自由だ。

3月14日（金）

用水の確保

三月も半ば。春の気配がいたるところに感じられる。雨の降り方まで春らしい。今日はかなりの雨が夕方近くまで近いた。それに私が気づいたはじめての春雷だった。草木はよろこんでいる。また都市の上下水道もしばらくは心配しなくてもよいだろう。水の大切さはいわずもがなであるのに、つつい忘れ勝ちである。都市部では小川、側溝などすべてコンクリート、もちろん道路の舗装も全面的なので降った雨は全部流れてしまう。街路樹はどこから水を得ているのであろうか。昨年ベトナムなど東アジア旅行をしたとき、これら諸国では飲用水に事欠いていて雨水は大事に自分で保存するのが当然ということだった。都市化が急で用水事業がそれに伴った程度に進んでいないためらしい。私どもはさらに違った水準で天水の利用に努力しなければならなくなっている。水、太陽の光、そして電力に一段と積極的に取組まなくてはならない段階にきている。

3月15日（土）

健康のこと

体調が一寸わるい。皮膚、打身、加えて近頃は消化器にも来ているようで、大便が少しづつ何回もということになっているのが気にかかる。食欲が平常なので、まず大丈夫かなと思っはいるのだが自信がもてない。先日の打身で両脚、とくに右膝の傷が問題のようだ。

天神など外出時にはバス停まで歩くわけだが、何とはなくビッコの状況がつづいているし、就床しても、何となく感ずるいたみである。自然になおるだろうと思ったのだが判断まちがいでないことを願ってる。共済組合の健保補助がこの三月で満二年終了になるので継続補助の手続きをしなければならない。内科、皮膚科、眼科、歯科のすべての分野に継続が必要である。近々共済組合の係りに出向いて手続きをしたいと思っている。新聞の訃報欄につい目がとまる。とくに、どういう人で何歳かが知りたくなる。私より一〇歳若い、もしくは六〇歳代の人も少くない。順番がくる。

3 月 16 日 (日)

年を重ねて今が気になるという癖

雪の宿主昔は昔はと	池田一步
町の子に麦踏といふ学習も	林 真澄
今年から転勤はなし屠蘇を酌む	古屋和夫

「万燈」句誌今年四月号「雑詠句評」からこの三首を抜き取った。池田さんのは、よくあることだが、まさか自分ではあるまいと思う程、われわれは昔をなつかしむ。逆に、今はダメじゃないかとの気持が裏にある。当然か、年寄りの歎きにすぎないか、もう少し時をかりよう。「末世的」というくせが私についてしまっている。物余り苦勞知らずで今の人はダメになってしまっている。ダメでも通用するようになっている。ラジオ器が作動しないので修理してもらおうという、殆んどの人が新品を買った方がいいですよとの声がかえってくる。捨てよ捨てよという。この姿勢に問題がないといえないだろうか。林さんの句、今の農村の子も麦踏は知らないのではないか。古屋さんの句、定年後余生をどうするか、準備の有無。

3 月 17 日 (月)

先を見る目のなかった人生だった

午後、もぎたての甘夏柑を食べた。何ともいえぬおいしさである。でも今年のは例年の半分ほどの数しかない。一年おきと思えば心休まる。但しこの冬に隣地に高いコンクリート塀がつつ立ったので、日照の減少で、こんどは期待できなくなるのではないか。今年の後経過を見たい。またこのミカンの隣に倭小なキンカンの木があるが、それが又例年になく小粒で実りも少ない。今日は全部もぎ取って甘煮にでもする予定である。コンクリートで囲まれてしまった今日の状況を二十五年前には予測だにできなかったのも、今は自分の見とおし才能のなさをつくづく感ずる。一三度といわれる急な坂道を往復するのは、この年齢になると、きびしいわが家の位置である。以前は運動になると、一面的にしか考えていなかった。これも見とおしの甘さである。地価の上昇など他にも同じ甘さ、鈍さもあるが、要は目ききがない一生だった。しかし平凡に、ゼロから出発してここまで来たのだから

ら苦情はいうまい。

3月18日（火）

漢字が語る

毎日のように漢詩を書写しているが近頃は内容又は文字の意味にも入りこんでみようと思っている。漢字は一文字の中に意味を含んでいるが、扁、造り、構成によって一文字の中に、既に叙述の内容をふくませており、長い歴史の中で文字が一層増加してきたようだ。今見ている本は五〇〇年頃から一七〇〇年代まで一二〇〇年にわたる詩で、「当用漢」字など限られた字数で表現するように教えられた者にはこの本でみる限りでも全く経験しない文字がどんどん出てくる。書き留めておくため大字典をひいて確かめているのだが、この字引は一万五千字近く出ているので、当用漢字の十倍近く多くの文字が出ている。この字典で殆んど確めうるが、何と多いことか。叙述しないで一文字でかなりなところまで表現してしまう。粼粼は水がすきとおって流れる様、裊裊は細く長く柔かく美しい（という形容）、渺渺、茸茸、陰陰、漠漠など同じ文字を重ねて細かい感覚をあらわす例も多い。

3月19日（水）

歴日に関心のない今の人間の驕り過ぎ

漢詩日暦の三月十九日を再現してみる。

正月二十八日峡外見燕子 楊万里

社日今年定幾時 (社日) — (立春、立秋後の第五の戊（つちのえ）の日、
元宵過了燕先帰 種をまき禾を刈る日とする

一隻貼水嬌無奈 (元宵) — 上元（一月十五日）の宵

不肯平飛故仄飛

社日とか元宵とか今の暦にし現世の人々の念頭にも全く現れない表現。燕が南からやってくることに関心ある人も今は殆んどない。さらに燕が水につく瞬間や平飛せず仄飛することへの関心はない。それほど昔（ここは九〇〇年前ぐらい）の人は暦や自然の状況に関心が強く、今の人は無頓着なのである。暦は自然と人の関係を法則的に循環論にして人の知恵の一部、生活必需の知恵とした。今の人は無頓着で自然破壊を平気にやる。驕りすぎではないか。しっぺ返しがあろう。

3月20日（木）

椿落つ

春分。ものの芽が一せいに出はじめ、裏庭をそぞろ歩きすると心地がいい。ジャクヤクの芽が勢いよく踊り出た感じ。梅がぐっと新芽をのぼす。ロウバイも、藤も花房の走りをみせてくれている。八重椿がバツバツと花終えて落ちている。地上でみる落花も見方に

よりけりで、いい面もあるではないか。ツワブキが新葉をぐんぐん伸ばしている。食卓で待つことにしよう。松の手入れを怠っているが、葉芽と枝芽を力強く準備している姿を見せている。一そう茂り過ぎるが、手入れは大変だ。「花ごよみ」春を見ると椿と俳句の項で落椿が一味あるように捉えられているのに気付く。

赤椿咲きし真下へ落ちにけり (暁台)

はなびらの肉やはらかに落椿 (飯田蛇笏)

朝夕の土うるほひて落椿 (西島麦南)

落椿われならば急流へ落つ (鷹羽狩行)

3 月 21 日 (金)

竹炭で砂漠化に対応

柳川の「お花」で六時半から二〇人ばかりの夕食会があった。希望学園の飯田氏が呉汝俊と共にアクロスに来て私に出席を申出た。今日は飯田氏と福岡発四・五五特急で行ったのだが、古賀一成代議士も呉徒勇総中国領事も出席していたが、みんな呉汝俊関係者といえる。近い将来彼の後援会を福岡県で作ろうとの話題も浮上しているが、筑後地域にもかなり支持者を集めうるようで、今日はその関係者の列席もあった。呉氏の顔の広さ、器用さ、小廻りエネルギーには感嘆させられる。竹炭で中国の緑化施に貢献することを考えており、四月中旬には北京に行って立花町の竹炭輸出の話政府側と詰めようと動いているように聞いた。私にも北京に行こうとの誘いがかかっている。半ば遊びのようだが、竹炭が今後話題をひろげるかも知れない。地球の温暖化のせい、中国では毎年九州ほどの面積が砂漠しているとの話が出ており、これは防止されなくてはならない。

3 月 22 日 (土)

結婚披露宴に出て

希望学園の理事長飯田氏の娘さんが、碓井中学校の先生である牟田口秀人氏と結婚。三時半からホテル・ニューオータニで披露宴があり招待されたので出席した。二者は同年という。三〇才をはるかに超えた晩婚に類する。披露宴には呉汝俊氏も来席、京胡の実演で花を添えてくれた。飯田氏の娘さん新婦も銀行勤務から父親の配下学園で音楽の先生をするよう転勤したというので両者、先生職である。いいカップルができたと思う。披露宴は三時間をこえるにぎにぎしいものだったが、昔は家庭中心で各界別々の宴席で二日も三日もかかったのと比べるとぐっと簡約されているといえる。第二の人生の門出だから、ていねいさと慎重さが必要なのである。慣行というものには感想はあっても、外に出して社会にさからうようなことはいいたくない。まずは安易に御破算とはいかない公認の新夫婦がスタートしたわけだ。がまんしろ、相手を理解せよとの祝辞もあった。当然のことだ。

3月23日（日）

雛祭りのこと

雛のことについて書いておこう。先日柳河の「お花」に行ったら総力をあげての雛飾りがしてあった。大変な思い込み、手間がかかっているが、四月三日には全部片付けてしまう。これ又大変な手間だろう。あたりに聞いても日本でいつ頃から始まったのか誰も答える人はなかった。小学館の日本国語大辞典から・・・「女子などの玩具にする小さい人形。紙・土などで作り、多くは衣服を着せる。平安時代には立ち雛であったが、室町時代にすわり雛となり、近世中期以後に今日のような雛人形が作られるようになった。近世では多く三月三日の雛祭りに飾られる」雛の節供、桃の節供ともいう。ひなの遊び、ひなの家、ひなの駕籠、ひなの客、ひなの使など語ができています。ひな遊びは、女の子が、ひなを飾り、食べ物を供えいろいろの関係器具を飾り、草餅、醴（あま酒）を錫に入れ、小蛤などたくさんに節供の礼ということで乗物に乗せて親戚などに配るが、これらは成人したときの稽古だといわれる。

3月24日（月）

資本主義が終りかかっている

筆を持つ時間は少くないが、読書や新聞読みにもっと時間を充てないといけないと近頃つくづく思う。本は手提げに入れ、新聞の切抜きはしている。でも読まない。必要性の感じが薄くなったのと、視力が落ちたからではなかろうか。いずれの老衰のあらわれといえるだろう。このような状況認識をバックに今日はレスターC・サローの「資本主義の未来」を五〇ページほど読んだ。意識する人は少いかも知れないが「資本主義」は八〇年代、九〇年代、西欧、米日それぞれに特長はあるが、どんどん変貌している。失業者の増大、貧富格差の拡大、貧困層の又はホームレスの著増、社会福祉の衰落などは先進国共通の数年来の顕著な傾向である。経済面との関係もあるが、高齢化、未婚、晩婚、少子化など新しい社会問題が爆的にふえている。地域連帯感はずっと薄れたが、今は家族機能が以前にくらべ壊滅に近づいている。先進諸国間で特徴の差こそあれ、一般化してきた共通問題だとの指摘をこの本で改めて教えられた。

3月25日（火）

欧米時代の終幕

コロンブスのアメリカ「発見」以来五〇〇年、フランス大革命以来二〇〇年が過ぎた現在、資本主義は将来を展望できなくなっている。ソ連が崩壊したので冷戦体制はアメリカの勝利に帰したかという点必ずしもそうではない。核兵器、化学兵器、宇宙ロケットはその行先を見失い、西欧文明も躓いている。ピサロが南米インカ帝国から強奪し、鋳つぶした金・銀、単なる重量の大きさに戻し文化を破壊したところにスタートをおいた西欧文明は到達

する所に来てしまっ先が見えなくなったのだが、その代表が今のアメリカではないのかと思う。金・銀を人間の精神作用の媒体から単に重量の対象にし、金銀に代って紙で貨幣を表現するようになって、その極限から二十余年、そろそろこのような世界秩序を作ってきた西欧文明は終点にきたようだ。アメリカの沖縄軍事基地政策に追従するほかの道知らぬ橋本内閣も同じく日本の政治、文化のあり方の終点を予告しているようだ。

3 月 26 日 (水)

ロシアの現状一端

馬原の呼びかけで、夜清川町の若鶴旅館でロシアのコーシキン・アナトリー氏の話をしきく会合に出席し、ソ連崩壊後のロシアの無政府状態について、実情の一端をしきく機会がえられた。貧富の差の拡大、権力乱用の状態、市場経済の不在、医療、教育、福祉の崩壊、殺人、自殺の急増などあらゆる面で無政府そのもののようだ。働くしかないが、賃金が支払われないケースがいくらでもある。大統領エリツィン自身、無政府、ごまかし、ウソの世界の頂点にいる。誰も信を託しているわけでもない。混沌の中でうまく泳いでいる。しばらく後には、ぐっと右か、ぐっと左か、強力で信頼のおける権力者が現われるのを一般住民は待っている。待つという期待すらもたない。ストライキが起り、拡がり、強盗強奪が拡がり、どこに落付くのか一寸先は暗いという。何が価値規準か説明がつかない。政治、経済、一般社会、人間関係に判断の規準がなくなっている。無政府そのものが現状のようである。

3 月 27 日 (木)

女性フォーラム理事長引退となる

新年度に向けた行事が重なる中、今日はアジア女性交流研究フォーラムの理事会で新年度事業・予算を決定すると共に役員の変替も大きな議題であった。その中で理事長の私も任期満了で引退することとなった。後任はさきに理事長で最高裁判事として東京に出た高橋久子氏が戻ることになって再び理事長となる予定。二年間だったが現今における女性問題について関心を深めるチャンスがあれこれ得られたことは、私にとって大変いい勉強になったと感謝したい。そして引退することについても全く未練が残らず、さっぱりしたことを改めて感じている。もういい加減な年なので、公的な立場で心身を使うことは限界に来ているよう自覚している。次なる人に譲るのは当然であろう。心身ともに衰弱しているのだから、仕事のもつ時間、能力などの限度を知って自覚する必要がある。小倉まで義務的に出かけることすら荷物に感ずる最近である。そういう動きをするにも、補助する人が必要なほどなのだ。

3月28日（金）

危機を予感させる春

レンギョーの花盛り。桜も九分どおり満開に近い。早々と開花のヨドガワもある。木々の新芽も目立ってきた。木犀、梅、ローバイなど、若い人達は新学期にそなえてそれぞれにかけまわる。社会組織や政治行政の面では苦渋がつづいている。経済団体の改組がつづいていてリストラの話が巷にあふれ、消費は伸びず、失業者ホームレスの話がちらつく。治安の心配もあちこちでみられる。北九州の女性フォーラムにつづき、アクロス福岡の新年度予算はかなり圧縮、県も市も緊縮予算なのである。国債の赤字が世界各国に行政リストラを止むなくさせている。社会保障とりわけ高齢者対策が目に見えて危機感をつのらせている。こうした社会問題を考えると、とくにわれわれ引退者にとっては、春だ花見だとはいっておれない。どこかで自主的な解決策のシステム意識を回復させなければ二十一世紀は危険不安の頻発する時代になりそうだ。

3月29日（土）

さんきゅう会に欠席

（龍野中学39回生会には出席の気持湧かぬ）

小雨の一日。満開の桜花なのに雨とは残念。しかしアロエ移植後だからこれはいい雨、根が張りやすいと頭の中でアロエの根をえがいてみるわけ。龍野中学校の同級会が五月中旬に神戸で行われるとの案内状がとどいた。けれど行く気がしない。もう六〇年も昔の同級生だが、それぞれがそれぞれに暮して来て頭の中もかなり変わっているだろう。個性が強くなり。ゴツゴツしそうに思える。逝去した者も少くない。消息不明の者もある。一切交信に応じない人もいる。私はちゃんと返事は出す。戦後高等学校に制度変えになった時、県立高女と合併になり、母校という気持が吹飛んだ。もう十年も以前か？中学校時代を思い出し数人のクラス同窓者と訪問したとき、冷くあしらわれたその受付を思い出すが、それ以来、私の心も母校意識が消し去られた。もう母校・同窓はないのだと自分に強く印象づけたのである。五月の同窓会（さんきゅう会…39回生の意）に行く気にならないのも一理ある。

3月30日（日）

資本主義の未来をどうみるか

近頃レスター・C・サローの「資本主義の未来」（山岡洋一・仁平和夫訳）を読んでいる。資料がたっぷり使ってあって示唆に富む本である。ただ、未来どうなるか明確な立言がない。仕方がないといえばそれまでだが、何か指摘があるだろうと思ったので買ったのだが……日本はバブル崩壊後の長い不況で世界経済の第一線から退いたし、もともと何かにつけ世界的な指導性、魅力、共通認識がもちえない国である。アメリカの実力がリーダー

としての役に立たなくなり、資本主義と共に終末に来たというのが彼の指摘の根底にあるのだが、「わからない」というのが結論のようだ。イギリスでもない、フランス又はドイツでもない EU である。だが、グローバル化、国際化が進む中で「国家」民族をこえた経済の力量だけでリードができるかどうか大きな疑問が残る。宗教も文化も要件に入ってくる。EU 自体、通貨をはじめ国債、税金、金融、失業、社会保障など、統合不安は大きい。

3 月 31 日 (月)

アクロス福岡が困った空間を提供している！

今日アクロス福岡に民間からの協力派遣職員五人の二年期間満了辞任発令状交付式のあと数分歓談したのだが、話題の中に大きく出てきたのが、館内に居坐るホームレスのことだったのには驚いた。市民の憩いの場としてのアクロス福岡といえば聞えはよいが、ホームレスの巣になっているということ指摘されると、びっくりする。利用できる空間、器物など不足はないので「巣」にもするわけである。同じ人が何時間も空間を独占する。何かわからぬ袋を傍においている。周辺は異様な臭いがする。ポケットに飲物・食べ物を用意していてかくれた仕草で飲食する。便所、水洗所を利用しつつヒゲ剃りもする。こういう人に退去の声をかけるには一寸勇気が必要である。昔の乞食と違って言い訳や反論もする。知識水準も低くない。物質を特定した不自由はない。要はホームレスなのである。私は対応をきびしくすべきだといっておいた。後の人事でどうなるだろう。ホームレスとは別に若い男女アベックが人前平気でいやらしい事をする場にもなっているという。

4 月要記

考え直さなねばと思うこと。一つは公職引退後深まりゆく孤立感。もう一つは自然、又は花鳥の春季に随する動きに対する人間の勝手な感受表現。また分野は違うが、アメリカが代表する世界の流れ。第一の孤立感というのにはいくつかの原因があろう。一つは周辺の人達の敬遠、これはわれわれが既に世代の古い人間になってしまっていて、二〇～三〇年の差では話や興味が合わない。多くの有力者はこちらに目を向けることがぐっと少なくなった。それに加え、当方もどんどん消極化の生き様である。私はよく化石になったといっている。近代化、高度化していく物質生活にはとてもついていけない。ワープロや携帯電話、さらにはツーリズム……。次に自然に対する態度であるが、近頃漢詩を墨書する時間が多いので気づくのだが、唐から清の時代に至る詩人達が実に花鳥月風、梅、雨、雪、螢、鶯、馬など何をとりえても当時の人間として捉え方、その表現がすぐれていると思う。現在町でビルの谷間で雑沓する中の一人、自分だけしか考えないグループ又は家庭の一員として、こんな豊かな情緒が動かさないだろうから、自分だけでも「人間回復」に気をつけねばならないと思う。第三に指摘したいのは沖縄問題に関連しての対日米軍への特措法の制定である。アメリカが世界のあちこちで口を出し手を出してきた二十世紀は核を代表に、もう

通用しない時代にきているのに、最後の足掻きをやっているようで、限りなくみっともない。

4月1日（火）

次なる社会を模索しよう

レスター・サローは、次なる社会がどうなるかわからんといっているがその通りわからな
いといえる。しかし、問題がそこまで煮詰ってきているのだから、こうなると思うという
示唆ぐらいはせねばならない。予兆があるはずだから、いろんな現実の中で、どれが予兆
だといえなくてはならない。私は少し前から協同システムを指摘したので、ここでもそれ
を繰り返そう。資本主義でもない社会主義でもないことははっきりしてきた。貧富の差
の拡大、弱肉強食の時代は行き詰った。自由放任も許されない、逆に社会主義中央強権支
配も許されないのだから、自由に平等を求め、絆を求める情報時代、グローバリズムの時
代に共通の関心と努力を惜しまない人間の絆といえば協同の網の目である。各人は自由に
あらゆる協同の輪の中に入ることができるようにならなければならない。そこには、失業
も無力者の社会保障（双方とも資本主義の産物）はなくなる。

4月2日（水）

頭から足まで老衰だ

ひとから、元気ですねといわれるが、頭のとっぺんから足先まで一途に老衰ですよと答え
るのが近頃の私である。地方公務員共済の延長期間も二年経過して、次は国民保険に入会
する手続きが必要になってきたので近々区役所に行かねばならない。頭からいえば、近頃
の物忘れのひどさに我乍らびっくりである。世界地図で知っておるはずの地名がでてこ
ない。草花の名、名刺交換したことのある人の名などなど。八〇歳近くで痴呆症になって
いる親の世話に困っているという人に昨日話をきいて、己れをかえりみた次第である。長寿
必ずしも幸福とは限らない。次は視力だが、眼鏡のこと白内障のこともあるが、放置した
ままになっている。その次は歯。これも対応を怠り義歯は全面的に作りかえねばならぬ程、
生きた残り歯ががたがたになっている。糖尿、肝炎は既に不治の段階だろう。投薬で対応
しているだけである。近頃ひどいのは背、足の痒みのひどさ。

4月3日（木）

グローバリズムをひた推しする？

レスター・サローの本を少しずつ読んでいるが、どうも彼の意見は資本主義の行き詰まり
を防ぐため大資本、世界企業、新技術などの行動にカセをはめている国の規制、小企業保
護、社会保障、労働組合活動などを払いのけるしかないといっているようだ。米の自由化
により減反、農業放棄はやむをえないし、大店法をなくし、小商業を消滅させる方がいい、

首切りや賃下げは阻止すべきではない、大企業の併呑、中小企業の閉鎖は当然というような立場で書かれていて、それで資本主義の未来に光明を期待しているようである。国は少数の企業の希望に沿ってグローバルを推奨すべきだし、外国の大資本に門戸を開放すべきだという。それが結局は消費全国民に利益を与える「民主主義」につながるという。日本はまだまだ国の規制が多すぎ、労働組合を是認し、過剰労働者を企業内に抱え、国民に高価なものを買わせている云々。

4 月 4 日 (金)

健康の心配あり

依然気になる健康だが、近頃睡眠不足がつづいているように思う。自由の身だから時間のゆとりはあるのだが、朝は五時すぎに覚めてしまう。起床しないで、うとうとしていたらと思うが可能な日もありつつ、六時過ぎには起きてしまう日が多い。七時間以上は床の中で眠りたいのだが、それ以下の日が多い。ただ日中に心配する状況ではない。もう一つ、C 型肝炎のこと。今日近藤栄次郎氏と話すチャンスがあったが、私が肝炎のことを告げると、それは危険な病気で、ころっと死んだ人の例があると彼は説明した。済生会病院でお世話になっている身であり投薬についても気をつけてくれていると信ずるのだが、C 型というのは何時大事に至るかわからないというのが事実かも知れない。医師の方は心配しないようにと私に説明をしないことにしているのかも知れない。ただ私自身生命にこだわる積りはないのだ。

4 月 5 日 (土)

春宵一刻值千金

今日の墨筆作業のなかに、蘇軾の有名な詩を入れておいた。

春宵一刻值千金 花有清香月有陰

歌管樓臺聲細細 鞦韆院落夜沈沈

これは漢詩日曆の四月八日のページにある。蘇軾は蘇東坡 (号) 居士ともいわれ、北宋、一〇三六——一〇一年との注がある。九〇〇年も昔の唐宋八大詩人である。春が来るのは人間の普遍的な楽しい待望である。春は霞や小雨も多い。月有陰というのはおぼろ月の表現のようだ。聲細細とか夜沈沈というのは中国ならではの表現だと思う。どんな説明も無用で読む人が自分の体験で音楽の耳への響き、夜の静寂さの脳への当りを自覚するだろうとの漢字の使い方である。前半を前提に、あと半分が訴えられているのがよくわかる。

4 月 6 日 (日)

恩が仇に

生活保護や失業対策に倚りかかってくる人が少なかった時代、又県営住宅の家賃支払い

を怠って平気な人があったりした。このような安易な行政依存心はなくしなければならぬ
と思ひ、福祉事務所をはじめ県の関係職員を督励して不正受給取消、家賃滞納整理に力
を注いだ知事時代を思い出すが、生活保護はぐんぐん減少し、年に三〇～四〇億円の国費
節減になったように聞いている。あれから一〇年と大ざっぱに見ても三〇〇億円前後にな
ろう。厚生省は福岡県行政の努力を評価し、その気持を裏に県の補助金・旅費の増額で見
返り予算を付けてくれたのではないか。県職員の側からは旅費増額を消化するのに困った
程だったらしい。それが今回問題の公費不正消化の一端になっているようでもある。厚生
省もはっきり増額の趣旨をいってくれておればと思うが他者との関係でいえなかったのか
も知れない。恩が仇とは・・・

4月7日（月）

食餌の偏向

夜高宮の「梅の花」で、国技振興会総会の打合わせを兼ねた食事会があった。北島さんは
例によくあったように、チャンスさえあればグリーンレボレの宣伝発言をする。他の出席
者四人のうち聞いてやっているのは私だけ。「梅の花」を選んだのも彼女らしい。豆腐と海
草ばかりの皿が次々に運ばれる。一般に栄養多過の今日、自然食に近い料理を選ぶのはグ
リーンレボレの推奨傾向に一致する。われわれは美味だけを追って、栄養多過偏食へと向
っている。一〇〇年も昔の人はもっと自然食や野菜、青物を日常食としていたに違いない。
スキヤキなど年に二～三回食べられたら有難いごちそうと思ったのに、今日はいつでも手
の届くところにある。大麦葉の粉末化したのを特に口にしなくてもよいはずだった。この
ような偏向、都市化、高級化それらは、地域や家族の人間関係の稀薄化、食餌の商品化、
簡約化に通じている。もっと昔を思い出し、人間の基本に立ち返るべきだろう。

4月8日（火）

軍事も経済もアメリカの一部に組込まれていく

企業が自由自在に雇用を減少させ、競争に勝たねばならぬ時代である。労働組合は賃金な
どの雇用条件、雇用そのものについての発言力、抵抗力を全く失っている。「連合」の時代
である。橋本首相の掲げる経済構造改革プログラムは、規制を緩和し企業の競争力を高め
るのが狙いで、市場原理を徹底させ、日本の企業社会をアメリカ並みの弱肉強食に近づけ
る方策であるといわれている。日本の失業率は三%余。欧米のそれは一〇%。この違いは日
本の企業の中に、中間管理職を代表とする過剰雇用が数百万人いるといわれ、今後こうし
た雇用がをどんどん切り捨てていく方向に走り出す。自由化、規制緩和、グローバリゼー
ションという言葉が「よきこと」のようにどこに行っても納得的に使われているが、それ
は軍事部門同様、経済もアメリカの一部分に組み込む流れというしかない。この流れは遠
くない将来迷路に突入することになること明らかである。

4 月 9 日 (水)

社会の問題に対する関心、情勢薄まる

朝のうち、二〇日余りたまっていた新聞スクラップを整理した。よく考えてみるとスクラップは書き止めておくべきと思った数字(統計上のが多い)がのっているとか、とくに関心のあるニュースがどう解説してあるか、読み直してもう一度頭の中で整理しておくべきだと思った事項について切り抜くのである。三池炭鉱閉山、返還時期の迫った香港、企業リストラ、金融再編(日本型ビックバン)、年金など社会保障の展望、男女均等などが近頃スクラップした事項である。外国との問題は沖縄の「特措法」安保、米駐留軍兵力固定、ヨーロッパ問題(EU)そこでの通貨や企業リストラ問題がある。しかし、思うに、もっと以前なら早速ノートしたり、専門的に突込んだ態度で臨んでいたのに、近頃はこうした問題への取組みがのろのろしているように思えてならない。いわばどうにでもなれ、という気持がどこかにあり、こまかく正確に知らなくても、己れを試す場もないので、不可避ではないと思っている。それだけ関心が薄まったのだ。

4 月 10 日 (木)

平凡人の国際交流

思いつきの国際交流についての新提案をしてみたい。われわれは島国という条件のもとで国際化を考えるのが普通だが、世界的レベルでは異なるのではなかろうか。日本の国際化はまず政府が OK かどうかであり、中国との交流も国交正常化が前提のように感じさせられた。「北鮮」や「台湾」対しては未だ障壁があるように思われている。他の聞き馴れないような「国」との間はどうだろう。われわれはすぐ「国」といってしまう。そして国と国との交流が先導者となる。国の次に政治団体、有力団体、学者、スポーツ家、その他経済団体、各分野の専門家の交流等々となる。平凡^マ普^マの民間人は何かの役目がないと交流人になれない。せいぜい外国ツアーに参加することだ。そこで提起したいのは、平凡普通の人でも工夫と熱意があれば交流の主体者になり得るようにすることだ。今度、北京に行くチャンスにこのアイデアをふくらませる道を探りたいのだ。

4 月 11 日 (金)

無関心と迷いのインテリたち

夕方天神に出ようとしていて六本松バス停で横田耕一教授と面を合わすことになり、警固神社前でのバス下車まで雑談に花が咲くことになった。彼は定年まであと三年という。二十一世紀の区切りで退く。社会科にいたグループでは今は刀田、福留、高田の四人しかいない。事務局、とくに図書館には女性のファン職員が多いとのこと。学生の気分は隔世の感、教授の論潮だってマルクス主義の生きていた頃と違ってみんな平凡な逃げの学者ばかり、沖縄問題だって知らん顔という。私はボーダレス、自由化、国際化、グローバリズム

という言葉が素直に受入れられて誰しも国家観を変えてしまったのではないか、アメリカの世界支配をあらわす論理が作る言葉が無批判に受ける時代になったのではないか、労働組合は機能しなくなったし、規制緩和が正義と思い込んでいる風潮、その中でバブル崩壊後のビッグバンの進行、あと二～三年で別の社会になった事が明らかになると話題を出した。

4月12日（土）

文化とエゴイズムの反省

新聞のコラムに、近隣関係について諾否がかんたんにはできそうにないとの趣旨がのべてあった。昨日は、国というものについてふれた積りであるが、われわれは日常与えられた環境と伝統のもとで、歴史的示された概念について、常識的に使われている言葉を当然として無批判無反省に使っていることが少なくない。都会の集合住宅に住みはやがやした職場で毎日働く者にとって、農山村の自然や近隣関係を羨しく思い、そこに住む人に気持を伝えたら、きびしい反論がかえってきたという。自然はいいなといっても人工のよさを思う人の気持がわからない。更に農山村の近隣の人間関係のよさといっても、そこにいるために、平素どれだけ己をまげなければならないかを理解してくれないと困るというのである。自然のもつ荒々しさ、社会の中での没個性に気が付かなければ農山村には住めないわけだ。近代化する以前はみんながそうして来たといつてよい。文化と個性（個人主義）を先行させるなら都市生活しかない。問題は今日の行き過ぎへの反省ということであろう。

4月13日（日）

北京ゆきの目的、日程がはっきりしないまま参加

今回の北京ゆきは立花町で試作している竹炭を中国側に寄贈すること、並びに民間交流の再活性化をはかることを目的としているが、今日の出発に至るまで、日程や訪問先、当方旅行団の名称、団員の役割がはっきりしないままの出発になってしまった。私が参加の気持を固めたのは呉汝俊の要請と飯田氏の取りなしによるといってよい。あくまであいまいなままである。小郡の松尾氏が背後にいて努力しているようだが、私には声はかけられていない。彼は女性参加者四人の組織者らしいが、事務総括者であると思っていたのに、それができていない。形を作ったのは呉汝俊氏の力によるといえるかも知れない。だが彼が竹炭に関与するのも筋が通っていない。ともかくあいまいな旅行であることには変わらない。師村氏は、こうしたあいまいな「企画」に乗らぬよう私に忠告したことがある。ただ師村氏も呉氏の動きにはじめから疑問をもち、呉氏はそれに反撥しているようだ。ともかく私はどちらにもつかぬ気持で参加するのだ。

4 月 14 日 (月)

広い土地、深い歴史に立つ中国を感じる

中国というところは広くて深い。限りがわからない。住民は国というものを考えているだろうか。国境をどう意識しているのだろうか。反面、人民大会堂とか天安門広場を見るだけで、他国に例をみない巨象を政府が意識していることは確かである。個々の国民の発想から出てきた都市計画ではあるまい。室内装飾も巨大さを前提としている。反面、みやげ物店などにみられる装飾玩具類は日常生活そのものの平凡な表現でもある。近頃は国家観というものが気になるが、中国に来て更にそれを思う。この広い広い国をまとめているのは何だろうか。逆に中東、ヨーロッパ諸国をあんなに、こまごま分れさせているのは何によるのであろうか。民族、宗教、言語のほかに経済利害や権力波及がものをいっているのであろうが、中国を分解するものは今はたしてありうるだろうか。中国の人民はあれこれ気にしない。今日は今日、明日は明日というおおらかな気持で、その日その日をすごしているように思える。草も生命、牛も生命と思えば、くよくよせかせかする必要はない。そうであるなら拍手をおくりたい。

4 月 15 日 (火)

12 月の私の個展 (書展) 企画について

今回の北京ゆきでは、呉氏から私に揮毫したものを何枚か贈呈用に用意してくれと頼まれていたので、大小 16 枚持参した。北京では全部呉汝俊に処理をまかせたが昨日今日夕食懇親会の時など雰囲気を見ながら若干配布されたが、一応効果はあったと思う。関連して彼は私の書の個展を今年十二月上旬に人民広場横の博物館の一室を借りて開催するとの話を進めているという。しかしこれは私にとっては困ったことである。展示会などする能力はありえない。費用もどう対応できるかわからない。やるとしても私のほかに他の同好者の作品も加えられるとよいとも考える。とにかく大変なことになりそうだ。一〇〇点ばかり作品を作るにしても、これから先多忙きわまることになる。このような付属品がつこうとは思ってもいなかった。努力する、ベストを尽すほかはないだろう。在庫の作者の筆跡をよくよく見ながら、すぐにでも作品にとりかかれるよう努力したい。書家とか専門家でないということを、くれぐれも呉氏に伝えておいた筈である。判っていると彼はいていた。

4 月 16 日 (水)

事務総括ができてないと思われる今回の訪中

北京は青空がつづき、今日で終る今次訪中の旅も予想外に暖かい中で日程が消化された。ただ、事務的には欠点が多かったというしかない。私は顧問という位置におかれていたが、日程を客観的に明かにした一覧表がない。参加者は男六人、女四人だが、名簿がない。報道関係の堀切氏が東京からとびこんだようだが、何者かわからない。ウイスコの山本氏に

しても何の関係かわからない。あと、立花、松尾、飯田、奥田だが、体験的にわかっていくような程度。走りまわって世話を焼いてくれた呉汝俊氏が、訪問先やアポイント、会食準備など全部してくれたので何とかここまで来たんじゃないかと思う。パスポート、ビザの扱いも旅行者抜きでやったので呉氏が忙しく立ちまわっていたようだ。運賃、ホテル代、会食費などどう処理されているのかわからない。松尾氏が全部やるんだと思っていたら、彼にやる気もないし、能力がありそうにもない。一行の行動に必要なバス、乗用車各一台はちゃんと動いてくれたが、それがどこから差出された車なのかわからない。竹炭贈呈目録も私にはわかっていない。

4月17日（木）

中国を深く見よう

一見しただけではあるが北京の町はさすがに広く活気に満ちている。何となくドス黒くおけているという以前の印象は全く改められた。巨大なビルが建ってはいるが、ひしめき合い林立するという形容はあてはまらない。ゆったりと、そしてどっしりしている。町のにぎわいも人々が詰めかけたというにぎわいではない。福岡では求め難い姿である。土地の広大さとか、所有権、利用権、投資方法など種々要因の差によるところもある。ただまとめていえば、資本主義でないということ、弱肉強食の放任ではないということ、利益追求が原則だということ、そうした西欧式資本主義でないということに集約できるのではないかと思う。だからわれわれは安易にある点を取り上げて批判してはいけない。もっと大きくいえば、アメリカは中国を馬鹿にしてはいけない、日本は主体性を捨ててアメリカに追随してはいけないということである。社会保障など、こまかくは追々勉強したい。農業問題、教育問題など知りたいことは山とある。五日間の北京ゆきの感想である。

4月18日（金）

相互不信は早く解消を

森山氏の話では師村妙石氏と呉汝俊氏が相互に行動を牽制し合っていて、私が一方に巻き込まれることのないようにということである。師村氏が森山氏に今回の北京ゆきについて呉氏への不信を披露したようだ。北京ゆきの旅の中で呉氏の方から師村氏への不信を何回かきかされ、私には唐突な思いはない。ただ、かなり深刻だとの感がある。森山は師村側に立ち、呉への不信をいっている。私も呉氏が演奏という域を出て実行界的にのめり込んだ姿勢をとっているとの批判的感触はある。実際に今回の北京旅行についても松尾氏がしなければならない分野まで、松尾の欠陥を補うために奔走しているように感じられた呉氏である。森山氏の見方からは何か不信なものが背後にあるという。否とはいえないだろう。ただこれとは別に師村対呉の相互不信は早く解消しななければならない。それが本筋ではないかと思う。相互不信のいきさつをもう少しわしく知りたい。ののしり合うだけでは

互に迷惑ではなからうか。双方共通の問題点があるかも知れない。

4 月 19 日 (土)

女性フォーラムでの東南アジア視察報告会

女性フォーラム (5F) で、昨年末の東南アジア視察旅行の報告会が行われ、団長の私、専務の三隅、事務担当の石橋、理事秋枝、山口の五人一団すべてが出席した。予めくわしい報告書ができていたので、予習材料になって助かった。五人の発言はほとんど共鳴し合う点が多く、三隅専務がスライドを用いて概要説明してくれたので、他の人は印象深かった点の強調の形になった。開発途上あって世界的にも注目されているところだが、国内紛争の後遺症、開発による貧富差の拡大、貧困の女性問題化、教育、少年問題、衛生環境問題などが共通して強調された点である。いわば世界的規模での資本の我利の侵透現象といってもいいのではあるまいか。ODA、NGO などの形での日本の貢献も共通の関心事ではあったが、日本はあとの面倒見が悪いという点が再強調された。日本の対外援助といっても、それは日本の大メーカーの市場開拓に通じ、そこに止っている点が指摘されているのである。電機製品を供与するが使いようがなく、雨ざらしになっている等々。

4 月 20 日 (日)

書法展をみて思う

読売新聞主催の九州・山口・沖縄地域の女流書法展関連で有意義な日曜だった。漢字、かな、篆刻の三分野に二九〇〇点応募があった今年の十三回、入賞入選者は一二二人。かなが多かったが、それぞれ力作揃い。選者の一人師村妙石氏も来ていた。何彼という資格はないが、私が気がかりなのは、こうした芸術会では、誰しも、誰もが気負い、競いの気持を陰に陽にもっているということだ。何段だとか、何賞とかいうことにあらわれるし、実生活との関係が遠くなっていくのに懸念がなくなっていつている。それでいいんだということであれば、話は別である。逆に実生活のためのものならば芸術にならないということだろうか。中をとって私は芸術のための芸術と実際生活のために用いられた芸術とがあっていいと思う。あるいは実際がもっと芸術を利用すべきだということであろうか。ところで、今日見た書法の中にひらかな表現の和歌が多かった。万葉仮名が一ぱい使ってあって、素人には今はとても読めない。読む必要なしというのであれば別だが、それなら書の意義は半分捨てられ、姿の美しさの顕示競争になる。

4 月 21 日 (月)

旅費等不正公金返還をめぐる不信増幅

今日は職員給料日で、いわゆる「旅費等公金不正使用問題」への返還金支払いが給料からの差引で始まる。ところが私には一六〇〇万円というとびっきり巨額が要請されていなが

ら、関係者又は事務側から全く連絡がない。昨日アクロス副館長の森山から払込用紙が届いているとの連絡が今日理事長室に行き、始めて用紙なる客観的なものを見たのである。返還協力受諾は伝わっているのだから、依頼文書、返還方法、手続き、期限期など誰にもわかるように、客観的なものを作って持参又は送付するなり、誰かが面接を求めるとすべきと思うが、全部ウヤムヤ。顔と顔、気分と気分で行っているようだ。マスコミは、目を輝かして成りゆきを追かけ、コストのかからぬ記事にしたいようだ。この件については全マスコミの態度、対応関心に不信増幅、嫌悪拡大の実感が私の頭に焼き付いたし、返還協力手続きについては県職員当局又は OB に不信が焼き付いた。県庁関係には一切「否」との態度をとろうと思う。

【六甲ケーブル・六甲山ロープウェイ連絡片道乗車券挿入】

4月22日（火）

当面の暮らし方要望

平素あまり話題にならないのに今日出てきた夫婦間の話。県の方に支払った一〇〇万円は十六回払い。四〇〇万ずつ四回という予定の変えたのは現知事のやり方に準じたのだが、当方としてはささやかな抵抗だ。一括払いも不可能ではないが、十六回に分割するという事。生活は何とかあるので見透しは失なわないが、県側の対応、には納得できぬ怒りが残る。金銭上は生活をつづけるための心配はないということ、また年を重ねているのに歩くときは十分に用心して躓いて倒れないようにという話、骨折して杖をつくようになっていく人の例が話題になった。段差をなくす高齢者向けの住宅改造も実行されている今日である。もう一つは書物などの整理。何とか片付けることに早く努力し、部屋を元来の用途に戻し、ゆとりある姿に戻したい。近頃高齢者向け特殊老人ホームが求められてはいるが、経費が大変だから、現在のわが家に住みつづけるのがいい。その為には物置のような状況をどんどん片付けることが必要だろうということだ。

4月23日（水）

新緑と落葉

木犀の

若葉伸びゆき

古葉落ちる

葦水

新緑が萌え出づる今、常緑樹の葉がどんどん落ち、街路のあちこちで落葉掃きに努力している人が見られる。ヨドガワツツジの満開ばかり鑑賞してはおられないのである。病院からアクロスに行く途中の中央公園でも今日つくづく感じた。新旧交替が進んでいるのだ。

つつじとかモチの木はわかりにくい、樫など代表的なのがある。常緑樹も葉が落ちることを知っていて、と以前いったことがあるが、新緑の時落ちることに気づかない人が少ない。秋の紅葉とか落葉を感じとるのは誰しも当然だろうが萌え出ずる新緑の中で感ずる人は少いようだ。いずれにせよ私は近頃こうした落葉について生命というものを考えさせられる。輪廻と表現することもある。旧が静かに新に交替している。人間社会でもいたるところ、これが見られる。これを自覚しなければならない。自覚すればこそ人生を知ることになるのではなかろうか。今日中央公園を数分歩き乍ら考えさせられた。

4 月 24 日 (木)

核燃料、プルサーマル計画など勉強せねば

近頃の先端技術の世界は私にとっては知らないことばかり。関心をよせず頭に入れようとしないからで、自分自身「化石になってしまった」といいつづけている。筆を握って唐時代の詩を半紙に書くのに時間を捧げている身だから「化石」といっていいだろう。ところで「すくらむ」の今回四月号には、新世界の諸問題がぎっしりのせてある。核燃料・プルサーマル計画についてほんのちょっぴりでも読んでおきたいと思った。「いま世界的に余剰状態にあるプルトニウムを軽水炉で燃焼させるという計画」とはいうが、プルトニウムや軽水炉についても少しは知っておかないとこれまた話にならない。橋本首相が二月下旬に新潟、福井、福島の子三県知事に計画への協力を要請した新聞記事が紹介されていて、これは「危い」との説明なのである。「もんじゅ」「動燃」の事故をふまえてであるが、当局は隠したが。冷戦崩壊後はますます核処理の見とおしが困難になってきている。人類終焉すら考えられるといった筋道について、高速増殖炉、濃縮工場、軽水炉などと共に勉強をはじめよう。

4 月 25 日 (金)

新天町界隈の過剰流通業界

午後国技振興会の年度総会が九電ビル地階で行われ、あと新天町ギャラリーで行われている矢野鈴子個展へ呉汝俊氏の案内で歩を運び、冗談半分で私が書かされた揮毫と彼女の即興作、私の似顔の色紙を交換した。思いがけぬことだった。呉氏と別れたあと新天町界隈を一寸歩いたが、大通りは平素から少しは見ていて、三越や大丸その他の大規模ビルによる変容ぶりはうすうす念頭にあったが、西鉄レールの西側、ソラリヤに加え、岩田屋の別館ができ、町の様子が一変してしまっているのには全くの驚きであった。駅の方でチャンネルシティが人を呼んでいるとか、アクロス福岡が建設されて変わったとか、ここ数年間の動きとは別のうごめきだと思った。ただ、新しい岩田屋に足を踏み入れて感じたのは競争過剰という一言につきる。巨額のコスト覚悟の客寄せ販売合戦をしているが、行き過ぎというほかはない。不況に耐えられるだろうか、それほど客が集まるだろうか。

4月26日（土）

羨しい「春眠不覚暁」

近頃は漢詩日曆三回書いたものうちとくに不満が残る一回目について、書きかえをしているのだが、延々とつづく。十分意味を捉えないで書いていて誤り書きがたくさんあるのに驚いている。書きかえてはいるが、まだ気付かないのが多く残っているに違いない。ところで岩波新書の「新唐詩選」を手にとって、一寸気付いた逸品が目にとびこんできたので、ここに記しておこう。

春暁 孟浩然（六八九一七四〇）

春眠不覚暁

處處聞啼鳥

夜来風雨聲

花落知多少

暁を覚えずというのは今の自分にとっては恨しいことだ。元気な人は誰も不覚暁といえるのに、頻尿のせいで早くから覚めてしまう。何とか床に就いていようと努力する。だが、六時には「もうよかろう」と思って離床する。孟浩然是湖北省襄陽の土豪、名望家として一生を終えたといわれる。

4月27日（日）

「古樹侵雲」（李夔）

表現の妙を思う

墨場必携をみていたら補遺の部分に「古樹侵雲」というのがあって思い出した。県庁秘書室につとめているある女性に、これを紙片に書いて「面白い言葉だよ」といって渡したのだが、彼女には何の反応もなかったので、残念に思った。三～四年前のことだ。李夔^{ケン}という人の言葉のようだが、私には主客の顛倒がおもしろいと思われた。物を見るとき、時には顛倒があった方がいい場合が少くない。合理主義からは許されない顛倒である。雲が主体で古樹を包んでいるというべきだろうが、李夔は逆に雲を侵すと表現している。そうあってこそ、古樹も雲の役割も生きてくるのではなからうか。古樹があつて、そこに雲がかかって面白い、美しい動く瞬間が表現されているのだが、やはり雲の動きが大切であるのに、これを受身にとらえている。文化人でなければできない発想なのかも知れない。ともかく私はこの四文字に感動させられる。中国の詩人は情景表現が実にうまい。まねてみたいと思う。

4月28日（月）

社会から疎外されているとの自覚をもて

近頃、新聞が面白くない。テレビは無関心になって久しいが、新聞はここ一年ばかりだろ

うか。よく考えてみると、新聞世界からも己れが縁遠くなっているわけだ。テレビはドラマなど語る人立場、語り草など見るのは嫌。意図的に女性が置かれている感じだ。新聞も型にはまったように感じさせられる。時に切り抜いておこうかと思う記事もあるが多くは魅力がない。見出しを拾い読むだけ。それに広告ページが毎日のように埋められている。ツアー旅行の案内、新聞社にとって収入になるのだろう。努力やコストを少なくして紙面を埋める工夫があちこちに見られる。むしろ我が反省になるのだが、自分がそれだけ世間とうとんじられ疎外されているということを自覚しなければならない。若い人に興味あるのに己れが興味をもちえない。若い人が社会の主人公で己れは消えてもどうでもいい。街は若者であふれ、店に並む商品も若者向きでしかない。己れは街を歩く必要もない。新聞も然りだ。

4 月 29 日 (火)

少林拳法県大会

「みどりの日」で休みだが、みんな何に使っているのだろうか。新聞は近頃公休日について一言もふれない。国民はどうでもいいのであろう。私は午前中は大濠武道館での少林拳法県大会に、午後はメルパークでの「鯉の会」国際公演の観覧だった。どちらも日本的東洋的との印象がはっきりしたものだった。拳法は耳にはしていたが、実技を目の前でみたのははじめてだ。乱取になると実に個性がよく出てくるが、一般的にいつて一つの型の中に「道」といえるものが立派に組み込まれている。その悟訓の第一に「全てに和を重んじ敬心愛恩の道をふみ心して人の道を尊び寸秒の怠惰は心の強敵と心得べし」とあるが、極めてきびしく道を規定している。現実社会は一般的にいつて「物余り」「努力無用」で忘れられているのが、この道訓の示す人の在り方だろうと思う。幼い時から成人するまでにこれで錬え、そうした成人が社会を動かすといえる基本型が欲しい。気功に通ずるものをもっているとの話を耳にした。

4 月 30 日 (水)

幽鳥・幽花

曇りだが、いつもより一段と気温が上昇したようだ。在宅で終日小筆をもつことになったが、庭の草木に手入れする途がない。昨夜の雨で遣り水の必要はない。ヨドガワつつじ、てっせんが咲き乱れている。ジャーマンアイリスも咲きほこっているのに目立たない。春たけなわなので、どんな草にも幽花がついているといっておかしくない。小鳥の啼き声もだ。勉強不足というか花も鳥も名を知らないなので、幽花・幽鳥といっておくしかない。人間が率直にか、勝手に表現し、感性として受け止めているが、草も鳥も生命があり、そのリズムの中で春は春なりに対応しているのであろうが、人間の受け止め方、その表現の勝手さを近頃つくづく感じている。「さかり」気のついた猫に対しては、かなり直に受けとめ

るのに、花鳥については「勝手」である。風月については星もそうだが、与えられたものとして、率直に、むしろわが身を対置してよく見てきた。昔から詩文となった。

5月要記

一日　メーデーが往時にくらべて人目をひかなくなった。

四日（日）　どんたく稚児舞

七日を受け、承德市にある避暑山荘展（アクロス二階交流ギャラリー）をみる

一・二日　大学生協連（九州）幹部との夕食会　宮田、井沢

一・三日　呉長郷など呉一家来日。神戸、福岡

一・八日　県立大の名誉教授証書揮毫して城島氏に

二・四日　ケルトフォーラム　辻井　鶴岡の対談をきく

二・九日　アクロス理事会

三・一日　米穀商吉岡氏来訪

.....

県立大学の名誉教授の証書の原稿を書かされたのは重荷だった。十八日（日）に職員の城島が受取りにきて事は終わったし、出来不出来はもう言っておれない訳だが、この種の筆書きは専門の職人があるわけで素人には無理なことと思う。書道家でも無理なことではないだろうか。寸法を測り、上下の余白を考え、字の大きさを考えると、並大抵ではない。これでよしといえるまでには何回も書く。時間がかかるわけだ。

今月もう一つふれたいのはケルト問題である。去年の私と鶴岡さんとの対談がケルト会 in 九州の機関紙 CaRa 第四号に文章化してまとまりのあるものになり、今月又鶴岡、辻井対談がイムズホールであって、われわれとケルト文化との相関がかなり明瞭になってきたので、私にとっては人生のよき心の財産が刻まれたと思っている。

5月1日（木）

友好往来の一環

八女市長訪問

師村

呉長郷

呉民先

呉　超

呉　越

呉長郷一族五人が来福。空港から八女市長訪問、伝統工芸館視察など一日の工程に随伴した。今日は阿蘇に泊り、次は主要目的地神戸に行くという。呉昌碩の展示会が神戸で行われるという。大仕事になるだろう。八女市長訪問はわれわれが前から企画していた安吉県

との友好交流促進が目的であった。市長の色よい反応はなかったが、県議、市会議長、市議が同席していた面から察すると慎重にそれらの意向を見据えながら前向きに対応するようになるだろうと察せられた。八女市で感じたことは、この福島が地域の中心として産業・文化の面で大きな役割を果たしていることは勿論だが、地域の人達の努力も敬服に値すると思った。その昔、日本の国への結集が出来上ろうとするときに磐井が対抗的な一つの勢力を築いていたことが理解しうるといってよい。磐井は統一と同時に国際関係の重要性を力強く主張したので「磐井の乱」を招くことになったのだろう。

5月2日 (金)

イギリス労働党の政権復帰

飛石連休だ。ゴールデンウィーク (GW) だという言葉が耳にくる。街の人出も有田の陶器市、来るドンタクなど賑わいそう。しかし「みどりの日」、「メーデー」、「憲法五〇年」「子供の日」など多くの方はそれほど意識にのぼせず、休暇を楽しむことに熱中しているようだ。既に過ぎた「建国記念日」など新聞で一文字も報道しなかったと思うし、「春分」もそれに近い。新聞広告はツアー宣伝が一ぱい。そうした中で一日行われたイギリスの総選挙で、労働党が 18 年ぶりに政権奪取、圧勝したと、夕刊が報道した。数字は次の通り。

		議席 得票率	
今回	労働党	407	45.1%
	保守党	137	30.7
前回	労働党	271	34.4
	保守党	338	41.9

労働党は議席一三六、得票率一〇・六%の増であった。何故なのか、何を意味するか、日本で類似のことがありうるか、等々これから様々な論議がわく、UC 又は世界政策に何が変わるか……

5月3日 (土)

憲法五〇年

新憲法のもと五〇年になる今年の憲法記念日。マスコミではこのことをめぐっているいろいろ報道しているが、残念乍ら私自身丹念にこれら報道を読んで頭の中で整理するエネルギー・意欲がない。しかし沖縄基地とか集団自衛、後方支援、国際貢献などの美辞麗句を駆使し、巨額の予算を投入してきているわが国の対外戦争準備は明らかに憲法精神に反する、「なし崩し改憲」が既にかなり進んでいるのである。だとすれば、今日の憲法記念日を大事に迎えようという気持は政権担当者及びその支持国民にはなくなっている、今日は単なる休日というだけである。しかし私どもからいわせると有難かったといえるこの五〇年である。第九条はいろいろの解釈によって迂げられているとしても、破棄までに至って

ないので、五〇年記念は第九条への実の執着の五〇年だったのである。まだまだ続いている。現実への反論に足る足場なのだから。

5月4日（日）

承德市避暑山荘

ドンタク稚児舞いをアクロス福岡として受けるので私が代表福意を受けた。このあと森山氏の奨めでアクロス二 F 交流ギャラリーで開かれている清王朝の「避暑山荘」展を鑑賞した。北京東北の承德市にある世界文化遺産で清王朝の紫禁城である。驚くほど壮大な敷地、建物、陶器、装飾品など康熙、雍正、乾隆の三帝の別宮で、これまで公開が十分でなかったようだ。今後次々と名品が紹介されることになるようだ。一七〇三年から三代九〇ばかりかけて建設されたといわれる。見てあとの話の中で、民主主義はよかるうが、それではあんなのは作られんし、残らないだろう。何もかも灰になり雑魚のように次代を作りながらも何も遺産らしいものは残らない。この部屋から見える高層ビルも科学器物も灰か屑鉄になるだけだろうと私がいったら、残る必要はないのではないかと他の職員がいう。そうだろうと私は言った。民主主義も近代「国家」も煮詰めるとあやしいものだ。文化もだ。

5月5日（月）

イギリス労働党寸評

数日前のイギリスの選挙で労働党が圧勝したが、気になるのはこれをどう捉えるかである。日本で労働党に比肩できる政治グループはない。無用とは断言できまい。ではなぜそんなのが育たないのかである。マルクス主義、第一インターナショナルというような結集が見られた後に、イギリスの労働組合がその政治要望を実現するために議会に代表を送ろうとしてできた党派であろう。政治的要望は特別のイデオロギーを代表したり濾過して進み出る代表によって主張されるものではない。ヨーロッパ大陸でマルクス主義を批判した立場ででてきたのは社会民主党であろう。だが、労働党はそれでもない。社会民主党でも方法こそ違え社会主義を展望していた。日本の社会民主党はソ連の崩壊後にできたので古着屋さんのようにみえた。今はぐしゃぐしゃになってまとまりがない。イギリス労働党は、そうした歴史的変遷の中で貫いた労働者政治代表なのであろう。労使の利害齟齬がなくなるまで力はある。

5月6日（火）

50年のゴミと共生

戦後50年、新憲法50年と、つづけていわれているこの二～三年。われわれはその体験者だが、現在社会の重責を荷っている世代は次なる世代である。50年たつ今は物余り時代で平和に馴れすぎている。欠乏と戦争の恐怖を知らない人に事がまかされている。欠乏に耐

えた人もその苦を忘れていて、日常生活で欲しい物は店に行けば何でも買える。在宅で机辺整理をしていると箱の中、棚の奥などびっくりするような思い出多い物が出てくる。勿論、ほとんどが過去 20 年から三十年まででそれ以前は書物にしても焦げたような色になっていて、量はそれ程多くはない。この二～三十年の間のものが、次々に新しい物に押されて奥へ奥へと退き、書斎など所狭しというしかない程に物物物である。新しい世代が共存している家では、どんどん捨てられるようだが、私は自分だけの 50 年になるので、不用品、ゴミと雑居の毎日になってしまっている。

5 月 7 日 (水)

中国承德避暑山荘

今アクロスの交流ギャラリーで中国清朝時代の別宮、承德避暑山荘にかかわる物品の一部が展示してある。二日前一覽して説明をうけており、今日夕方承德市から団長の呉副市长、秘書長、文化局長など一五人の来訪を受け対応した。半分以上は少女で舞踊、演奏のスタッフたちであった。それにしても私は承德遺産なるものについて初耳で驚きのほかはなかった。三百年前、清朝初期三代にわたる皇帝が北京から二五〇キロほど離れた景勝地に国内 30 余民族とかかわる宗教信仰に関する壮大な文化建築工芸品を集積してあるという。権力の集中がこれを可能にしたことは確かで、未来永久にできない事業であろう。世界文化遺産であって、将来はこうした文化遺産が残りうるとは思えない。来訪者の話では車で直行して北京から三時間ほど、人口は三六〇万人あるのが承德市だという。主な産業は何なのかきいてみたかったが、人口の集積も大きい。これまで隠れた存在だったという。

5 月 8 日 (木)

ケルト・フォーラムを成功させたい

五月二十四日にイムズホールでケルト会 in 九州の主催でケルト・フォーラムが行われることになり、辻井・鶴岡両氏が対談してくれる予定。今日は入場券の前売りに協力してもらうために、西日本文化協会とシティ銀行頭取四島司氏を訪問した。山本啓湖さんの依頼で、このフォーラムを失敗させないために知恵を貸してくれとの手紙をもらったので、この二つの訪問は私の思い付きだったが、両方とも対応はよくしてくれた。四島氏は私の突然の訪問にもかかわらず、よく話をきいてくれた。山本さんはこの二つの訪問が成功であったと喜んでくれた。私は「当って砕けろ」の言葉どおり、躊躇することなくまずはノックしようとしたのであった。幸い二件とも突然のことなのに、よく対応してくれた。全国的に名の通った二人を呼んでの対談なのに入場者が少いと、九州は何をしているんだといわれるかも知れないし、最後の賭になるかも知れないと彼女が訴えているので腰をあげるほかないと私は考え、財界筋に目を向けたのであった。

5月9日（金）

午後二件の大仕事を抱え込む話が出た

今日午後は二つの大きな荷物を背負い込んだ。一つは北京の天安門広場の革命博物館で十一月下旬に、当方から催物をする話。書、写真の展示会、茶席披露、呉汝俊氏の京胡演奏会を内容とする、日中国交回復二十五周年記念文化交通と名をつける。それに私の喜寿祝書展の名目加わる。経費の都合と作品を限界内に大量に作らねばならぬということである。呉氏が中国側の対外友好協会、友好和平発展基金秘書長の顧子欣氏から既に OK の手紙をもらってきている。飯田氏を交えアクロスの喫茶店でこのことを話題にすぐにも実行委員会を作ろうということになった。今後数ヶ月が大変だ。もう一件は神戸震災の後遺症で窮地にあるケミカル・シューズ製造者が集ってワーカーズ・コープを結成するようその賛助会を結成しようと、東京の渡辺（大内田画伯の女婿）が来福。県の松田氏が仲に立って東急ホテル地下の食堂で夕食しつつ前向きな意思を決めたことだ。

【「タテ半切 13枚」などと書かれたメモ挿入】

5月10日（土）

「なつメロ」の運営に感謝する

東市民センターでの「なつメロ」の一日。少々遠いが、それを克服して行って時間を使う価値ありと思って行く。始まる前に十数人で弁当をとって中食することになるが、これにも加わる。帰路は太田支部長が、多くは天神まで送ってくれるケース。それでも全部消化すると一日を費す。歌が好き、大得意であるわけなし、その由来など言える柄でもないのに、私にとっては同じような高齢者がほがらかな気持、態度で、且つ人それぞれに運営のため、会場のために自発的に行動し、満足している。そうした雰囲気の中に過ごせる時間帯が何よりも楽しいから行くのである。在宅してあれこれ時間を費すのもいいが、「なつメロ」の時間にはもっと大きな価値を見出すことができる。当日消化する歌詩を手書きする人、プリント冊子にする人はボランティアとして大きな貢献をしてくれているわけだ。それに世話人（受付、会計など）、長沢さんのような音声器具の運転をする人、その運搬などと思うと、善意の結晶に感謝したい。

5月11日（日）

十一月下旬に日中国交回復二十五周年文化交流事業をする

十一月の私の喜寿祝いをしようという発想からスタートした北京での書の個展という思いがだんだん拡大し、今日は仏壇の長谷川社長の別荘（百道浜）で、六人集って具体化に乗出すことになった。向うの対外友好協会、和平基金の顧氏からも招待の意が文章になって、長谷川、呉、飯田、私の四氏宛てに来ているので、まずこれに OK として答えること、期

日が十一月下旬となっているので、二十五日から三日間としてもらう事との態度を表明することになった。長谷川氏は茶道分野、呉氏は音楽分野で事業を展開、加えて四島氏に頼んで写真展はできないかということになった。西川さんの舞踊を指摘する人もいた。只、事務委員会会計など積上げをクリアせねばならぬことが少くないので今後が大変だ。国交回復二十五周年文化交流会ということを出し、先方は友好協会と基金で受けてくれるという形になる。一五〇人規模の訪中、自由行動も中に入れることになった。書の準備が大変だ。

5 月 12 日 (月)

近頃の体調

いやだなとは思いつつ近頃は体力の衰えを感じず。普通に歩いていてもいつも六本松までの間に女性の歩の方が早い。歩のテンポが遅い。済生会病院から稚加栄まで無理を承知で歩いた。三〇分ほどかかっていたようだ。近頃は外出から帰宅したあと、一寸横になりたいことが多い。上り坂道を歩く時の負担感は当然のこと乍ら、帰宅後横になりたいと思うのは最近のことである。老衰だろうと思うけれど、肝臓にも問題があるのではなかろうか。坂道を歩くだけではなく、今年は二つの藤棚の枝切りを二日に分けて行った。同じ日につづけて二つともという従来のやり方は無理だと思い一つ終わったら休んでしまうことにした。健康に関連しては頻尿、早い目覚めが出来る。一夜に三回ほど小用に起きる。そして朝は五時半になると、もうベッドの上にはいられない。もっと多くの時間横になれないものか、更に、大腸が正常でない。飲み薬のせいだろうと思って処方された薬の一部は服用しない。ややよくなったように思っている。ともかく弱ってきた。

5 月 13 日 (火)

英国労働党の変質をどう捉えるか

県職労が名古屋から吉瀬征輔氏を呼んで、五月はじめの総選挙で英国労働党が大勝したのをどう評価するかをめぐっての講演・対談の会が 10 時から 12 時まで県庁裏労金会議室で行われ、参加する機会を得たが、この時節、大変珍しく貴重な集会だった。職労は各地から四〇人ばかり集めていた。わが国ではこの方面の政党は全く統一がなく期待される指導者が現われそうにないのに、英国では、40 代半ばの新しい星が現われ、長期野党を圧勝に導き、新しい政治方向を打出しつつあるので、目を大きくして英国のこの変化を注目し、有志が寄って議論し合うべき世界的な変化なのである。社会民主主義・レイバリズムの見直し、市場経済とコミュニティさらには自由主義個人主義の見直しが求められているようだが、これはわが国でも同然である。政治のあり方の再検討が求められているとの表現は同じでも、日本では形式にしか思いが至らないのに、英国で個人、社会、国家の捉え方の基本まで掘り下げた論議が進んでいる。

5月14日（水）

呉一家歓迎会

昨日は黒崎で、今日は天神の国際ホールで呉長郷一行の歓迎夕餐会が行われた。昨日一五〇人、今日は七〇人といえる人達が集ってくれた。どこが主催という形式は薄く、主として師村氏を中心とする人達の骨折りでの歓迎会だった。北九には「書の祭典」というこの種の集りの主体者がありうるが、福岡には未だそこまで行っているグループはないようだ。日本舞踊の分野では流派をこえて協会があるように思うが、書の世界ではそこまで至っていないといえるのだろうか。今日のメンバーの一人が宴席のさなかに私に語ったのだが、飯塚、筑豊は思いのほか盛んですよという。直方鞍手の蘆州会の書展に私も誘われて何回か作品を出したのだが、年一度でいいから趣好を同じくする人達が集っておしゃべりするチャンスが設けられるというふうにもっていききたいものだ。呉長郷一行は神戸そごうでの呉昌碩四代書画篆刻展の行事、二週間日本滞在をすませて明日帰国する。

5月15日（木）

グリーン・レボレとアロエ汁

北島さんが大麦の葉から作ったグリーンレボレと名付ける粉末商品の宣伝に熱心で私にもたくさん届けてくれているので、ここ二年ぐらい大いにそれを利用してもらっているのだが、効用如何ということになると確心ある返答はできない。宣伝されるままに信ずるほかはない。他方自身ではアロエの方に凝っている。もう五～六年も前からであろう。アロエは効用宣伝の本も買っているし、時に新聞広告にも見える。鉢は二〇鉢、空地の土にも三〇本ばかり植えている。手を入れればどんどん増殖できる。以前は葉を洗ってそのまま口に入れ嚙んで胃に通していたが、近頃半年ばかりは葉をミキサーにかけて液状にし、少々砂糖を加えて飲んでいる。毎日つづけているのだが、これ又効果如何と問われても答えるポイントは知らないままである。グリーン・レボレと併用すらしている。北島さんはアロエに肯定的ではない。どちらともいえぬ自分は信ずるほかないと続けている。

5月16日（金）

久しぶりに電話で交信した二件

夜になって思わぬ人と電話するとは。一人は山村謙一氏、松竹の映画入場券を毎度のよう
に贈呈してくれる。今回は是非お礼を述べるべく電話してごむさと失礼（欠礼）のお詫
びである。奥さんが逝去され、子なしでどうやって毎日を過ごしているかを序にきいた。
掃除洗濯は何日かの間をおいての契約消化、食事は朝は別として他の二食は殆んど外食。
健康面は満点らしい。毎日一万歩をこえる歩行になっている。公営住宅や町世話人など仕
事は十分にある。地域図書館の仕事も、といった具合だ。一度近々姫高会をやろうよとい
っていたが、いざということで動く人がないのが現状。もう一つは久々に嶋津登三氏から

の電話。孫一人託されての老人夫婦。用件は静岡の県知事選に、島野氏が出馬するので私に推薦人に加わってくれとの申入れがあつているとのこと。島野氏は私の初の知事選のとき、太田薫氏に推されて知事相談役となる話が尾をひいた人である。静岡知事選の話は池稔氏にまかせようといっておいた。

5 月 17 日 (土)

核戦略の終点

退職協の岸さんから依頼のあつた機関紙「ふれあい」の原稿を書いたが、その中で、核兵器の開発行き詰まりにもふれた。よく知った上でのことではないが、凡てを灰にする核兵器がまだどんどん作られているのは行き詰まりへの到着を隠してのことに違いない。子供の頃口ずさんだ従軍看護婦、赤十字の歌は過去帳の中に入ったと見なしていいのだろうか。これまでの戦争では何とか敵味方の区別なく看護活動は可能だったが、核は皆殺し、すべての破壊だから赤十字活動は不可能である。アメリカが沖縄基地に固執するのは国内の核兵器、そのバックにある核関連産業の存廃にかかわるからであろう。防衛といい、安全保障といい、「言い訳」の言葉にすぎない。さらに米軍が展開している世界はアメリカを守るものでも何でもなし。全部対外干渉であり、自国の核軍備、核産業の利益のために他ならない。二〇世紀の後半五〇年の人類史は、この言い逃れをうまく包み込んで綴るよりほかはない。

5 月 18 日 (日)

売らんかな経済

過剰生産の中、生産者が消費を促すためか欠陥商品を作るケースがあるといえる。電球が一ヶ月前に買ったのにもう切れてしまう。靴のカガトがまだそれほど使っていないのに街中歩行中にポンと外れる。片足なら目立たぬ行動をしつつ一応帰宅しようとも思うが百メートル先で他の片足もカガトが外れた。一番近い靴屋に外れたカガトを添えて持っていても修繕はできぬという事で新品を買わされた。上海で似たことが旅行団の中にあつた。携帯ラジオ、CD ステレオも修繕はダメといわれて部屋で眠っている。意地悪いと思うのは靴下・パンツ・ズボン下着などにあるゴム部分。以前はゴムが緩くなると新しいゴム紐を通し直して使いつづけたのが、今はすぐダメになり、新しいゴム紐を通し直すことができないう縫い方になっていて、ゴム部分の緩みはとくに早い。どうするかと他者の意見をきいてみると「捨てましょう」と答える。使えなくなったら捨てるのがモラルだろうか。罰をくらうだろう。

5月19日（月）

改めてケルトの意味

夜帰宅したら、ケルト会 in 九州の機関紙「CaRa」第4号が届いていて、中に昨年末（11月24日）鶴岡真弓さんと対談した私の発言要約が掲載されてあったので読み返し、近頃自分がケルト的発想に意を使っていることを改めて感じた次第であり、いわば西欧・アメリカ文化の限界、科学的合理主義傾倒への反省ということであろうか。偏差値、山笠、病院食、大国主命のことなどこの対談の中に出てきているが、内容は改めて納得できる。小泉八雲のことなどもっと知りたい。先日、山本啓湖さんから鶴岡氏の著書「装飾する魂」を送ってきたので、少々読みはじめたが専門的ですから理解し難い本である。しかし、建築装飾などもっと深く勉強しないとイケないと思っている。さきの対談の中で私は自動販売機によって飲むのと、喫茶店で飲むのと、来客に出すのと、同じコーヒーでも全く違うのだと知っているが、改めてこうした発想に馴れなければならぬと同時に、ケルトについてももっと事実を勉強せねばならぬと思う。

5月20日（火）

余白の意味

白紙も模様の内なれば、心にてふさぐべし

（土佐光起の「本朝画法大伝」による）

右は、鶴岡真弓著「装飾する魂」P.26にふれてある。著者はいう。……余白を空白スペースと見なさない、見ない視覚が日本にはあった。白い面は余白や二次的「背景」などではない。「図」が提示されていようとも日本人の視覚は「図」に殺到せず、その視力を大幅に「地」へ供給する。いいかえれば「図」に意味を見出し「地」に意味を見出さない絵画的な視覚を逆転させるかのように、無意な領域であるはずの「地」に価値を見出すのである。西洋的視覚の模倣に拘泥してしまった日本人の眼には、もはやこの逆転・攪乱の視力は奇妙なものにみえるかも知れない。だが、あるときまでの昔、伝統的な日本の視覚はこのようなものだった……その昔、尚文堂での岸本書道教室で先生が「余白をどう書くかが大事」といわれたのを思い出す。

5月21日（水）

携帯電話の限界

今日やっとNTTパーソナル携帯電話の解約の手続きをすることができた。便利なものであるに違いないが、私にとって日常行動上、使わない文明利器である。公用車に乗っていても車内電話が数年前から取り付けられたが、身辺終始他人からの連絡可能という身にはなりたくないと思っていたのに、現在は携帯電話で他人から追っかけられ、仕事の能率を高めねばならないと更々思わない。バスの中、食堂の中、会議中など利用する人があるが異

様に思う。若者が教室で使うこともある。街行く人が歩き乍ら使うのはザラである。会議中、外部の人と通話するは一番嫌いだ。一日のうち、電話連絡から解放された生き様もあっていいし、必要でもなかろうか。便利ってんばりの世の中になっているが、己れのゆとり、他に迷惑をかけないモラルが欲しい。列車やコンサート会場では電源を切っておいてくれとの注意放送はあっている。重要なモラル誘導だと思う。私など高齢化するとますます外からの連絡のないことを望む心情となる。勿論自からは全く不要だ。

5 月 22 日 (木)

(鶴岡真弓氏のみる) 縄文土器

一昨日もふれた鶴岡さんの「装飾する魂」はふつうには理解しにくい文言が少くないが、縄文土器にふれてある部分で一寸頭を洗われたように思えた。「世界で第一級の装飾家たる日本人」という引用にふれた (P54)、つづくページに次のようにある——八千年という途方もない時間のなかでつくられ続けたわが縄文土器であるから、その施文法が多彩であることに驚くにあたらない。すでに草創期、土器を飾る基本の三つの方法が出揃っていたのは画期的である。ひとつは粘土の粘や紐を土器表面に貼りつける (隆起縄文) ひとつは人の爪、動物の骨、貝、篋^{へら}などで線刻や刻み目を施す (爪型文) ひとつは撚紐を押圧したり回転させたりして縄目をつける (多縄文) である…こうした土器表面への施文に加え、まさに縄文の壺は一個の身体とみたてられたかのように、その口、耳、胴には立体的な造形が与えられて中期には器そのものが異形の装飾体となっていく。とくにその口には “手、や “顔、も付き、自在に飾りたてられる…わが頭も目も体験しない観察だ。

5 月 23 日 (金)

青葉茂る勢い

藤や梅の枝切りをしたあと、又々新しい芽が出てきている。新しい芽は一見古いのと区別がつく。切られたままでいないぞと知っている。新緑の勢みちみちている。どの木も小枝が茂り、うちはまるで木蔭に立っているようで、部屋の中はむしろ暗いというしかない。敢えて読書となると電灯が必要。揮毫するにはひるまなら縁側を使うしかない。間引くような気持であれこれ小枝を切りたいが、今は暗い木蔭の方がいいように思う。東南の大きく高いコンクリート壁ができる限り見えないことを選ぶには木蔭のようになることを我慢して小枝切を断念するしかない。コンクリート壁に威圧されるよりも緑に包まれて暗い方がはるかにましである。いまクジャクサボテンがぎっしり赤い大輪を咲かせている。甘夏柑の花が落ちこれからどれだけ実をつけるかコンクリート壁ができただけにその影響を体験する一例として気がかりである。松の新芽が伸びている。対応に迷う。

5月24日（土）

ケルト的立場からの辻井、鶴岡対談

イムズホールでの辻井、鶴岡のケルト文化をめぐる対談で改めて指摘された点を三点にしぼってみよう。辻井氏はガットウルグアイラウンドでの農産物の自由化は欧米合理主義の行き詰まりだし、戦後の日本はアメリカのコロニーになってしまっているということ、またそれとの関連で日本人は変容（創造）力を失っている、日本人は言葉の曖昧さを欠点と思わず長所とみて創造力を伸ばすべきだといい、鶴岡女史はヨーロッパ連合、EC、E^Uなどの動きに対しフランスが消極的なのはいいことと思うと述べたことである。いずれもケルトの心から欧米のグローバルな今日的態度への批判であるが、私も十分納得できた。二人がよくそこまで踏みこんで発言したなと感心した。鶴岡女史は結集欲よりも「散る」態度、書きとめ客観化するよりも、口承伝統で生きていくことこそ、ケルト的人間観だし、そこから変容能力がでてくるともいっていた。辻井氏は時間は帯状と考えず螺旋状と考えるべきだと指摘していた。話題を一つ一つ追っていくと意味深いものが多かった。

5月25日（日）

福高教組の『豹変』宣言を見守ろう

大塚高教組委員長が日教組路線転換宣言の著書「新教育宣言」を出版することになり、再校ができ、私も関係があるので、その推薦文原稿を書いてほしいということで、朝早目だが、志岐副委員長が初校コピーをもって来訪した。二〇〇ページ余の本ではあるが、一寸した画期的・快挙をしたことになりそうだ。従来日教組は、文部省、県教委と事々に敵対的に運動を進めてきたが、一方は権力を存分に振りまわし、警察の直接的な力すら用いたので、日教組系の組合員は減少するばかりであった。時代も変わったので組合も変わるほかなしであった。大塚氏はまさに豹変の宣言をしたといえる。これからも大変だろうが「豹変」するにはいろんな苦悶があったはずである。知事時代に私も大塚と何回か意見を交わした。私は「君が代、日の丸は主戦場ではない」と公的にきこえる発言をしてあちこちから非難を浴びたのを思い出す。ともあれ今回の出版を通じての宣言は全国的反響を呼ぶに違いない。

【川崎大師喜多院の拝観券半券挿入】

5月26日（月）

縄文式について

夕刊にトップ、大きな見出しで「縄文期鹿児島は先進地、国内最古最大級集落跡が出土、国分市上野原遺跡」という記事が出た。縄文早期には人は集落生活に入っていたのである。約七千五百年前（紀元前）らしいからざっといって一万年前の様子だと考えていいだろう。

桜島の噴火灰もふくんでいる。考えられるのは 46 軒という。縄文時代は一万二千年前からというから、定住は農耕を基本にしてのことだから文化はそこから始まる。土坑があり薫製食物がもうはじめられている。木の実を入れる石皿もあったようだ、勉強してないからこれからはこうした分野にもっと気をまわそう。縄文は日本列島文化の一つの特徴で新石器時代、紀元前八〇〇〇年ごろから。次が弥生時代でこれは紀元前二〇〇年頃からのようだ。鶴岡さんの「装飾する魂」を読んでいるのだが、この本にも縄文のことが出てくる。土器に縄文をつけるというのだから既に高度な文化意識が醸成されていたといえる。P.32 の次に「日本文様へ」の色刷ページの冒頭に渦巻の例として土器が出てくるのだ。

5 月 27 日 (火)

興味が薄れた「新聞」

誰の判断でもなく我思うということでもいいが近頃感ずるのは、配達される新聞が殆んど興味をひかないということだ。大見出しを見て十分もかからぬうちにたたんでしまう。テレビを見ないのは以前からだが新聞にはもっと注意を払っていたはず。大事だと思ふ記事は後日のため切り抜くこともあるが、この頃は切り抜きもあとで利用することがない限り袋に入れゴミ処理同然となる。こうした変化の最大の原因は老化だし、利用するチャンスをなくしていく孤立化である。要は己れの対社会出番が少くなり殆んどなくなったこの頃は、新聞価値のニュース性を大事にする必要がなくなったということだと思ふ。当方からの勝手な判断だが、新聞は面白くなくなった。新聞は汚職とか暴力、殺害、失策など社会や団体個人の負の面ばかりアラサガシ的に報道する。広告といえば旅行社、住宅販売、自動車などきまったものばかり。新聞を読まぬ外国旅行時、読まなくてもおくれはしないと感じたのを思い出す。

5 月 28 日 (水)

今なぜにケルトか

ケルティック・フェスティバルの一環として今日もケルト会 in 九州の山本啓湖さんが大濠会館での国技振興会理事会で六月五日に迫ったザチーフタンズ公演 (於メルパルクホール) の宣伝協力を求めているのだが、一寸宣伝の向きに私は疑問をもつ。ケルトを理解してほしいということと、今のアイルランドを理解してほしいということは一つではない。しかしケルト会 in 九州のしていることはアイルランドの現在を知ることによってケルトを理解し、ひいては日本文化の理解に役立ててもらおうとする筋に見える。だからアイルランドの映画・音楽の披露に力がこめられている。でも福岡の人達はアイルランドの映画・音楽といっても何故にアイルランドを理解せねばならぬかとの潜在観念があって、これら公演にとびついて来にくいのである。私はアイルランドはともかくとして、ケルトと日本人の文化的類似性を宣伝することを優先させた方がいいと考えている。だから先日の辻井・鶴

岡の対談などが効果的だと思っている。常に日本を引き出す努力が共存すべきだ。

5月29日（木）

龍をめぐる日本と西洋の考えの違い

「装飾する魂」（鶴岡真弓）を少しずつ読んでいるが飽きない。日本文化の特質を誇りにする手助けになる本である。今日読んだ箇所に龍を素材に彼女はこう書いている。「龍や龍宮のファンタステックなイメージとともに広がっていった水界を、九谷や伊万里の絵師はいきいきと描いた。…西洋のドラゴンたちの悲惨な末路は見るに忍びない…槍で突かれ、のたうち回るドラゴンの絵が、いったい何千枚教会や宮殿を飾ってきたらどうか…ドラゴンたちは結局死んでゆく姿でしか西洋人の眼に触れなくなったのである」（一四二ページ）
「西洋では自然を征服するため、人間文明の進歩に向うため、混沌と邪悪の象徴たる龍を殺すのだが、東洋では自然の生命力そのものとみなされる龍を生かして人が生きている。龍にかかわるまったく逆の隠喩がそこに発見されなければならない」（一四一ページ）21世紀はアジアの時代という言葉の中に、ここに引用された根本が重く抱かれていると信ずる。合理主義の見直しが益々必要なのだ。

5月30日（金）

「ケルト」に刺激されて

五月十九日の本帳にも書いたが、近年の私の心の財産はケルト文化との接触から受けたショックであると、改めて自覚の程をたしかめている。鶴岡さんの「装飾する魂」はまだ読み終わってないが、つくづく思うのは大学での学問の研究ではとても思い付くことができなかった分野といえよう。科学ではなく美学だともいえるし、この美学が私にはなかったのである。しかし、平素の思いの中で残っているものを、まとめて教えてもらったともいえる。人間の一万年ほどの歴史の中で縄文時代が長くつづいた日本。鹿児島県国分市で七千年ほど前の遺跡が発見されたという近々のニュース。われわれ日本民族の先輩が世界的注目を集めうるといえる足跡を残しているとは、大変勇気の出る話ではなからうか。ケルト文化に通ずるものがあり、これまでわれわれが置き忘れていた心情の問題に強い刺激を与えてくれたわけだ。置き忘れなんだから取り戻しうる。

5月31日（土）

コメの自由化

米屋の吉岡さんの来訪があった。コメの問題は「自由化」の中さらに政府の保護介入が解かれ、日本の「食糧安保」の面からも、米穀商の個別的立場からも、この先どうなることかと心配が深まる話である。自動車やIC産業など輸出に余力をもつ産業人や外国輸入で当面は安い食物を利用できる一般消費者は「自由化」に賛成であろう。当然ともいいうる。

しかし、米はどこにでも売っているから競争（弱肉強食）の対象となり、倒れていく米穀商もふえている。日本の食料自給率はもう四〇%を割り、「先進国」では特に低率な状況にある。もし戦争でも起ったら日本への食糧輸送は阻害され、価格の急騰を招き、食料恐慌になるかも知れない。そういう筋書きを知った上でアメリカの求める「自由化」を進めている今の政府、コメによって既に自由を奪われている日本、「自由化」に応ずることによって自由を失った日本を私は心配する。

6 月要記

近頃よく念頭にうかぶ心配「物余り時代」「飽食時代」の弊害がもう限界にきたのではないかということ。誰しもわが身勝手に、その弊害に対応しようという人が少いということ。家族、地域という人間関係が尊重されなくなって、物質によって千々にひきさかれていくということである。近代新世代の人々はそのことに無関心、まだまだ合理主義、利益のみ追い求めている。親を思い、子を思い、友を思い、不幸な人に同情を寄せるということは不可欠なのに合理主義・金銭主義で、そちらに目を向けない。自滅の道を行っていることに気付かない。夫婦関係も例外ではない。かんたんに結婚するが離婚も平気である。金銭、財物は裁判で片付ける。欲のため義理を欠き、他人の損害を平気で自分の利益に切りかえる。中学生が小学生を殺す事件すら出てくる。先生も親も中学生ぐらいになると戒める勇気を捨ててしまう。反抗されたらこわいのである。子供の教育に責任を感じない。さわらぬ神にたたりなしで、見て見ぬふりをする。教育に積極性をもつと損をするのである。物は栄え、心は衰える。幼稚園児の相撲、舞踊に関心を寄せている私だが、直接的教育はできないにしても、もっと心を養う努力をみんなの協力でやってみたいのである。最近は何かにつけ心、心といっている。西洋文明は核兵器に代表されるように行き詰っている。ヤマトゴコロをふりかえる必要性を説く私だ。

6 月 1 日 (日)

家屋は次世代に受取ってもらえない

昨年日記に屋根瓦葺替え工事二重発注のことが出ていた。ふりかえると、昭和四二年（一九六七年）にここに移り住むことになった。一彦はすぐ箱崎キャンパスに通学するわけで、さかさまといえる縁。直美は小笹の保育園にという三〇年前のこと。屋舎もあちこち古びてしまっている。何回か増設、増築、修理をしてそれぞれ大金を注いでいる。廊下板、押入れ扉など更に手入れを必要とする部分が気になるが、もうこの年になって改める価値はあると思えない。障子・襖も張りかえるといいとは思いますが、決意に至らない。家屋も老衰にまかせるしかないと思っている。押入れの奥の方には貴重なものが眠っている。ただ物と人間との関係で古い物が生かされない人間関係が支配的になっている。和代のうちが現地改築でこの夏竣工するという。土井仙吉氏の話もきいたが、時代の者は同じ地にいても

同じ家屋に住みたくないらしい。古い貯え物の整理に涙が出ると。

6月2日（月）

八世紀頃の四川省の夏の一時

江村 杜甫

清江一曲抱村流

長夏江村事事幽

自去自来堂上燕

相親相近水中鷗

老妻盡紙為綦局

稚子敲針作釣鉤

但有故人供祿米

微軀此外更何求

上は漢詩日曆の六月一日のところからの引用。杜甫四九歳のとき四川省の草堂に住む。時は七六〇年だろうという。処は成都、祿米をくれたのは刺史の高適であろうとのこと。彼は浪人の身、無欲そのもの。

長夏は六月をさしている。前半に自然を後半にわが身をえがく。

子供が針を叩いて釣針を作るとあるが、その頃の針というのはどんなものだったのだろう。想像をこえる文明の段階である。燕や鷗の行動の表現が実にうまい。村人は「事事幽」の中にあつて動きが見えない。これもいい。農事は一応一寸した休みに入っているのだろうか。ここも亦無欲そのもののようだ。

6月3日（火）

辻井氏いわく、近代知以外の知を発見しよう。

ケルティックフェスティバルを企画して山本さんが大忙しで奮発しているが一寸日数が足りなくて入場客はあと一歩というところのようだ。でも、よくやったと思う。ただ私はケルトについてアイルランド宣伝と取り違えないことを望む。その点辻井喬氏がチラシの中にのせている「ケルトへ、そして縄文へ」という文意を注目したい。「ケルトの風に吹かれて」（鶴岡対談からの引用）の一角を更に引用してみよう。・・・「私たちが考え議論していた西欧文化は近代知としてのそれなのであった。そして西欧にも近代知以前のオスマントルコと対立したり・・・帝国主義およびその芽を含まない文化の時代があった・・・そのさらに奥にケルトの文明と文化がある。彼等は・・・外部世界を自からの支配下に置こうとする思考からは自由な種族であつたらしい・・・私は縄文人のことを常に思った。そして文化の基層にケルトの如く隠れてしまった大國主命のことも・・・近代の知以外の知を確認する（旅をしたような気持で鶴岡さんの装飾の本を読んだのであった）。

6 月 4 日 (水)

中学同窓生も老化の波の中にある

検査入院で、悪いところが見つかったら退院が延びると心配していたが、今日 CT 検査のあと、退院 OK となり四時に帰宅できたのだが、一応は様子をみようということなので、気がかりを抱きつつ退院したわけ。それでもホッとした。足腰が重いとか、歩行テンポがおそいとか、何か集中的に体力を使うとなると疲れを覚えるとか、体力の負(減退)を感じていたが、どうも肝炎のせいだということのようだ。今日龍野中同窓の消息を綴った資料を福岡辰一氏が送ってくれ一覧したのだが、各自の綴った近況は健康面、趣味の面、時間の過し方の面で誰しも似た状況だということがわかった。逆に自分だけが老化しているのではなく、自分も平均的なのだといってよいような気持ちもちえた。中程だろうから、ずっと元気なものもあるし、ずっと病弱のようだと思える人もある。もちろん、三分の一は逝去したといってもいいようだ。本條巍がなくなったとのしらせを受けたのはつい最近である。誰が早いか誰がおそいか……

【川崎大師喜多院のリーフレット、「重ねる年いえぬ傷」(『朝日新聞』1997 年 8 月 9 日夕刊)の切り抜き、「長春市長春中日友好会館内部設計装飾考察団名单」挿入】

6 月 5 日 (木)

教育会館の出発点

十二時から教育会館十周年記念祝賀会があり、戦後教職員組合の活動に果たした大きな役割、旧天神施設から現馬出施設に移転する時のごたごたなどが話題の中心になった。私は祝辞の中で旧天神施設ができた経緯にもふれておいた。配布された資料には、その沿革が次のように略記してある

1. 一九三一(昭六)年 学制発布五〇年を記念し、併せて県下の教育振興を図る目的をもって福岡県教育会館を建設
2. 一九四五(昭二〇)年 法人格取得
3. 一九八七(昭六二)年 県庁移転に伴い天神より当地へ新築移転、名称を日本教育会福岡県支部維持財団より財団法人福岡県教育会館と改称
4. 一九九〇(平二)年 第一回公益文化事業を開催

旧会館が「国民ノ一大覚醒ヲ要スル秋」という雰囲気の中で発足し、大東亜戦争を完遂シ……教育国策遂行ヲ愈旺盛ナラシムル為……」に建設された点を忘れてはならないだろう。

6月6日（金）

新教育会館へ

その入居者

- 福教組
- 県高教組
- 市教組
- 市立高教組
- 教職員共済支部

土地所有者

福教組

旧教育会館は太平洋戦争末期に（昭一九年）憲兵隊兵舎として、また敗戦後は占領軍によって短期間使用された。福教組・高教組の管理運営はもちろん戦後である。県教育会は昭二二年九月に解散、翌年財産処理完了、そのあとである。敷地は県の所有で年々上昇する賃借料支払いに職組合側は大変辛苦を重ねた。一九八一年十月、亀井知事から賃貸借契約解除の文書が発せられた。天神地域再開発もその理由の一要因だったが、教員組合への攻め手段とみる者も多かった。他面、土地の賃貸借契約が一九九〇年に切れるので、その壁を越える自信は組合側になく、八五年一二月に組合の野口と大塚副知事の覚書が交わされ、翌八六年一月これを基礎に野口と奥田知事との間に本契約が交わされ、教育会館など上物も県の所有に移り、八七年五月に引渡し完了した。六月に両教組や日教済も馬出に新築された教育会館に移転した。土地一八一三 m²、建物は鉄筋三階二八五m²で、土地所有は福教組、施設は財団法人福岡県教員会館である。

6月7日（土）

九州地区大学の生協連事業部顧問

大学生協九地連の事業部総会（パピヨン 24）で私が新たに顧問就任という運びになり、日常の生活に新たに荷物ができた。田川の県立大臨時授業、北九州市のアジア女性フォーラムを外れていたのだが、大学生協九地連の仕事が加わったので負荷量は元に戻ったと考えればよいかもしれない。生協という活動は人間普遍のものなので、現在の未組織の組織化、ポスト資本主義社会での展望の中ではいくらかでも仕事は広まり深まり続いていくとあっていい。只資本主義下での競争激化、物余りの段で、生協への庶民の感覚が薄いだけに、生協活動及び営業採算の上で辛苦が伴うのは現時点では避けられないので、具体的にその点に成否の努力辛苦のポイントがあることは確かである。しかし、努力すればするほど無限に課題が広がるので希望は開ける分野ではある。

十一月の北京での文化交流の輪廓がだんだん見えてきた。呉汝俊の努力だ。

6 月 8 日 (日)

韓天衡氏の講演をきいて

夕方からスペースワールド近くのロイヤルホテルで来日中の中国書家韓天衡氏の書画篆刻についての講話があった。通訳は滞日中の娘さんだった。書の三分野について歴史的経過をふまえた上で、体験も入れての、簡約だが名講義だった。この種の^{ママ}説は誰からでもきけるものでない貴重なものだと思った。書の部分で結体について興味ある認識を得た。言葉だけで何度もきいたが、内実は理解せぬままの私だった。平奇という専門語で、充・鵬を例として説明されたので理解できたような気がする。又水墨画についても書画同源とか五彩といって濃い方から薄い方へ焦、重、濃、淡、清と五段階ありそれぞれに十倍の差があること、篆刻では印泥について紙の製造によりきわめて顕著な発展を経てきたということ等々、興味深い未知の世界に案内された聴講のひとつときであった。従来の我を反省させられるし、これまで何の考えもなく筆をとってきた自分が更めて出直さなければならないとも思わせられた次第である。所詮は素人だ。

6 月 9 日 (月)

どれも大したことはない

新聞を読まない日がつづく。でも朝夕、大きな見出しと天気予報だけは見ている。金融界の不祥事がつづく中、今は第一勧銀に焦点が移されている。大蔵省の改革は省内が反撥しているようだ。香港返還がそこまで期限近まりとなり、種々話題を呼んでいるが、今の中国の政治体制への不信が基本になっている論法感情が特色のようだ。利用してきた人が基本に立ちかえるようまず要望したい。「植民地」というのが世界史の中でどう変わっていくかであろう。利益の計算だけでもものをいうのはやめたらどうか。日米安保の拡大、「有事」対応で責任者がすっきり説明しえないのも今日の世界の特徴をあらわしている。これ又利益追求が底にあるから素直に説明できる訳がない、軍事産業が自壊するしかない。地方レベルでは今は福岡市議のチケット販売問題がさわがれている。自殺者が出たほどに関係者には深刻な問題のようである。

6 月 10 日 (火)

印泥以前

韓天衡さんと呉従勇総領事の中食会に陪席した。師村氏の設営のようだ。特別の話題があったわけではないが、中食をとりながらの大濠公園花ノ木での楽しい二時間であった。総領事が芸能人と親しく話合う心境は立派なものだと思った。師村氏の側からも何十回となく訪中する立場から、今後総領事に快く接してもらう方向に有効なことと思われる。今日は私がかかわる限りで、先日の韓天衡氏の講演の中に出てきた篆刻と印泥のことが又話題になった。あの時の聴衆の中では、竹簡に書かれた文が紐で綴られ、巻となり、その巻物

を縛った縄を泥で封じ、それを封印するのに篆刻の印が用いられたという歴史段階を理解できない人も少なかったと思う。今日の話で封印する印は凹彫りが多かったということだった。韓さんはそうした歴史や理論にも、こまかい見識がある人である。よく研磨されたその道の大家である。

6月11日（水）

暖衣飽食が永久基地化の基本である

郵送してきた「日本の進路」に「特措法」への怒りが特集してあった。沖縄の米軍基地の使用期限切れを特別に法律で延長するという。衆院で90、参院で80の高率%で通過したもののだが関心の強い住民・国民の怒は燃えているのだが、やるせないものがある。安保は拡大解釈、有事措置の研究さえ進められ、日本はアメリカ軍のいいなりになって兵力増強への協力を行っている。アメリカの植民地になったという声もあるが、戦後世界史から植民地は消え、経済の自由化、兵力の基地化にとって代られ、「支配され従属化している」という言い方しかないと思う。日本では政治の主流は基地化・自由化で、戦後五〇年間アメリカの属国的地位によって過ごしてきた。多くが暖衣飽食の状況だから従属状況には抵抗感ほとんどない。特措法により永久基地化の方が利益になる。「戦後の危機」など口実にすぎない。この暖衣飽食状況を根源から問い直す必要があるだろう。

6月12日（木）

FAXはまだ必要でない私

昨年来福したので食事を共にしたロシアのコーシキン氏から大坪氏に来日報告のような新聞切抜きが届き、大坪から私へ次男啓二に訳してもらいたいとの手紙が届いた。アクロスからFAXで啓二に送ったら、日本経済は今勢いが下向きだが、やがて上向くだろうからロシアへの投資を期待するといった程度の内容らしかった。啓二からの電話では、私がFAXをもたないからとの話題があり、彼は一万円余りで取付けうるから私にも設備したらどうかと彼はいう。取付けるのはいいが、月々払う基本料金が利用価値に比べて負担に感ずるのではないかという気持で取付けに至らないのが実は当方の実情である。NTT九州地本からプレゼントされたPHSを今月解約したばかりである。殆んど利用しないのに基本料ばかり二年ほど払ってきたものだ。利用するには他へ宣伝記憶してもらう必要があるし、結果は些細な仕事、急がぬ用件を伝えられるだけで、今の私には、それ程対外連絡の必要はないのである。

6月13日（金）

モラルの悪さ、供給過剰の心配

在宅の一日。東南の高壁の上からドリルの音が止まなかった。建築開発もいいが、ハタ迷

惑なことだと感じる。今後どれだけかかるだろうか。嫌なことだ。下のマンションの裏庭からも似たような事がある。特に嫌なのはタクシーを呼ぶ人があって到着したタクシーが警笛を鳴らす点だ。聞く側にとっては胸にビクッとくる。マナーの低さかなと思う。日本経済は九〇年代に入ってから、停滞気味だったが、今年は明らかに上向きになったと報じられている。自動車産業と電器産業が基軸のようだが、どこまで頼りになるか疑わしい。建設産業も注目されるが、公共投資ではなく住宅分野である。右のドリル騒音もそれと関係がある。しかしこの分野も供給側の見込活況で、建物は作ったが入居希望はそれほどでなく、やがて不況の仲間入りをするだろうと思う。工事はいい加減にしてくれといたい。物余り現象がいたるところで見られる。総崩れの時がやってきそうだ。

6 月 14 日 (土)

なつメロのこと

東市民センターでつづく「なつメロ」に行った。歌が好きとか上手とか、よく知っているとかではない。音声に接することになるので、文字どおり「なつかし」のメロディに接しよう。ただそれだけのことで東市民センターに行き一日を費す気になる。半分近くは知らないが歌詞がプリントしてあるから、おおよそ目で追いながら聞く。それで満足である。よく歌える人が多い。若い時に勉強ばかりしていると歌を覚えるチャンスが少なくなる。私がそれに該当するだろうと参加者の誰かが言った。それが耳に残っている。その通りである。気持のゆとりがないと流行している歌も耳に残らない例が多い私である。さらに環境も問題だったと思う。一途に農作業と勉強に挺身した自分を憶い出す。今疑問なのは、今の若い人が、なつメロをどう扱うかである。カラオケではそうはいかない。又世界的に蔽っている現代風のメロディもなつメロにはならない筈である。時代の限界を思う。

6 月 15 日 (日)

文化的に使う時間

いつもいつも我が家で時間があれば小筆を執っている。たいした意味もないし勉強になっているかどうか疑問が残る。知らない文言、その使い方に当面することが少くないので、少しは勉強になっているのではないかと思う。「漢詩日暦」(目加田誠一編)には知らないのが一ぱいでくる詩書であるが承知の上で接している。木簡、竹簡、紙へと文化が進んできたが、詩・書・篆刻・墨絵にはそれなりの文化(文房具)の発達が左右する要素に違いないが、私はそれらについては無知に等しい。とくにそのための勉強時間を作る必要があるのに、今はその具体化のゆとりがない。今後つとめてその分野の知識を貯えたいと思っている。今は小筆で書くばかりだから転換して改めて勉強する方向を探りたい。自己改革が必要なのかも知れない。もう遅いといえるかも知れない。生涯の時間の使い方が文化的でなかったわけである。現実への対応で目が向かなかつたと反省する次第。

6月16日（月）

抹香くさい周辺

理学部出身の高橋良平さんが亡くなって今夜はお通夜との知らせが来たが、後日の本葬に行くことにした。敗血症で73才というからまだ若いと思う。九大の学長をして私の知事時代の二・三期目に、共に顔見せすることが多かった人だが、学長を退いた後も、あちこちで顔役をつとめていた。直接のなじみはなかった。自分をかえりみてあの世に仲間入りするのも、おかしくはないと思う。今日は「はせがわ」仏壇本社に行って、仏壇を買うより灰にして捨てるという空気が広まって来た現代気質のことが話題になったし、帰りエレベーターの前で、私に仏様みたいな人になったと思うと私を評価する声がかえってきたが、何と抹香くさい一日だったことかと印象に残る。マージャンに来る上田、河野の二人共よぼよぼだし、不潔に感ずる。そういう環境に生きている自分なので、自覚がもっとも必要だ。

6月17日（火）

ジュラシックパーク（試写会）をみる

山村謙一氏のはからいで七時からの天神東宝でのロスト・ワールド（ジュラシック・パーク）の試写会に参加した。S・スピルバーグ監督四年ぶりの復活、恐龍映画である。四年前にも前作試写会に案内されたのを思い出すが、見ていて緊張の連続、画は愴絶きわまる、先端技術をすべて動員した画になっている。まさにアメリカ産で、他国では製作できないものである。大洋中の無人島といえるところに滅亡したはずの恐龍がよみがえる。冒険者たちが恐龍の世界に分け入り、見本を捕獲しもちかえる。予想外の恐龍の反抗に人間世界の産物が破壊される。どんな自然とも共存するしかないとの結論になる。しかしスリルに満ちたストーリーは技術の進歩以外に何かを教えてくれるかという否である。何のためにすごいコストをかけて作るのか理解できない。恐龍の世界は空想がえがく世界だが恐龍の生命・生活すら説明されていない。役者は誰もが銃をもってつき進む。空しかった。

6月18日（水）

明治以来のスポーツ輸入

相撲や舞踊に関心をよせる理由は、国粹主義とは関係はない。身体を鍛える一方で精神、情緒を磨くということが目のつけ所であり、男女ともどもこれに打込むことができるということでもある。スポーツやオリンピック種目にはない要素が相撲・舞踊にみられる。ヨーロッパで育てられたものにはないものが見つみうる。スポーツは日本語にならないまま今日に至っているがなぜだろうか。明治以来の近代化の中で日本にもスポーツは育ったが、日本や日本以外のアジアに昔から育ってきたものとは違う。こうした点を論議する人はあまりないようだ。日本人はスポーツ以外の分野で身体を鍛える術をもっていたのである。

グラウンドその他近代の施設とは別の場所、観客が考えられる。われわれはその意味で両股がけの施設、教育を必要とする。心の面でスポーツはどうも合いにくいと思い、相撲、舞踊に目を向けているわけだ。

6 月 19 日 (木)

日本舞踊の分野に進入したい

国技振興会でやっている幼児と青少年を対象とする相撲 (年一回ずつ) について、福岡以外でも開催することによって活動を広めようということ以外に、日本舞踊にも目を向けてはどうかということで、昨年以来、その道の西川鯉近さんに打診中であったが、渡辺氏の話では、西川さんは既に子供を集めて実践に入っているとのことで、今日はアクロスに渡辺氏が来て、私の腹づもりも確かめられることになった。いろいろ経過もあって、国技振で舞踊を扱うについては、宮本氏の立場がどうなるか、重々しく気になるところなのであるが、とくに経費については、相撲と切り離すのがベストではないかという結論に至った。渡辺氏は月末の幼稚相撲大会のあとで別途国技振の理事会を開いて、そこで本格的な取り組み方を決めればどうかということである。日本舞踊を扱うことになると二年ぶりに私の願望が実る。

6 月 20 日 (金)

わかりにくい生と死

生と死について、あれこれ考え、全く悟りがえられないでいる。生命は、とくに人命は何にもまして大切という。仏教は殺生を排する。僧は肉を魚を食べない。米や野菜ならいいという。西欧人が捕鯨を槍玉にあげた。牛や魚はよろしいというのである。象牙は輸出禁止だろう。害虫と益虫が差別される。仏教以外の宗教では制度が更にひどい。それぞれが尤もらしい。原爆が敵味方どころか軍と平民の区別なく老若、そして蟻の一匹まで抹殺してしまうものであり「赤十字」精神など人類の歴史的遺物にされてしまっている。要は全部、何ものもすべて自分勝手な申し開きでしかないことだけは事実である。虫も獣も殺さなくても死ぬ。人間も。中国政府は人権無視、民主主義なし、と西側諸国は非難するが、己れはどうなのか。胸に手をあてて、香港問題も考え直してみたい。木の葉は人の意図とは別に「自然に」落葉する。近頃竹の枯葉の多いこと、これも死なのだ。

6 月 21 日 (土)

高橋良平氏公葬

生と死を思うこのごろだが、今日は元九大総長の高橋良平氏の本葬が福岡斎場で行われた。73 才だから一寸早い。が全て可能な要職を消化して来た人だから不足はない。九大を西区に移転させる原案を決めた要人の一人としても有名だが、今後この移転には多くの難問が

からんでいくに違いない。桑原福岡市長も弔辞の中でこの点にふれていたが、兩人にはかなり共通の責任がつかまとうだろう。生死は自然のなりゆきで彼は頭脳の故障で数日の苦しみで逝去したようだが、長期にわたって周辺に迷惑をかけて死ぬよりもラッキーだったといえよう。神式の葬儀だったが、死は神式でどう考えているのだろう。それぞれ勝手に解釈していいのだから、この場合も木の葉が散るように解釈したい。風が強くて一寸早目の落葉だったろう。福岡地域の各分野の一流著名者が会葬したので、逝去の本人もさぞ満足だったに違いない。あと始末の遺族が大変だ。

6月22日（日）

夔州の船競争、酒のうまさに住民は根付いて生きていく。

夔州竹枝歌 九首 其一	范成大
五月五日嵐気開	五月五日嵐気開き
南門競船争看来	南門の競船争うてみ来る
雲安酒濃麴米賤	雲安の酒濃まやかにして麴米やすく
家家扶得醉人廻	家々酔人を扶けてかえる

目加田「漢詩日曆」六月二十二日ページ。范成大は南宋の人だが、唐時代には竹枝詞が作られたという四川省地方の土地風俗を表現したものである夔州は重慶よりずっと川下で湖北省寄りにある町。見なれない漢字である。嵐気は山もやでそれがはれてきたのである。雲安の酒は濃くして原料も安い。それで呑む人、酔う人が多く連れて帰るところまで飲む。詩には土地の特色がよく表現されるし、固有名詞も少くなく、素人にとって理解は容易でない。でもやっぱりなるほどと頷かせるもの、後世に残していいものが残されていく。

6月23日（月）

網の目の流水、交通機関を想像する

端午競渡棹歌	黄公紹
看龍舟 看龍舟	龍舟を看ん————
兩堤未闢水悠悠	兩堤いまだたたかわず水悠悠
一片笙歌催鬧晚	一片の笙歌鬧の晩きを催せば
忽然鼓棹起中流	忽然として鼓棹中流に起る

五節句の一つが五月五日端午。端ははじめ、五月のはじめの丑（牛）ということらしい。三月三日の女、五月五日の男の対応。しょうぶの節句でもある。柏餅、粽（ちまき）鯉幟などでこの節句は祝われる。この詩では舟の競争があるようだ。どういう競争だろう。地域が総動員で沸くのである。親方の命令、昔からの伝統のルールなど規律がやかましかろう。漢詩日曆には川、水、舟がたくさんでてくる。あの大陸には東流する大河。その支流、それらを結び合わせるクリークが網の目のように各地を繋ぎあわせていて、貴重な交通手

段となっているが船頭や経営区分など伝統もあろう。どうなっているのだろうか。

6 月 24 日 (火)

過剰治療

臓器移植が心臓も OK という時代になった。とくに末期ガン患者を何とか救おうとの願いからあらゆる医療対策が行われるようになって久しい。病床で苦悶に耐えられぬほど痛みを受忍せねばならぬ知療、事実上死んでいるのにといえる「植物人間」、そのような話は少ない。この病院ではダメだから病院を移るという例も少ない。患者本人の苦痛、家族など経費の負担を考えると、生命というものがそれほどの犠牲を払わねばならないものなのかとの疑問に当面する。そうした対象患者の社会的な存在は、いくらでも代わる人が準備されているはずだし、生命は何らかの形で何時かは終りに来る。ベストをつくして延命をはかるのは当然としても、臓器移植などベストの範囲にはいるのかどうか私には疑である。仏教ではないが、^{マツ}懂んで死を迎えるのがよいのではないだろうか。過剰治療はハタ迷惑と私は思う。二～三日の苦悶で死ぬという程度は容認されるベストだと思う。

6 月 25 日 (水)

西日本の地震

昨夜七時少し前に机に向っている私実感したのが部屋全体が南北に揺れる弱震であった。夜のニュースでもとり上げられたが佐賀福岡地域での被害は交通網は別として特にはないようだった。今朝の新聞では、米子徳島を結ぶ線以西、熊本佐伯を結ぶ北部九州^{マツ}一体が震度 3、益田では震度 5、震源地は島根・山口の県境、日本海寄りらしい。福岡に住んで六十年近くになるが、地震を感じたのははじめてと思う。今年は避難生活に入る人があるほどに頻りに地震に襲われているのが鹿児島県川内地区のようだが、地震のない福岡といわれてきた福岡にも発生したのである。土砂崩れや舗装道路の亀裂程度ですんでいるものの家屋の倒壊にまで及ぶと、神戸の大震災も記憶に新らしく、住民の協力、行政の指導が大切になってくる。一応はないものとの前提で日常は活動しなければならないのだが・・・福岡にもあったということを忘れないで・・・

6 月 26 日 (木)

三池炭鉱労組のあと始末のはなし

午後四時半に国際ホールの喫茶部で三池労組の委員長と中原前組合長、それに西日本新聞の古い代の組合長深井（メディア開発局次長）加えて写真担当部長松尾芳彦氏、この五人が集って、閉山解散に当面している三池炭鉱労組の記念写真集を作る構想について概要提案をうけ討議した。十月二十六日に何か名目をつけ解散式に当るような企画ができていたので、これに間に合うようなのをという組合側の期待に対しては、構想どおりのものを作

るには一年はゆとりが要るので、十月にはほんの簡単なものを準備するにとどめるしかないということになった。今はわずか二〇人足らずの組合員しかなく、OBは七〜八〇〇人いて組合の新事務所建造物保管資料など、かなり処理に慎重を期すべきバックがあるとの現状で、新労のように「解散」というところまでなかなかいきにくいのである。資料の一部は九大に保管依頼したがという。

6月27日（金）

靴下は弱くなりすぎ、女は強くなりすぎている時代

「強くなったのは女と靴下」という言葉が流行した。昭和の三十年前後だったろうか確かめたい。あれから40年余りすぎたと思う。今は「物余り」時代である。故障がおこったら修理でなく捨てて新品に買いかえる。大は住居、そしてテレビ、カメラ、電気器具、そして更に靴下に至るまで。企業の方では売らんかな、捨てなさいの方向にまっしぐら。だから靴下は弱くなり女はさらに強くなる。とくに靴下はゴムの部分がダメになる。女は実力以上に自分を誇示する。業者は部品のどれかを短い耐用年数のものとする。時計は「電池」の方が他の部品より寿命が長い。動かなくなると全部新規に買いかえる「常識」。男のパンツは何度かは洗濯するが、ゴムの部分が全体的に伸び切って、紐を通しかえる構造になってないから捨てるしかない。かくて生産者は栄え、廃棄物（ゴミ）の山ができ、女は修理、補修など自分の仕事と思わない。テレビが女を強め強めに放映する。こんな時代。

6月28日（土）

台風8号が水をもってきてくれた

台風8号に吹かれたが、午後はかなり「本降り」状況で、水の心配はまず遠のいた。「カラ梅雨」といわれたほどの六月の日々だった。五風十雨というが、月に三度ぐらいは降ってほしい。この台風は西から東へ列島を縦なめにする形で太平洋に抜けた。被害は空海の交通麻痺が一番で個々の利用者が損害を受けたのが一般のようだ。それにしても今日人々はよく動く。家庭内では活動が少い。とくに女性の外出は大変伸びたのではないか。病院に通う私がバスの中で見かけるのは七〜八割女性利用者である。衣食清掃などどんどん手をはぶくことができるよう商品化していく。女性労働もふえていく。さらに外出余暇消費が急増しているに違いない。気になるのは家庭を中心とする人間関係の稀薄化である。子育てを中心とする家庭談話の縮小である。カネ、水、乗物がおおきく人間関係をかえている。自覚も必要だが、バチ当りも覚悟せねばなるまい。

6月29日（日）

幼稚園相撲大会

昨日予定されていた第七回幼稚園相撲大会が今日に順延となり、大会々長として私は出席

挨拶した。参加者は少ないのではないかとの予測とは逆に、まずは満員といえる賑わいになった。すき通るような晴天も幸いしたと思う。アジア系の外国幼児も十数人参加、実技指導をうけるという特色が今回の特徴である。5人で一組の二六チーム参加だから盛況だったといえる。私には見えないが、ここまで準備してきた人々の努力には感謝したい。又園児の世話をする先生も、若いからこそエネルギーもあろうが、子供の世話は大変だろう。取組み演技の園児たちにとっては忘れ難き貴重な体験となっただろう。相手の出方によって自分の対応をどう変ええたか失敗したか成功したか。力も必要だが技はもっと必要といった教訓を随所で学びとったのではなかろうか。私には父母や園の先生方が、勝った子にわがことのように拍手する姿が何となく有難く感じられる。この会を成功させた人との協力も有難い。

6月30日(月)

われわれの目ざす日中文化交流

十一月下旬の北京ゆき文化交流団の構想について今日五時から「はせがわ」事務所で数人集って基本構想を協議した。四泊五日、参加は一五〇人、経費は一人約十五万円。人民大会堂、歴史博物館、故宮、万里長城、天津などが行動範囲。団長は長谷川、私は名誉団長、中央の土井・村山は顧問ということで今後中味をそれぞれに充実していく。交流分野は書、画、演奏、日本舞踊、茶道などが予定される。日中国交回復二十五周年。交流は今年を初回として毎年行う予定である。全国的にさまざまな文化交流は既に行われているが、九州福岡からのこの動きが渦巻の中心になることを望んでいる。どのような人々を組織するか、誰が核となるかが将来を決めるであろう。双方は国レベルの高さにもっていく必要があると思っている。アジアの時代が来るのだからアジア文化の特異性をみんなで理解し、磨き上げ広めていこうということにならなければならない。

7月要記

沖縄の米軍基地がよく問題になる。もし実戦になったら全国民に直接関係するようになるから、基地問題は沖縄問題に限定する意識は変わってしまうに違いない。米軍基地のゆえに日本にふりかかる莫大な予算をはじめ基地移転賛否、基地当地では米軍の暴行、日常的演習被害(飛行機から落ちる兵器の危険性、騒音など)はやり切れない程ひどいらしい。でも他方で基地あるが故の地主や地方自治体への補償、賠償をはじめ、米軍が使う日常用品売上額の増加の「恩恵」に浴する例も少くないらしい。沖縄でもマイナス面からではなくプラス面から基地は残して欲しいとの声も小さくはない。しかし総括的に基地に賛成、戦争に賛成というところまではいくまい。高所からみるとなぜ演習が必要なのかということもある。軍事演習なんて、軍が置かれているから、毎日何かをせざるをえない。又軍需品供給側からは兵器は消耗すればする程利益になるから、演習は多い方がいいし、できれ

ば実戦が起った方がいい、平和がつづくなんて不利を強いられるにすぎない。同じ考えは米軍人の間にもある。兵役によって生涯経歴にプラスになる、勲功か年功を重ねて昇給昇格したい、死なない限りいい役廻りだということになる。そしてその立場を援護するための正義の味方観が強まることをひたすら願う。「平和論」はむしろ敵なのである。だがこれでは人間が駄目になろう。

7月1日（火）

香港返還の新時代開幕

今日から香港の中国への回帰体制が始まる。一五五年に及ぶイギリス植民地からの解放でもある。一国二制度といわれるように、いわゆる香港の資本主義と中国大陆の社会主義とが中国という一国の平和裏にかかえられて共存共栄をはかっていくというのである。香港の中にも世界各地にも中国共産党の体制への不信からこの回帰を悲しみ怒る人も少なくない。他方必ずや共存してうまくやっていると信ずる人もいる。わが国の中にもマスコミの報道の中にもこの「賛否」が微妙に併存していることが読み取れる。資本主義を肯定するゆえに植民地被支配に目をふさぐ人は少ないようだ。私は、どうなるのか見守るしかない。民主主義、自由がどこまで生かされるかは見守るしかない。その前に長期に亘る植民地支配が終ったことを祝福すべきだと思うのだが、祝福を忘れて将来を心配する人が少なくない風潮。これは報道にも責任があると思う。マスコミの巧妙に保守支持をつづけているわけだ。返還をまず祝へ。

7月2日（水）

効率至上主義から全住民の香港へ

マスコミは香港返還の将来が心配という点をかなり強調した報道を行っている。心配があるので返還には反対という人達のはさすが大きくは報じていない。今日の夕刊には、特別行政区政府成立祝賀会で董建華長官が演説の中で、住宅・公的年金に重点をおく旨ふれた。つまり今後は効率重視から公平へと行政の重点を移していく方針が打出されたという。さすが中国はイギリスと違うと思った。こうした福祉分野が今香港でどうなっているか知らないが、年金制はないと書かれていた。効率重視、強い者勝ちにまかされるのも一方法ではあろうが、一般住民・弱者がふえていった場合、いつまでも自由競争でいいとはいえないだろう。効率至上主義で転っている者にとって香港はよき拠点かも知れないが、一般人も混住し、ふえてくるだろうから、いつまでも資本の拠点だけではすまされない。イギリス統治の香港は強い者の拠点だったろうが、その陰映にも注目したい。新中国になってそれが見えてくる。

【「住宅・公的年金に重点」（『朝日新聞』1997年7月2日夕刊）切り抜き挿入】

7 月 3 日 (木)

北京ゆき企画は早くツーリストに委ねるべきだろう

呉汝俊が中心に進めている十一月下旬北京訪中文化交流の話に疑問点が多いということで、アクロスの森山、毎日会館の白石、それに渡辺健二郎氏が、待て、という声を表面化してきた。裏には呉氏への不信もあるようだが、実際、指摘される通り、わからない点又は不安が多く残ったままのプラン作りが今日まで進められているのである。天安門での歴史博物館の借用、人民大会堂でのレセプションをはじめ、ホテルや移動交通機関、それに事故、病人発生対策など、安心して受け入れられる保証は今はどこにもない。旅行業者にまかすべきことも多々あろうし、金銭の扱いにも不安は残る。こうした点を今後クリヤーできるかどうか私にも自信はない。呉氏はツーリストを信用しないかも知れないが、信じて委すべきだと思う。国柄の違いが根にあるかも知れないが、一日も早く信頼できるツーリストに「発注」するのが、事を前に進める手順だと思う。

7 月 4 日 (金)

耄碌を自覚する

高柴さんの奥さんがかなり大きな手術をしたそう。同じ年だからとくに気になる。身体のあちこちが脆くなる人が半ばはいるようだ。歩いていて躓くのが一つの典型だろう。それが骨折その他に影響していく。いろいろきいてみるが強い人と弱い人に大別できる。私は決して強い方にはいないと思っている。余程の用心が必要だ。階段はできるだけ手摺りにつかまるようにしないと、足腰が信じているほどには強くなくつつい躓くことになる。視力が弱まり、歯はガタつき、皮膚はあちこち外傷、その他内発症にかかる。手も衰退し、毛筆も思うように運ばない。ボールペンでも形の崩れた重ったりゆがんだりの線になってしまって読みにくい文字になってしまう。こんなのが頭に来て耄碌という状況にまとめられ、わかりやすくは老衰といわれるのだろう。身体のいろいろな機能が落ちるのは家屋にも木の葉にもあてはまる。事の成り行きと思えば合点がつく。あせらないし、不服をいわないし、欲張らない、休む。それらに対応だ。

7 月 5 日 (土)

生活協同組合の歴史的展望を共通に

「大学における生活文化創造と生協経営」をテーマに杉並区の大学生協会館で、理事長、専務理事合同セミナーが行われ、上京参加した。顧問という立場で参加した私は資格例外であった。二〇〇人ほどの参加だった。パネラーの発言の中に理事長と理事の役割や職務能力の違いなどがとび出して来てまずは驚いたのだが、現実には、前者が大学教授で単にシャッポーだということでもあり、日常的業務経営には関与が少い例が殆んどだということだから、「シャッポー論」が出てくるのは自然かなと思うに至った。ただ同じくシャッポー

一といえども専務理事とのつながりを実際にどうしているかによって問題点が違ってくるだろう。両者の交流の中味を現実的に議論したいと思う。それに、私はとくに生協というものの成り立ちと歴史的将来展望をみんなが共通認識としてしっかりもっていきよう努力することは理事長の重い責任の中にカウントされなければならないことを補足したい。つまり理念と将来展望の確認が底辺にあり、その上に経営の健全性の追求が必要だろうと思っている。

7月6日（日）

喜多院に行く（川越）

十二時に全国大学生協役員の意見交換が終り流れ解散になった時刻に、会館に、天野・直美が車で迎えに来てくれて、埼玉県朝霞の彼等の新居を訪ねた。高いビルの16Fに居を構え、公共交通機関も大変便利な所に位置し、生活用品の買物も苦労はないとのことであった。中食も一しょにとったが、見物に出ようということになり川越市までドライブ。見物先は川越大師喜多院（先に五百羅漢を見た。これは一八世紀末から一九世紀のもので市指定文化財）。国宝、国指定重文など多く保存され、ゆっくり見る価値があると思った。一三世紀までさかのぼれるものも多く、徳川時代には復興に力が注がれたという。三代将軍家光、春日の局の名が残される遺跡にも気が付いた。全国であちこち残る国宝や文化財の仲間接することができ、感慨を新たにした。権力によってこうした遺跡遺物が残され後世の人々も接しうることになるが、「民主主義」では文化は伝わろうが、財・跡としては残るまい。

7月7日（月）

オールドスタイルを思う

一昨日、昨日の大学生協理事長専務理事の合同パネルでのコンピューター在庫赤字の話などきいていても、私は既に遠い過去の人間になっていることがわかる。啓二、直美の両所でも、家具の一部にコンピューターが位置し話題がそちらに傾いていく。テレビの映像もそうだ。又どちらも新しい住居だから私の家にあるものをもって行って引き継いでくれればと思っていて、両家を訪問して家具調度に目をやってみたのだが、わが家にあって譲って使ってもらえるものがありそうだとは思えなかった。つまり、子供たちは今様スタイルの住家具調度の中で既に生活しており、私自身は完全にオールドスタイルになっていて共通点がぐっと少なくなっているのに気付かせられた次第である。生活時間の使い方、レジャーの中味も同様に考えうるだろう。伝承するもの、譲れるもの、共通のものがぐんと少なくなっている。時計はどこにでも何個もある。でもわが家の時計と子どもの使う時計はスタイル、外見が違ってしまっている。車もどんどん変わっているのだろう。書物も。

7 月 8 日 (火)

三池労組写真集の編集仕事に加わる

二、三日大雨。雨の中を十時半に大牟田に着き、三池労組へ。新会館は三年前に建設された。これをせめて一〇年は存続させねば建設の経過からして具合が悪い。三池炭鉱閉鎖は三月末。新労も職組も一ヵ月後に解散し、僅か 16 人しかない三池労組はまだ解散できぬまま、十月二十六日に「思い出を語り合う会」を開き、四〇〇人ほどの出席の中で実質上の解散宣言をする予定という。その折に写真集を出版しておきたいと願っていたが、出版社だけでも三ヵ月前に稿が必要というので、現時点では本格的な写真集は時間をかけることとし、要点だけをのせた簡易なものを 10 月の集会にまに合わせようとの論議に落付いた。浦川、久保田、山田の四人の OB も加わって討議した。三池のことをくわしく知っている奥田がまとめの役割を果たしてくれるといいということで、本格的写真集の編集責任者に指名された。一寸した重荷を負った感じをもった次第である。炭鉱を、三池を、労働運動史をどう見るかが視点となる仕事だ。

7 月 9 日 (水)

生命を大切とは？

秋には落葉樹の葉が一せいに落ちる。人々はこれに注目する。しかし、常緑樹も春から夏にかけてさかんに落葉する。人々はあまり注意しない。松や竹はどうか。わかりにくいからだろうか、先輩達は祝意をこめてこれを扱ってきた。この一ヶ月ほど庭先のコンクリートの上、低いサツキの上などにうるさい程、竹の葉が落ち毎日掃き捨てる対象となる。以前、生命ということについてふれた事がある。兎を殺す、ミミズを殺す、魚を釣って遊び食べる。殺生が戒められる。昔から戦馬は大いに争奪殺害の対象にされた。人を殺すのが一番いけないのか、順番があるのか、何で順番を決めるのか、落葉は自然死で伐採は殺しなのか。最近、生命を考えるに、動植物の区別はあるのか否か、植物の実ほどの位置にあるのか、稲は、米は、柿は栗は、西瓜は、と色々考える。人により、場合により、対象により、勝手勝手に理屈づけしているようだ。魚の養殖、稚魚の放流、海苔栽培、すべて食べるための努力だが、生命を絶つしかない。その生命を養うのだ。

7 月 10 日 (木)

大塚「教育再生宣言」出版記念集合

高教組の大塚委員長の「教育再生宣言」祝賀会がリーセントホテルで行われ、第一部のシンポジウムの「まとめ」役を承った私は、教師の「主体性の再生を目ざし」た再出発の理解こそ必要だと述べた。亀井県政時代に高教組は何回も叩きのめされた。君が代・日の丸、主任制導入、初任者研修、昇給や配置転換、裁判、ピケへの警察導入など思い出せば尽きない痛手を負わされ、組合組織もズタズタにされた。どの闘い、誰の指導が悪いとって

もはじまらないのではないかと私はいう。組合は常に敵の土俵（国家権力）の中に引き込まれ、そこで叩きのめされたのである。知事になって間もなく筑豊ハイツで福教組運動を例に、君が代・日の丸は主戦場ではないと述べ、あとでひどく批判・非難されたのを思い出す。これは当時から権力の懐の中で暴れても駄目という私の思いが強くあったからで、大塚氏の、この「宣言」は当時までの運動を反省し出直すと「豹変」を宣告、客観化したものだとの意味の「まとめ」を行った。権力の手の届かないところでの教師の主体確立こそ21世紀をみざす主要課題だと思うのである。

7月11日（金）

万一に備えての自衛隊派遣

雨が降りつづく。関東地方を除いて全国的、九州はひどい方だ。鹿児島川内地区では土砂崩れで二〇人余が死亡。三〇秒ほどで民家は埋められてしまうということだったので、逃げようもなかったであろう。砂防工事の必要性の点検、実施の手ぬかり、道路整備やダム工事への片寄を指摘する声も上っている。政治の落度を突くことは易いが、数十軒の民家を土砂崩れから守る行政投資は果たして実現しうるのか、私には疑問である。又地盤強化のためには森林伐採をひかえ、むしろ植林に力を入れるべきだとの声もある。これは納得できるようにも思える。カンボジアで内戦の結果一人の日本企業職員が死亡したが、政府は救出の必要性緊急性が増した場合、自衛隊を派遣するといっている。土砂崩れ問題とくらべるとかなり片重な努力だと感ずる。勿論土砂崩れの始末に自衛隊は派遣されたが、今回のカンボジアプノンペン問題は「万一の事態」にそなえて自衛隊を海外に派遣する。均衡ある考え方ではないと思う。

7月12日（土）

食と緑グローバル化

教育会館での「福岡県農業とみどりの会」第9回総会に要請をうけ、谷本参議の記念講演をきき、総会冒頭私と中西績介衆議とが来賓挨拶を行った。米の自由化関連、農薬公害関連、高令化後継者難関連、緑、空気、水、など地球自然破壊関連など諸問題を自覚し、「人類滅亡」を心配してどう対応せねばならないかというのがこの会（「食とみどり、水を守る中央労農会議」の下部組織でもある福岡県のこの会）の運動理念でもある。私は挨拶の中で、21世紀には資本主義的価値観が変わるしかない、価値観を変える運動も必ず必要と述べておいた。カネがオールマイティではいけない、アメリカにふりまわされるなども述べた。グローバル化を称賛する声もあるが、アメリカ主義の一環だと思う。規制緩和や自由化があたかも正義であるかのように思うのもアメリカナイズの危険性に気付かないからである。気にくわぬ外国との交渉に「制裁」を加えるというアメリカのやり方も支配者の奢りにほかならない。

7 月 13 日 (日)

外国への干渉、支配

植民地がなくなって、戦後史、その五〇年、香港もこの七月に中国に復帰した。一体植民地で何をしたのだろうか。戦後それを捨ててしまったのだろうか。細かく点検するゆとりはないが、かくもかんたんに植民地ができ、消滅したとは何ごとであろうか。この問題は世界史の重要なテーマだと思う。今、アメリカは世界各地に軍隊を派遣し、あちこちで紛争の種をまき、政策に嘴を入れ、軍隊を動かしている。カンボジアの紛争に日本の自衛隊もアメリカのまねをして「海外出動」という違憲行為を敢てしている。邦人保護といえは聞こえはいいが、世界全国がそういうことをするはずはない。その発想、口実のどこかに外国支配の奢りが見えかくれする。弱い国なら泣き寝入りするか諦めるかだろう。「邦人保護」という奢りの後につづくのは対外支配しかない筈である。アメリカの植民地主義の変形とアメリカの傘の下で日本がアメリカのお先棒をかつごうとする動きに警戒したい。

7 月 14 日 (月)

兵力の海外派遣

自衛隊機が那覇空港から、カンボジア状況に対応してタイに派遣されたことが、憲法の本質、平和維持の基本から事実上外れることが新しい変化として問題になってきた。山崎拓自民政調会長は来年の国会で自衛隊法を改正して合法的に日本軍の海外派遣の必要にこたえたいとしており、沖縄の大田知事は空港の使用で軍用機が民間機に優先するような事態になることへの大きな懸念を表明した。自民党はアメリカの要請に従い日本を一步一步軍事力強化に導き、「なし崩し改憲」を進め、今回は遂に軍の海外派遣に一步ふみ込んだ。邦人保護がその口実だが、次のステップは海外企業の救護、さらにはアメリカへの協力という口実になっていくだろう。国民がこうした軍事力行使に追従するようにするためには、兵員たるものに更にはその家族に様々な支援、特権を与えて釣り込む手段が必要になってくる。何年先のことかわからない。今山崎はその一齣だ。

7 月 15 日 (火)

山笠と女性

防衛白書が有事立法の必要性を説いたと報ずる夕刊だが、今日は早朝四時五十九分スタートの博多祇園山笠の「追い山」何もかもそこに集中する熱気。新聞に出ているので櫛田入りのチーム名を描きとめておこう。西流、千代流、恵比寿流、土居流、大黒流、東流、中洲流、上川端通 (スタート順) 各流は五分おきに櫛田入りをする。山笠は約一トン。一^マ一^メ二メートル。約五キロのコースに寄せてきた見物客は約九〇万人。沸き立つ博多、その裏には九日のお汐井取りからフル動員で女性が支えている。「ごりょんさんがいないと山笠は動かんですよ」というのが当たり前。家族の法被や締め込みで洗濯機はフル回転。西流 (奈良

町二区では婦人会が交代で毎回約一〇〇人分の食事を用意する。おにぎりは米五升で約三〇〇個、一食の経費約二万五千円が山笠経費から出る。カレーやスパゲッティも加わる・・・同じ夕刊一面に、小倉祇園（十八日から三日間）太鼓に女性の出場が新たに始ったと報じられている。

7月16日（水）

潤滑油なしで動こう

新聞は毎日のように官の不祥事、不正をとりあげている。昨年の冬以来福岡県の「旅費不正支出」問題以降とくにこれらの問題が連続して明るみに出されている。ただ、福岡県はそれでも他県がそうでないわけではないだろうけれど、他県はないかの如くで納得し難い。報道というのは公平を期するため他県はどうかという姿勢は基本的にはもたないであろう。周囲の人の話では他県もそれ以来自粛の度を強めているらしい。機械は動かさねばならないが潤滑油の費用はみないという「財政」なので、全くギシギシになってきている。つまり行政は冷くなっている。規則どうり以外に動かない。タクシーの運転手と車の中で話すと、中洲など歓楽地は冷えこんでいる。不況の上に引き締めがよくきいている。われわれもカネのかかる余分のことはしたくない。その上、私はとくに、記者とは会いたくないし、口もききたくない。記者がニュースをとりに来るような会合には出席したくない。業務以外のことはしたくないという姿勢になる。

7月17日（木）

懸念がふくらむ秋の北京文化交流

この二ヵ月程呉汝俊氏を中心に北京で日中友好文化交流をする発想がふくらみ、私も取り込まれ、話がどんどん大きくなり、二〇〇人規模の構想までふくらんできている。それに伴い訪中団に旅行社を媒体にさせないと危いという懸念をもつ人が多くなり、十人程度の同志グループ旅行と考えていた起案者連中との間に喰い違いがでてきた。呉氏らは中国対外友好協会が国レベルの権威に基いて受入れてくれるのだから旅行社に介入させなくても実現するし、マージンも節約できると思ひこんでいるようだ。だが不特定多数の旅行団が対象になるなら旅行社を媒介させないと違法にもなるし、旅行中に不測の問題が起きた場合責任の取りようもないということが明らかになってきて、今日は渡辺、飯田らと話し合い旅行業者を介する方向に呉氏らを説得しようということになった。私も不測の責任を負うことは絶対回避したい。この企画には越えるべき山がたくさんある。

7月18日（金）

理と情

在宅だと、あき時間ができる。裏庭に出てみる。百合など少し花は咲いているが、むしろ

若葉から青葉あれこれ力一ぱい茂っている。枝切りをしてもいいが、東南にできたコンクリート壁が少しでもかくれる方がよいので枝は茂らせておきたい。ホタル袋が通路を塞ぐほどに場所をとってはびこっているの、紐をかけて茂りが狭まるよう作用した。草木と壁のことについて今日は一寸考えさせられた。マンションやアパートの生活には草木は肌にふれることはなかろう。壁や扉やガラス窓、家具は何もいわない。しかし草木は何時も何か語りかけてくる。どう受取るかは別としても人間が近寄れば常に対話の相手となる。必要なら世話もやいてやりたい。手足は汚れることもあり水も使う汗も流す、だが、それだけのねうちがある。壁は理の世界、草木は情の世界。若い時は理の世界で満足したかったが、年を重ねると情の世界の貴重さがわかってくる。

7月19日(土)

骨董品の自覚を

気分の閉塞を感じるこの頃だ。もともとテレビは見たくない。画像もであるが、解説者の言葉が聞きたくない。放映の内容もだが、つまらん劇、殺人、ミステリーなどの筋書き、出てくる男も女も意図的だ。見る人にこびた内容にするにはそうしかないだろうがびっちり時間を塞いで次々放映するシステムは変更できないだろうか。新聞も近頃は見出ししか読まないことが多い。考えてみると解説、論説の担当者は私よりはるかに若い。既にできている年齢のギャップ、己れの古さが基底にあるように思える。世間一般から見ると私は既に骨董品になっていて、その自覚が足りないわけだ。新聞の訃報欄をみていると身边的人、同年齢の人がどんどんあの世に行っている。高橋良平、龍功二郎、中牟田栄蔵などが最近送られる人となった。人は使わず使いものにならない自分なのだ。進んで人の中に出ようとしない方がよい。その自覚が足りない。

7月20日(日)

「われは海の子」

今日は土用、海の日とある。土用は旧暦で人間生活を刻む上で立夏、立秋、立冬、立春の前十八日に当るといふ。だんだん夏の土用だけに人々の関心が寄せられ、われわれは「土用うなぎ」そして海水浴に行こうとの関心だけで育ってきた。近頃の子はそれもないだろう。旧暦への関心は殆んどなくなり、生活が科学偏重になってしまっている。夏の土用入り、この三日間の天候で農作物の凶豊が予見できるという。今日では今日は「海の日」海水浴場につめかける人が大にぎわいだろう。夏休みに入るから子供は自由解放自立要請の時期となる。私は東市民センターで「なつメロ」に費した一日。今日のメロディー予定の中になかったので「我は海の子」を合唱すべく、井上さんに頼んで黒板に歌詞を書いてもらったが、二番までしか頭に浮ばなかった。会場の中から片々思い出す声が出て、ともかく三番までとし、予定歌曲が終って後、三番まで全員合唱して散会した。海へ山へと行く

季節になった。

7月21日（月）

振替休日なんて

振替休日という。私の身边は何もないスッカランラカンの休みの日であった。土曜をいれて三連休だということで、レジャーに使う若者もたくさんいたらしい。只只休みがつづくというだけで、みんなが一斉に外に出るだけ、すごい交通渋滞が各地でみられた。先進諸国では、日本のように制度的連休だからレジャーに利用するというのではなく、各自が自主的に短かからぬ休みを設定して、例えばレジャーに使うというのであれば、特殊な交通渋滞にならないだろう。公休でなく私休というか、そうしたゆとりの取り方になった方がいい。日本はもっと公休を少なくしていくのがいいと思うが逆で、何とか名目をつけて公休をふやし、それが通常休日と重なると振替休日まで作って公休にしてしまう。文化水準から見ると、低級なやり方だと思う。休みは他から与えられるものではなく、自己の生活リズムとして設定していくという姿勢が欲しい。

7月22日（火）

太陽暦、太陰暦

漢詩日暦なるものを消化不良のまま小筆で半紙に書き積んでいる最近だが、中国の長い歴史の中で陰暦が生活の中に根付いていることには気付かせられる。ユダヤ暦も同じだろうか。太陽との関係でかなり現実的な差が生ずるという不便はあるが、機械化文明以前の生活、農林漁業など自然と共に暮してきた人類の歴史の中ではむしろ便利というか、生活の指針となったであろう。先輩達の知恵で、人々は陰暦を寄りどころとして生活してきたと思う。今日それに代って陽暦が使われるが、財政、税制、就労、就学の区切りにされている程度で、自然のもつ法則と生活リズムにはかかわりなくなっている。自然を捨てたのか、どうでもいいと思っているのか、ともかく傲慢な人間になってしまったようだ。月のみちひきなんて知るかいといった今日の生活なのである。七月七日（旧）のタナバタを一例としても現在人は全く冷い。それよりも花火大会を喜ぶのである。もっと温みのある態度が欲しい。

7月23日（水）

三池労組が抱える今の課題

今年の三月末、三井三池炭鉱の閉山があり、三池新労、職労は程なく解散したが、十余人の組合員しかもたぬ第一組合（三池労組）は解散できずに、未だ「残業」を抱えている。小さい乍らも組合事務所をどう処理するか、積る資料をどうするか、OB達の希望にどう応えるか等々。今日は私も指名されて写真集編集の委員会に二度目だが出席した。一五五年

の歴史をもつ三池炭鉱。一九六〇年の「安保と三池」といわれる大争議、その後の組合員の減少、合理化、坑内大爆発、CO 患者、とくに退職金や失業対策で処理できない問題が尾をひいている。十月二十六日に一応組合活動終焉の集会を開くというのが今の仕事の目標である。一つ気付いたのは、新労の出しているまとめの本には CO 問題にふれてないのではないかと問うと、その通りとの答があつて、そこに目をあてるのが大事なんだと私は言った。安保と三池時代の労使の態度、戦術の内容、当非についても注目が求められるだろう。写真集ではそれがわかるようにしたいものだ。

7月24日(木)

死について考える

龍功二郎氏の社葬があつて参会した。71 歳だからまだ若かつたといつていい。でも最近身近な人が逝っているのに気がひかれる。同年輩とはいえないが、今年は五人の「初盆」におまいりする予定とアクロスで名をあげている。今日葬儀の時、参列者の皆さん何を考えているのだろうかと思ひながら私は死についてあれこれ冥想していた。70 を過ぎるといつでもいいと思つた。昨日安部夫妻が来た時、彼らは公証人役場に行つて遺言を残しているといつていた。十万円という。まさか葬式のやり方まで言い残していないだろう。私は、あとはひとまかせがいいと思ふ。指図する考へはない。浦川守氏(大牟田)の暑中見舞状に「安楽に死にたいが万人の願ひ」という内容が綴つてあつた。安楽死、尊厳死への願ひである。延命に、高額の医療費を投じないで、という意味でもある。万策をつくすにも限度があるとでもいう。平凡で誰でも受容できる手をうてば天命だろう。

7月25日(金)

昔から暑い中国

夜熱依然午熱同	楊万里、「夏夜追涼」
開門小立月明中	(漢詩日曆 七月五日の項)
竹深樹密虫鳴處	
時有微涼不是風	(時に微涼あるもこれ風ならず)

昔から中国でも夏の暑さは、やりようのない暑さだったらしく、この本ににじみでている。この詩はその一つにすぎない。雨が一寸でも欲しい。微風は当然。詩にあらわれるのは暑さ凌ぎに外に出る、めぐまれた人は高殿に上る、さらには避暑地に行く。この詩の本に出てくる限りでは夜外に出ても虫が襲つてくるとか扇を使うとか、われわれが幼いときに経験した小さなことがでてこない。でもがまんがまんを重ねて秋の来るのを待っていたことはよく想像できる。冬がいいなと思ふ夏、夏がいいなと思ふ冬。それが一年というものだ。中国は日本よりも寒熱の差がひどいといわれる。

7月26日（土）

天が水を運ぶ

台風九号これまでになかった程の大型という。のろのろと北上しているが九州は避けえたようだ。四国から山陽中国が心配で姫路の皆さんに電話見舞した。今夜あたり岡山方面に抜けるのではないかと。誰かがいっていたが、今年の夏は特異な天候が多すぎる。台風も早すぎる（九月のはじめが多いのに）。あれこれ思いめぐらすと地震、旱天、熱暑のような災害が起るかも知れないのがこの一ヶ月半。何もありませんようにと祈るような気持である。子供の頃の大水（洪水）を思い出す。菅生川はすぐ満水になった。流れるように作ってある小橋、洪水によって桁を折られ崩壊する大橋はあったが、コンクリートで固めた永久橋はなかった。洪水そのものに興味があつて危い橋を敢て渡ろうとして目まいが起り、川に落ちて流され下流の堰堤でようやく握るものを得て命拾いしたこともある。出水は夏の生活の一部をなしていたともいえる。

7月27日（日）

宿命のような人生選択

今来敦氏の葬儀が新宮町葬の形で行われ出席した。まだ若いのにと思うので又又死というものに考えさせられた。孫の顔も見ずに、現役で死だ。59歳。したいことをして死ぬなら、それでもいいのではないかとさえ思う。ただ安楽死という言葉があるように、無駄な苦しみはしたくない。近藤栄次郎と入院を共にした人らしいが、近藤氏いわく、医師の能力は高くないといけないうし、ポイントの見逃しはしてほしくない。いい医師、いい病院を選ぶべきだとのことだが、その判断がかんたんにはできにくいのではないかと。一週ほど前、九大の先生を紹介してくれとの要請を受けたケースがあるが、よしあしを私が判断できるわけがない。ぶち当たる以外にないが、当り方によっては一つの宿命といえることになるかも知れない。今来氏については仕事はよくするが、酒飲みがいけないと人はいふ。助役という立場では仕事のために酒を飲むケースが多くなるので、これ又宿命かと人はいふ。

7月28日（月）

記録的集中豪雨

「篠突く雨」という言葉、その通りといえる現象を今朝五時少し前目覚めさせられ、窓を明けて見せられた。突き刺すような、この力と集中性はどこから出るのだろうか。台風九号が一昨日以来山陰沖に出てまごまごしている、その最後の姿だったようだ。一時間九六ミリと福岡気象はじまって以来の記録的豪雨といわれる。福岡市では警固今泉など低地帯がやはり冠水被害をうけ、道路、地下街、地下鉄も一時不通になった。わが家も東側の山地斜面の開発工事のせいで、若干土砂流と陥没の被害をうけた。今日は「NTTあり方懇九州」の会議があつて熊本で一日を過ごしたのだが、熊本は曇で雨なしということ。ガケ崩

れ、倒木、床下浸水など、福岡県篠栗、山口県萩など新聞に報道されている。豪雨も一つの自然現象だから、対応不足を反省すると共に忍耐強く復旧に努力するほかないだろう。「恵み」の方が大きいといえるような人間社会であってほしい。被害をうけた特定の人には共同で助けてあげる方便が考えられないか。

7 月 29 日 (火)

携帯電話について思う

携帯電話が急速に拡大利用されるこの頃である。文明の利器そのもので生産、取引、交流など生活や行政やレジャーなどあらゆる分野で有効に利用されている。近頃は学生、生徒も大いに利用している。外に出た時に、事務所以外は公衆電話しかなかった頃とくらべると、いかなる場所でも連絡とりに便利である。時間の節約にもなる。二千万台を早くから突破しているらしいから、これをもっているのが常識であろう。しかし、バスの中や道路歩行中、とくに会議のさなかに、無関係な通信をする例が少ないが、このような利用は考えものである。アクロスの廊下を歩いていると後で奇妙な話が聞こえるので振り回してみると携帯電話での対応である。バスの中でも奇妙な話声がきこえる。これも見ると携帯電話である。横断歩道を渡りながらもやっている。スイッチを切っておくというようなエチケットが欲しい。又歩行中や会議中は解放されて一つに熱中する気をもってほしい。解放の味は知ってほしい。

7 月 30 日 (水)

音あれこれ

裏のマンションの庭をはさんだ藪の開発で高いコンクリート壁が作られたと思うと今はその新造成地に二階建てのかなり大きな家屋が作られるので、私宅は南側を全部塞がれることになった。東側も関連して塞がれているので、西と北が開放されるにすぎない形になってしまった。毎日のように建築工事現場から騒音を聞くこの頃である。同じ音でも、プラスに感じられるものは「建設の音」としてめでたく思うが、マイナスに感じられるものは、嫌な高い騒音にすぎなくなってしまう。音は殆んど受け取る側の主観に反響するだろう。夕暮れになっても今は蟬の鳴き声が止まらないが、一般論的には、夏の蟬はうるさい。小鳥の声はおおよそ気持ちよくきこえる。飼犬は自室から三つの鳴声となつてきこえる。どれも腹立たしく響く。いい加減にしろといたくなる。車の音がきこえないのは、この地を選んだ一つの目標がかなえられてのことで今でもよかったと思う。時にきこえる飛行機は嫌な分野。

7月31日（木）

汚職記事

いわゆる汚職問題が新聞のトップ記事として毎日のように跳んでいる。昨年後半に槍玉にあがった県の旅費問題は「返還」が沈静を誘ったのか今は心に残す人はあっても社会的には問題にされない。ギクシャクは返還では解決されない余波となって県政にカゲを落していくようだ。あのあと、他の政界、福岡のような議会問題、時を待って動き出しそうな財界と市政の癒着問題、国レベルでは銀行不良債権、倒産宣告、現在は四大証券会社、総会屋問題として賑わっている。資本主義、民主主義を善玉としてのみ捉えると「ひどい」「ひとの税金を」「弱い者いじめ」として責めるに口実と方法を欠かないが実際はその場で何とかできる。やりたいと思うと「汚職」みたいな事に発展して行くのが落ちで、正義を旗印に立てる新聞がいくら書いても治癒はできない。新聞もわかっていて、安いコストで紙面を埋めるのに好都合の材料なのだろう。

8月要記

北京天安門の博物館で予定する文化交流訪中団が一時の混迷を脱して前向きに動き出したのはいいとしても、仲間に分裂が生じ混迷の中で時間が経ちすぎ、準備日数の不足、成否の確信に傷つくまでに至って九月を迎える時がきてしまった。混迷の元は師村妙石と呉汝俊の対立にあり、師村派が呉派のこの事業に非難を浴せこれに耳をかす人達がふえてきたことにあり、関わっていた私も途中で投げ出すしかないときえ考えたが、途中まで進んでいる計画を無にしてしまうことは中国への不信を与えること、呉汝俊氏への打撃が深刻化することを熟考した上、八月上旬に、「前進しかない」旨呉氏に伝えたのであった。この事業計画は挫折寸前の傷跡を残しながら八月中旬以降再出発することになったのである。但し前途への努力と不安は九月になっても残ったままである。私は顧問という立場にあるものの、傍観はできないので、ひんぱんに会議を開いて前進へと努力を払っている積りだが、アクロス事務部など私の周辺は師村派に同調しているので私は孤立感を覚える一方、身がさかれる思いである。なるべく助けの手をさしのべようとする事務部ではない。人間って、そうした面があるものだと感じさせられている。もう年だからなとは思ふ。しかしできるだけでもつれを少なくするように、敵を少なくするように思うようになってきた。

8月1日（金）

11月下旬に予定している訪中への参加断念で後始末する

十一月下旬に訪中、文化交流をする計画につき、私は参加すべきでないとの結論が、今一時からアクロスで開かれた協議によって決定され、呉汝俊、はせがわ、立花らに通告しなければならぬ。私も動くが、渡辺、飯田が、そして松田が手伝ってくれることになる。立花氏には竹炭のその後について確認をえておく必要があるが、これは八月五日以降とな

る。大きな懸念は旅行業者に仲介させていない点である。二〇〇人もの団員募集を行う予定をもちながら旅行業者のバックなしには団員の中から起る可能性のある各種トラブルについて対応できないことが起った時、中国側が避けると、すべて当方に責任がかかってくる。森山らのいうのは、この種責任をアクロスの理事長たる私に負わされたら、困難でもあるし不名誉この上なしである。自分らはその点理事長を予防する義務がある。中国側及び呉汝俊にこの分野の信頼をおくことはできない等々の理由があげられ、事がかなり進んでいるにしても、今ならまだ退きうるといふ。

8 月 2 日 (土)

年金生活の危機

年金会計がどんどん危機に近づきつつあるので、支給額も長期的には切り下げられていく。企業年金は破算に追込まれるケースも少くないようだ。定年制を少しづつ延長して掛金を確保し、課を多くして切り下げ分の補填をはかったり苦面はしているらしいが、少産少死というか年金を掛ける側を頭数は伸びず、年金支給を待つ人が多くなり、なかなか死なないので制度疲労が急に進むのである。あと十数年もすると支給額は少なくなって年金は生活費をはるかに下廻る。年金では生活できない条件もでてくる。夫婦共働きでもその心配はあるようだ。年金以外に収入の途を考え、医療費、交際費などぐっと節減する方法を考えるしかない。ともかく健康と労働が頼みとなることは確かである。昔なら親の面倒は子がみるという形であり、今は大勢の子が制度を通じて大勢の親を見るという形になっているのに制度疲労の時が来たのである。総論を見直す時なのだ。

8 月 3 日 (日)

日本語を漢字で表現する困難さ

例の漢詩の本を読んでいるこの頃だが、まず感ずるのは知らない字が実に多いということだ。一万五千ある漢字の中で一五〇〇知っているとすれば十分の一、どんな字も使われているので知らない字句に出合うのは当然である。字句というと、中国では、日本人が音であらわす同じ言葉も別の文字で表現され、それぞれ違った意味をもつことがわかる。例えば「おこたる」と日本語でいうのは中国語表現では、怠、惰、慢、懈、懶と表現され違った意味、事象、心理の表現になる。よくあることだが、あたたかい気持をあらわす「あつい」という漢字は厚、淳、惇、敦、熱、篤など、われわれ周辺の人達は区別できないでいることが多い。ワープロではあれこれ漢字が事例として出てくるが、多くの人は選択力がないのが現状である。舟を動かすといっても、一寸手で移動させる場合、櫂で漕ぐ場合、帆風で走る場合、機械でスクリューが動かす場合、あてはめる漢字はそれぞれに違う。あれこれ勉強するのだが、頭の中に積っていかないのがもう一つ情ない実感である。

8月4日（月）

気が重くなること二件

何もする気はなく漢詩の字句を弄んでいる毎日だが、今日は何故か重みを感じず問題が二つ私を揺いだ。一つは呉汝俊が中心に進めている文化交流北京ゆきが、私の欠席のもと「はせがわ」で中止と決められ、長谷川氏も了解したが夕刻になってそれを知らずに事を進めようとしている呉氏が、帰福したとの電話をかけてきた。私は彼に「中止」の声が決定的になったとは電話で伝えなかったのだが、明日からこの行き違いがどう纏れを展開するかが心配になってきた。もう一つは、大野城市議補選で立候補する清水さんが、吉安さんと共に昨日私が欠席するに至った車の待ち合わせ行き違いの件で「陳謝」に来たこと。これは九時五〇分に陸軍墓地前で待ち合わせるとの前約束を私が忘れていて、自宅周辺で三〇分余待つという誤りも大きな原因だったので、当方から申訳ないといわざるを得ない面もあったということ、迷惑をかけたなと反省せざるをえなかったということである。連絡の心も足りぬ。

8月5日（火）

立花氏の証言

点滴のあとアクロスに行く。柳川の立花氏を呼んで、この四月到北京に行ったとき、その団名の使い方や、先方とサインを交わしその後、竹炭についてどう経過したのかの説明をきいた。渡辺、森山も説明には参加した。不始末な対応でしかなかったことはないと彼はいう。只呉汝俊にはわれわれの周辺と似た不言、不安をもっているようであった。日中友好協会の名称も役員もデッチ上げ対策で作られたものでしかないだろうという。いずれにせよ、われわれ周辺のもつ疑惑はかなり解けたように思える。国柄なり経歴の違いから呉汝俊は誤解をうけていることに気付かないままひとりよがりて事を運ぼうとしているきらいがある。又誰かに委さないで何でも自分でやっ飛ばそうとする嫌いがある。今回の訪中プランも多くが疑念を霽らせないで、先途が暗くなっている。ホラ吹きだ、信頼できない、信じていると危険が待っている、このケースを世話することによっていくらポケットに入れようとしているのではないかと不信が渦まいている。

8月6日（水）

文化訪中団を前向きにの声まとまる

訪中計画をご破算にするか、希望者だけで決行する方向で先へ急ぐかの態度を決めようと「はせがわ」事務所で一時半から結論を出す会が開かれる。私はご破算にすると反動効果が大きすぎると思って呉汝俊と前以て話合おうと思ひ連絡した。十一時半に国際ホールで二人で腹の中を打明ける対話をもった。断念するな、前向きに急げという私の言い分は彼には激励になったようだ。「有難う」をくり返し勇気をもって「はせがわ」に彼が先に行っ

た。彼が一寸耳打ちしていたらしく、はせがわ社長も総務部長も安部さんも、後向きやら躊躇する発言を一切出さず、前向きに対処する次の手順を口に出す者ばかりであった。先遣隊を出すとか旅行社に手伝ってもらおうとか、次回会合の予定までさっさと決めた。北島さんがおくれて参加したが、一七〇人の団を結んで山口さんのパッチワークの展示会の例をあげながら心配はいらぬ。呉汝俊の信用力は大きいと強調し、今日は昨日と打って変わった動きがあらわれてきた。

8 月 7 日 (木)

呉氏への一方的批判について改めて疑問あり

昨日、呉汝俊に、そして、長谷川、安部、北島の出席する実行委員会で、文化交流北京ゆきについて断念すべきでないのではないかということ私の対応の基本としての態度を示したので、そのことが白土・森山らアクロス側、加えて松田(県)側にも、伝わっており、早速今日午後アクロス理事長室で、私の態度動揺への鋭い追及があった。ここ一週間ばかりの経過からいえば、私の態度動揺に大きな問題があることは明瞭だが、昨日午前中に一対一で呉氏と国際ホールで会って交流訪中準備がここまで来ているのに「中止」の宣言をすべきではないと、私が呉氏を激励し、長谷川、安部らも従来の延長線上で前向きに受け取るに至ったことは確かだが、私としては、このもつれの背景にある師村と呉の二人の激衝の一方に加担すべきでないことを強く感じたからである。北島は一例をあげて呉氏の準備活動に不信不安を懐かなくともいいといていた。パッチワーク山口一行の一四〇人は成功したばかりだと北島はいう。

8 月 8 日 (金)

老衰者にとって盛夏は嫌

昨日は七夕、立秋。今日台風 11 号が北上し九州北部朝鮮半島に雨風をもたらし、大変蒸暑い日であった。あと何日か暑い日がつづくようだ。異常気象とはいえないが、ともかく体の置きようがないし、何かをする気が失われる天気ではある。元気な人、若い人、子供たちは旅行、海や山での活動で暑さを気にしないでその日を過ごし楽しみ一ぱいのようだ。暑ければ暑いなりに過ごし方をもっている。草木、虫、魚、鳥など自然の中に生き物はそれなりに盛夏が価値あるものとして享受されている。だから暑さから圧迫されているのは、われわれ特定の者に過ぎないようで、責めは自分にある。クーラーの利用が何よりの方法だろうが、近頃は何か不自然のようで、家庭内利用は抵抗が感じられ、自室ではなるべく使わないようにしている。「暑中見舞」のはがきが来るが返信を書くにも、当方から進んで書くにも、未だ気が乗らない。対応を迫られている感じだ。

8月9日（土）

長崎被爆五二周年

長崎では十時四五分から平和祈念像前で市主催の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が行われた。五二回目。この時の宣言についてふれておこう。（長崎市長と首相あいさつ）

【「長崎平和宣言 全文」「首相挨拶 要旨」の新聞記事（掲載紙不明）切り抜き貼付】

8月10日（日）

核兵器は維持されている

核兵器についてはいろいろ意見が、限りなく、毎年のように吹き出してくる。被爆者の平均年齢は高まり、数は減少する。語り部すらなくなっていく。それでも被爆者対応はつづく。外国で生活する人への援護には限界にある。被爆者援護にはまだ課題が残っている。他方で核保有国ではとくに中国、フランス、アメリカでは核実験がつづけられている。日本は唯一の被爆国ではあるが、軍備面からいけば核の傘のもとにあって、非核三原則も建前だけで、実質は核保有国の一部に入っている。予算の使い方も、反核・非核ではない。表面と内実は矛盾しているわけだ。今日の日本が被爆五二年、今日あるのはこの矛盾の故であろう。アメリカの属国、一州になっているわけだ。

8月11日（月）

ハッター会

ハッター会のメンバーで天神西通りの大福で夕食会があった。県の秘書室職員だった人、斎藤、高木、橋本、原口、山口、重松らが出席、東京に赴任した葉玉氏が欠席。ハッター会というのは博多を朝鮮語でハッターというときいて私が彼等に話し、それがこの会の名になったわけ。昔から（この福岡の地は岡山から黒田藩主がもってくる以前から）博多の名が使われ、代表駅のほか区名にも、菓子、にわか、織物、方言など、福岡以上に通用している名称である。朝鮮人が、この地を、物産、人情、風景など賞讃に値する日本代表の地として「博く多い」という意味をもたせ、博多（ハッタ）の名をつけたときいたので、秘書室で私が皆に知らせるとともに、朝鮮人にも一般名詞として通用するか否かを確認、私も納得できたわけである。物豊かにして人集るのがハッターという言葉の中味なので市民にも県民にもこうした意味がバックにあることを理解してほしい。博多山笠、博多者、博多弁、博多織など懐しい言葉だ。

8月12日（火）

文化訪中への方向決り

初盆まいりのあと、夜七時から、「はせがわ」で文化訪中北京ゆきにつき態度決定の意思統一の会を開いた。私にとって上海ゆきの日程妥協が可能になったので、北京ゆきも明確に

態度表明ができるようになった。長谷川氏も前向きに対応してくれたので、意見がまとまりやすかった。来会の呉夫妻もこれまでの努力を水泡に帰すことなくって大変喜んでくれた。安部、長谷川は、「行きたくないなら計画をなしにしてもいい」といわんばかりの姿勢だったが、呉氏の気力回復で、きっちり前向きになってくれた。私にとっては師村氏から受けている上海の行事（呉昌碩博物館（同舟画展）と今企画中の文化訪中が重なっていて、又裂きのようになる思い。師村か呉汝俊かいずれを取るかしかないように見える状態にあることが、ここ三週間ほど全くつらかったが、このことも今日何とか解消できる見込みがついたわけである。だから今後は文化訪中団の仕事（書展）に力を注ぐことが必要となってくる。いよいよ本番へという心の据りができた。その意味で今日の「はせがわ」会議は画期的だった。

8 月 13 日（水）

物を追い心を忘れる

近頃とくに女性の中に、結婚しない、子供は生まないという風潮が高まり、医療の進歩との関係もあって高齢化が進み、平均年齢の高まりが著しい。女性の家庭ばなれ、雇用労働への加入で労働力構造も変化し、年金は受給者がふえる一方で掛金が伴わないのでどの年金会計も破算の危機に立たされている。この少産化の傾向の中には、現在人の人生観の迷盲が大いに影響していると思う。子を育てないと思う人に人間の部分しか見えないのは当然である。お盆で墓参りに行くという思いはなくてレジャー、外国旅行で楽しむ方を優先させる。人の心の関係より物の関係にカネを投入する方が優先する。富を得ること、その富を物質的に使っていくことを優先させる。親を思い子を育てるよりもいいものを食べ、好きなように遊ぶのである。近頃は聞きたくもない殺人が平気でおこっている。若人の中にもはびこっている殺人が一種の遊びであったりする。物余り時代といわれる今日の心足らず現象というべきだろう。

8 月 14 日（木）

「お盆」は名目化

信仰の自由ということはさて措くとして、例えば仏教関係者は今日「お盆」というのをどう扱っているのか、かなり様が変わりしているように思う。以前から思っていたのだが、日本人一般がクリスマスに対応している態度は一体何なのか。どちらをみても信仰の態度というよりも物的享樂の態度であると私は見る。「お盆」には祖先のお墓まいりをする、そのために必要なら里帰りの旅行もするという敬虔にみえる生活態度が主流だったのに、今日はそれに相当する時間と費用は遊樂に充当するという態度が主流になっているように思われる。私自身責められているように思うのだが、仏壇を置いてない。どんなに面倒かも知れないが、仏壇を正常に守っていく生活もいいと思う。12 日と 13 日、「初盆まいり」を五

人分消化したが、どのうちにもきちんとした仏壇がおかれていた。今日の居住様式が仏間を特定するようになってなく、出稼ぎ的仮住いに流れ込む傾向になっていることも大きな原因であろう。ともかく今の人間は物的生活と享樂に傾斜しすぎる。

8月15日（金）

50年をこす慰霊追悼式での政界指導者発言をめぐって

終戦記念日ということで、毎年のように、政府要人の発言が報道される。アジア諸国に向けて侵略の陳謝が足らんとか、無視されているとか、慰安婦、虐殺、強奪の補償をすませないと、言葉だけでは真の反省になってないとか、犠牲になった人達の生活補償とか、物的、人的、精神的傷跡を残している限り、平和への誓いにならないとか、内外の発言を織りまぜて問題が提起されている。原爆についても被害より加害の反省が大切とかいう人が少くない。不思議に思うのは、アメリカやイギリス、フランスにこの種の問題が投げかけられている音沙汰がない。アメリカの軍事費膨張について論議の報道は目立たない。戦後五〇年がすぎて毎年この調子で敗戦記念の発言はあと何年するのだろうか。それに値する自衛隊観が確立しているのだろうか。自衛隊拡充はOK、戦争反省は不足が仲よく進むマスコミでいいのか。植民地支配は日本だけがいけないというのか。現在の世界に植民地はないのか——限りなく疑問がでてくる。

8月16日（土）

恢復しない老衰諸現象

老衰が進んでいるもとでは、衰弱はもちろんのこと、損じたものは恢復しないということのようでもある。つまり機能を損じたら元にもどらないということのようだ。若い頃は元に戻ったことが、もうありえないようだ。目や耳の機能はもちろん、各内臓にもそれがいえるし、今の私のように、皮膚の赤斑、傷模様は、いつ何故そうなったかの自覚はないが薬を外用しても一向になおらないし、他所に移動し、対応を諦めるようになっていくのだが、これも一種の老衰現象のように思える。大腸の不安もいつまでもつづいている。忘れっぽさもどんどん進む。花木の名もどうしても忘れて出てこない。人の名と顔、これも印象に残りにくいと同時にポッと忘れてしまっ出てこない。40歳代後半から忘れっぽさがどんどんひどくなる一方である。多くの人からも同様の自覚の声がきかれる。体験は深まるが、世間はせまくなっていく。発展が止るということに繋がるのであろう。

8月17日（日）

隠居への客観的要望

残暑たいへんきびしい晴天。柿の枝に杖をしていると、さすが秋も近いと感ずる。大野城市議補選に向けて私が依頼されている清水純子候補の選挙集會に安部すみ子さんが大反対

で 23 日予定の集会に行くなど彼女という。事務所開きの日 (八月三日) に行き違いがあつて私が欠席することになってしまった事に大立腹しているのである。今日の電話では、事務側の姿勢がなっていないということに加え、私の老衰への配慮の必要から楽な日々をと強調していた。動かずゆっくり休みつけてくれというのである。私自身昨日今日のように終日在宅では何かをする意欲をもたず、客も訪ねてこない。孤独の己れを痛感しているのだが、他の人からみると、既に私は隠居させられているのである。相手は庭の木ぐらいのものになったわけである。すみ子さんの電話の言葉で、隠居の要望が客観化していることに気がついた次第である。孤独の実感以外に薄々感じていたのだが、今日の電話でホッと気付いたのだ。

8 月 18 日 (月)

意欲の減退

つづけて書くことになるが老衰のことだ。全く暑かったこともあり在宅をつづけているが、とくに何かをしようという気持が起らない。無気力というほかはない。孫平化死亡の弔文を書くようアクロスから電話があつたので原案づくりはしたが、それ以外に、これまでやっていた小筆をもつにも意欲が湧かなく、病院に行く発意も消え、眠むさ、だるさに応じて自室でごろごろ過ごし、夜は八時半には寝る気持になってしまった。弔文書きに資料として日記、写真を見付けるべく書斎に入ったが、うず高く積んだままの状態では、見出す前提の整理整頓をする気力もなくなっている。多方面にわたってこのように意欲が減退していくのかと思うと終着駅に近づいた予感もひらめく。意欲と同時に能力も減退しているのだが、それを新鮮化する外需もなくなっている。孤立化させられていると感ずる面もある。新聞の一般記事よりも訃報の小欄に目が移り、この人何歳で亡くなったのかに注意が集るこの頃である。

8 月 19 日 (火)

幼稚園児相撲大会開催能力について

六月末香椎花園での幼稚園児相撲大会の結果報、九月はじめの飯盛神社での奉納相撲、十月の大濠での青少年相撲大会決行を議題とする国技振興会理事会が六時から東急ホテル 13F 玄海で行われ、15 人集まり話し合ったのだが、幼稚園相撲 (香椎) に議論が集中した。できるなら幼稚園に主催をまかせるというのが国技振側の姿勢なのだが、幼稚園連盟側にその組織運営の力が育たないし、資金を用意する力が育たないという実情が話の焦点。私見としては相撲が国民の関心として下火に向い、少子化が進む現況にあつては、幼稚園側に相撲大会開催の主体性を待望するのは当今無理があり、これまで以上に国技振が力を貸してやるしかないし、主体性が育つよう幼稚園側にもっと接触の力を注ぐ必要があると思う。参加した理事も今後ともそうだろうということで納得した。将来に向けての国技振の

大きな課題というしかない。今日はこの理事会のあと渡辺、飯田、吉岡の三人に別室に集ってもらって十一月末予定の文化交流訪中団につき私の苦境と矛盾する立場をきいてもらった。

8月20日（水）

昔懐し農業労働体験談の交流

宮本氏が車で送迎の労をとってくれ、国技振興会の年中行事の一つである飯盛神社こども相撲大会（九月一日予定）の実行委員会に出席することができた。夕食懇親会を含めて夜七時から九時すぎまでだった。昨年も大会には出席したので、社務所の環境はなつかしく思い出すことができた。米作を基礎とする農村社会が私の気持を大いに休ませてくれる。実行委員10人ほど集ったが、それぞれ地域の子ども会の世話をしてくれているらしい。懇親の中で対面に坐っている人と米作にまつわる農業労働を次から次へと話題にくり出して話が溶け合い時間のたつのも忘れるほどだった。九州も播磨も全く同じ模様の農業生活が展開していた訳だ。私が米作労働に深く関与した経験者だということを相手は初認識してくれたし、驚きだったようだ。こういう雰囲気でも懇親を交わし合ったことは最近殆んどなかった楽しみであった。今は社会が違ふと皆言う。

8月21日（木）

子供教育についての大人の責任自覚を

昨日飯盛神社々務所での懇親会の席で出た話題だが、一般の市民の相撲への関心は低下しつつあるが、子ども達は大人が熱心に働きかけさえすれば結構ついてくるという。今日も西川さんとの夕食の席で、彼女にいわせると、日本舞踊への興味も大人の働きかけ如何で、子どもは見捨たものではないとのことだった。暴力殺人事件がよくきかれ、子どもの世界でこれが多いということだが、このように凶暴事件でも平気に起こす子どもに原因があるというよりは、これ又社会が、そういう子を抱えるようになっている一般責任を痛感しなければならないと思う。昨夜の話では暖衣飽食では正常な人間が育たない、ハングリーでないと正常な心をもった人間は育たないということになる。いずれにせよ、大人は子どもに何を求めるか更に更に考えて子育てをしなければ、このままでは21世紀は人間自滅を迎える。これ又物質主義から精神主義への転換が求められている現今の緊急課題の分野の一例だと思うのである。

8月22日（金）

古い人体、自然、社会体制が進行中

夕食がすんだあと久しぶりに吉村敏明氏が来訪、FFCパイロゲンなる液体を宣伝に差出し置いていった。人間も自然も、食物も土壌も水も空気も汚染破壊されつつある全世界、と

くに日本で、この環境を正常化するに特効ある健康飲料ともいうべき液体である。彼は話の延長の中で、今の若者は特に悪質菌への抵抗を失う無菌状況におかれ、結果として O157 というような問題が起ってくる、平均余命が短くなる方向に進んでいる懸念を強調し、社会体制の面ではビッグバン問題、銀行や証券会社が槍玉にあげられて日本がアメリカに併呑される危機的状況が始ったという点にふれた。活動の根源はユダヤ人だと指摘する。いろんな点で私も納得できなくはないので、賛同的口添えの対応になったが、自然、人間環境、社会体制すべてが末世的状況を顕著にしてきたが、守りの姿勢が一番弱いのは日本ではないかということにもなる。常識的には考えられぬ殺人事件が頻発する現在の日本は当然に異常である。【21 字省略】

【欄外記入】

FFC

パイロゲン

セラミックス

赤塚物産株式会社

8 月 23 日 (土)

地方分権・自治、民主主義の形式化と基本追求

点滴と、大橋東和学院における山紫会総会と、大野城南ヶ丘第二公民館における清水純子を支える会と、三つを消化する忙しい一日だった。すべて車を利用したので行動による疲れはなかった。山紫会総会では中国の書家王冬齡による書と篆刻史に関する講演、師村氏の作品説明の二つを拝聴、王氏の揮毫見学という体験もえた。一時半から四時までで、それも中坐する形で大野城市南ヶ丘第二公民館における市議選関係の集い「清水純子を支える集い」に出席。三〇分ばかり講演することになった。ここではロンドンでの見物を例にしながら、日本は民主主義といっても上から下へ、議員は投票で選んだらあとは知らんという実態だが、ロンドンでは住民グループが日常必要な活動から出てくる事業や予算を下から地域から積み上げてそれが市レベルの自治となり予算配分となるのであるから、同じく地方自治といっても民主主義の実質は堅く事業・予算も地方分権そのものになっているという内容の話をした。ここでは自民党を名乗る書家前崎南峰先生が会長を勤めてあったので驚きだ。

8 月 24 日 (日)

「なつメロ」の一日を終えて感ずる

なつメロで東市民センターに行った。全く知らない歌曲があった。音楽は苦手の分野だし、生活時間の中で人並みはずれてかかわりが少なかったことは事実である。殊に今日、西欧との関係が深い中、ノータッチの私だから、化石になったようなものだ。そうした状況に

ありつつも「なつメロ」に出席する。異物の混入じゃなかろうかと恥じる。ただみんなで約束の一時を楽しもうというのであれば混入は許されよう。誰かが言った。どの歌も歌詩がよく考えてある。立派な文句が多くて歌いながら感動することが多い。その点現在の歌謡に劣ることはない。そのためか難しい言葉が時々出てくる。音だけでは理解できない。プリントして配布される歌詩を目で見ることができるからこそ「からオケ」の良さが保たれるのである。歌詩のプリントに関わっている人は黙々と正しい文字表現に努力している裏方さんであるが「なつメロ」には不可欠なのである。

8月25日（月）

明治の教育勅語の見直しが必要ではないか

一日がかりで明治二十三年の教育勅語原文の字句解明の勉強をした。「朕惟フニ」からはじまって「庶幾フ」まで儒教表現主体の原文には、正確にしておくべき点がたくさんある。十一月三日に予定される「なつメロ」で私が教育勅語を朗読すべく指名されているので、質問が出ると迷わず正確に答える必要があると思うので、今日はその予習日とした次第である。「国を肇むる」という言葉もきちんと解釈できなければならない。昭和二十三年に国レベルでこの勅語は以後無効と決められたようだが、効力はそうであって然るべきだとしても、それ以後の教育の偏向は、軍国主義的といわれた教育勅語の美点を捨て去り、開発主義の偏差値教育になってしまい、今日の社会悪の根源ともなっている。「学ヲ修メ業ヲ習ヒ」は教育勅語のように教育の後半において然るべきではなかろうか。偏差値教育は最優先にもってきている。教育勅語の見直しがあって然るべきできなからうか。——これが今の私の所見だ。

8月26日（火）

北京での文化交流書展、やっと動き出した

「はぜかわ」事務所で私と阿部事務長で北京での書展計画につき、会場の図面により凡その企画を論じ合ったが、呉汝俊を呼んで更に概念が具体的に浮び上がり、今後の進め方についても頭の中に具体的に浮べられるようになった。これまでは曇をつかむようだったのに、今日の図面をみての打合わせで、具体的にものがいえるようになってよかった。先方は国際文化交流中心がバックになってくれるようだ。当方も前から予期していた土井・村山両衆院の先生に改めて明確にお願いができるようになったわけで九月二日に私も上京、その仲介者にならねばならぬことになった。このような大きな事業は呉汝俊氏も自分の将来を賭けてのことといいながら、互の連携が固くないし動きが遅いと思う。今日は会場の歴史博物館の平面図を下敷に具体的に意見を交換、各自の今後の課題も論じ合ったので、やっと動き出したような気がする。あと一ヵ月半、まっしぐらにやるしかない。

8 月 27 日 (水)

ジャンケン、ポン?

アクロスで飯田・呉両氏との打合わせが終わったあと、二階の資料室に行き、気になっていたジャンケンポンという言葉の辞典でたしかめるチャンスを得た。ケンというのが拳であることはほぼつきとめたのだが、ジャンというのは何だろうと疑問が残っていた。昨日、呉氏にきいてみたが、彼は今の中国では指の形としては日本と同じだが、猜宝猜というとの答。私は両拳といわないかと確めたが否という。そして今日広辞苑をひく機会をえて両拳ともいうとの解に出くわした。リャンケンと発音し、豊後地方では今もリャンケンというらしいのである。方言で少し違う地方もあるが、リャンケンという地方もあってそれは両拳に違いない。尚お残る問題は両拳と猜宝猜がどう移り来ったのかである。両拳はどういう拳の形なんだろうかということである。猜(そねむ、ねたむ)が何を意味するのかということもある。鈇、紙、石の表現は今の日中で共通のようだが、……も少し正確に知りたい。ポンは拍子。

8 月 28 日 (木)

北京での文化交流実現のための障碍

11 月下旬に北京で開催予定の両国文化交流事業の核となる書展について今日、吉岡氏、藤正子女史らとホテルで中食しつつ、具体的展開を話し合ったが、第一に指摘されたのは用意する日数の不足、第二は経費の配慮不足、第三は業界への依頼の必要、第四は当方の担当メンバーの動き不足というようにいたるところで欠陥があるとのこと。その通りで私もそのためバタバタしなければならない近況におかれている。近辺の人達の希望は理解できるが、まだ夢の中みたいで、さまざまな困難を乗り越えねばならぬ課題がわかっていない。もう一つはこれらすべての点がもつ背後事情、前に進むべき自覚の不足を生じさせた「混迷」への自覚のなさである。アクロス福岡の事務の側の当り方をみても、困難を克服する途を探るのではなく、断念の方向に思いが傾いていたということである。私は止ることも退くこともできないので前に進むしかないと思ったのだが、これが遅れと混迷の原因になっている。

8 月 29 日 (金)

北京での書展準備は道けわしい

今日も十一月下旬に北京で行う予定の書展について話し合ったが抽象的にしか考えてなかったことを具体的実行に移す思いを点検すればするほど実際大変だという自覚が高まってくる。一般にいわれるように、考えるは易く、行うは難しである。牧坂氏にこの件で九月四日に更に具体的に話合う予定であることを電話連絡をしたのだが、彼は貢献ごく僅かという予測を強調していた。つまりあまり頼りにしないでくれとの予告みたいであった。私

の方では主体者の一部として活動してくれてもいいとは思っていたが、むしろ逃げの構えのように感じられた。二週間ほど前に初めて彼にこのプランを打明けた時に彼は予算的に心配があると指摘したが、これを重ねてみると、やはり消極姿勢だということが明らかになる。ある意味では、彼に限らず消極姿勢で以て応じてくる人が少ないわけである。そう考えると、この書展の準備は今後ともかなりの努力が必要だということになってくる。

8月30日（土）

庭木の枝切りに汗を流し得て有難い

早朝と日暮れ近く、全部で四時間余り西と南の庭木の「散髪」に汗を流した。梯子を使うのだがあたりが狭く、先は崖っぷちになっているので、危険一ぱい。体と梯子のバランスが崩れたら落ちることになる。危険を考えると、この身体では今年が限界だろう。南も西も崖になっているから念には念を入れて行動するのだが、二本の手の一方はバランス取りに、他の一本は鉋をもつ。木の枝がどう揺れるか正確に見極めえないことがありうる。今年で終りと思いつながら梯子を降りた。切り取った庭木の小枝が木下一ぱいに散り落ちる。若々しい青葉も数日放置しておくとも枝から離れ易くなるので、そのあとで小枝は処理する予定である。緑樹を相手に生活の一部とすることができるのは幸せだと思う。合理主義だけで、アパート・マンションに満足するわけにいかない。緑はもちろんだが、土と水と空気に恵まれることが望ましい。草木を植えたり、枝切りしたり的环境下なら有難いと思う。

8月31日（日）

健全さを欠くこと多し体調

読書しないとイケないのに近頃は読書の意味が全く湧かない。毎日くる新聞も大きな見出しを拾うだけで中味に入る気にならない。八月は日照りが多く酷暑といえる日がつづき在宅のため、ゆとりもかなりあったが、いざ何をしようかとなると眠るのが一番と思って横になることしばしばであった。暑い中を六本松バス停まで歩くことも何回かあった。節約の一心である。点滴治療の必要上、週二回の病院ゆきは守りえた。アロエの葉をミキサーにかけて毎日飲むことも守りつづけた。そのため、この暑さも耐ええたかも知れない。新聞によると男子の平均寿命は七七・〇一とのこと。私にとっては今年一ぱいで平均に達する。何とか行けるのではないか。でも全身皮膚に湿疹、掻き跡のようなものが出ていること、又近頃大腸不調がひどいことなど正常でない点が気がかり。更に足腰の衰弱が意識されることなど、急速に健康への自信がなくなりつつある。秋はどうか。

9月要記

日米安保の拡大、新ガイドラインの承認が事もなげに進められている。一般的に世論としてみた場合、これに対する関心は薄いと思う。飢を知らない人が多い今日だからといえよ

うが、アメリカも日本も断崖絶壁に来ているのに、危機感が乏しく、橋本首相を始めアメリカの言いなりに従い、東洋を食い物にして生き残ろうとしているガイドラインの危険性に気付かないでいる。日本国憲法があるからいいという発想はもはやできない。なし崩し的に憲法の理念は踏み破られつつある。輸送、医療の労働者は戦地に追いやられることに気付きはじめているし、空港、岸壁、高速道路の使用が「緊急」に不可能になることに気付きはじめている人も少くないが、世論を動かすまでには至っていない。自衛隊はアメリカ同様、むずむずしているに違いない。小樽の港にアメリカの軍艦が入ってくるなんて無茶なことだが、橋本内閣は暗に承諾して、国民を馴らしていこうとしている模様である。なし崩し軍事動員の時代に入ったというほかないこの九月であった。私たち既に未永くはないが、今まだ働き盛りの人達、その家族即ち日本の次なる世代の人達は飽食の代償に、アメリカに盲目的に追随し共に亡びゆかせられる運命にあるといたい。50 年もつづけた平和の代償が求められているのかも知れない。

9 月 1 日 (月)

飯盛子ども相撲大会に参加して

飯盛神社は九月一日が二百十日風止祭があり、国技振興会も加わって今回で三回目になる子供相撲大会はいわば奉納相撲ということになる。氏子関係の村落の人達が実働部隊となって実行委員会を作って実現の骨折りをしている。とくに女性部では茶、チャンコ鍋、ごった煮、ビール、コーラ、とくに味ごはんの握り飯等々大きな汁器、炊飯器で大がかりに協力体制を組織して裏方役をこなしている。昔の「村」の復活を思わせる。商業主義が支配的な市街区域、マンションの立並ぶ住宅区域では、とても考えられない人の和の絆がよく作動していることが気付かされた。相撲選手の子供たちの奮戦ぶりをみていると、無限の可能性をもっていることが掴みとれる。この子は、この面で伸びそうだと感ずる相撲のチャンスが得られた。二時間余神社の境内で夏の雲、木蔭、通る風、香る空気のことも感じることができた数時間であった。失いかけた自然・人間が蘇生していた。

9 月 2 日 (火)

日本人、社会、交流、生活を凝集した東京

十一月下旬に北京で日中文化交流を行うための準備で、議員会館に土井たか子、村山富市兩人に連絡すべく上京して面談するという目的はラッキーにも果たしえたが、現時点では臨時国会招集がありそうで両議員とも訪中依頼には否定的観測をもち、われわれの願望は無理のようだった。国レベルでは行革の実現、日米安保拡大のガイドラインの合意、「有事」体制の了解、年金・医療政策などの見とおしの明確化など山積する問題に取り組む臨時国会が、十月十一月に予想され、通常国会に流れ込むだろうといわれる。われわれが希望する日中文化交流は十一月下旬で、臨時国会とバッティングしてしまう。福岡から上京して議

員会館を訪ねた関係者四人（私、阿部、飯田、呉）は一様に、その予測を前提に企画構想の出直しの必要性を直観させられた。東京って、政治、産業、外交、交流、生活すべてに亘り、何と、せかせか多忙なんだろうと改めて感じさせられた。一部の人に集中している現象ではあろうが。

9月3日（水）

インターネットの社会を考える

昨夜は世田ヶ谷の啓二のうちへ直美夫妻も来たのだが、サリをはじめ備え付けのインターネット操作にみんなの興味が集中し、私はむしろ孤立となり、十一時頃に就床したが直美夫妻は一時頃まで帰らなかったという。若い者は子供まで情報機器にとりつかれている今日の社会状況の一端をはじめてこの目でみたわけである。情報機器は数ヵ月もたつと更に高級なものが売出され、使い馴れた頃には旧式になってしまっているという。販売店が旧式の在庫処理に苦勞し、それを驚く程安価で売るといふ。使用する側は旧式にも新式にも吸取られるように捕えられる。知識の宝庫に心身共に吸収され、ゆとりも文化的感覺情操もなくしてしまうように見受けられる。情報機器を使う人でなく人がそれにはまりこんで捕虜にされてしまうという感じである。昨日は六人集ったが、人間味のある話題は全くといっていい程でてこない。知識はその機器の中に充満しているが使う人の頭は空でよい。

9月4日（木）

こおろぎの音で涼しさが増す

今年最後の月下美人、今宵二〇輪ばかり咲いた。通算八〇輪咲いたのではないか。夜はとくに秋を感じさせる。蛩の響きが特別だ。姿を見せないで鳴声だけ、心が静まる。晩夏の蟬の声も悪くはないが、暑さを加えるのに対し、蛩は夜で初秋、涼しさを加える。ただ虫の立場からは人がどう感じようが、自分達は真剣に鳴いているんだぞといたいだろう。人の側からは、同じ真剣でも飛びついてくる蚊と比べると可愛さ一〇〇点である。ところで字に不安がでたので字典をひくと、「蛩」も「蜚」も、「こおろぎ又はきりぎりす」とある。国語辞典では「蟋蟀こおろぎ」とある。漢詩日曆に、九月十一日の頃に出ている。この本の解説には蜚をこおろぎとしている。私の幼き頃の経験でも草むらで鳴く蜚の姿はつかめなかった。鳴き声だけが存在。しかも唧々ころころひびく。

一蜚何唧唧	一蜚何ぞ唧々たる
吟落兒童心	吟兒童の心に落つ
只在竹籬外	ただ竹籬の外にあるも
篝燈無處尋	篝燈尋ぬるに処なし

9 月 5 日 (金)

三池組織の終末に思う

三池労組の解散又は活動停止をどのような形で行うかということで私もメンバーの一人として論議に参加している。五～六人のメンバーで現組合長芳川勝氏ほか元組合長森田、中原、田口らが中心。古い OB では浦川、久保田、山田が出ている。論議は「三池闘争」が主題、CO 患者 (炭塵爆発) もこれにつづくが、組合の組織そのものの維持、解散の形式、記録発行、資料、施設の保存、維持などが議論される。新労も職組も閉山と同時に三月末で解散している。こうした中で私が感ずるのは多くの意見が「企業別組合主義から出ていない」ということだ。新労や職組の解散は、会社なくして組合なしというに尽きる。組合事務所、資料、OB の拠り所、CO 患者の抱える問題、住居、再就職などまだまだ問題は残っているのに、「会社がないので」という根拠で今ある組織を閉じようという意見が強く出る。この企業別組合主義を越えるところに、「みいけ」の価値があるのではないかと。21 世紀をみよ！

9 月 6 日 (土)

自然と断ち切られた暦なしの人間生活

先日の飯盛神社での子ども相撲大会、これは三回目であったが、月曜日、九月一日は神社の風止祭で、奉納相撲の意味をもたせる限り九月一日は動かさないという。この日は二百十日、この日記帳にも印刷してあるとおり、風の盆ともいわれるようだ。長い生涯だったのに、私は風の盆らしい行事を体験したことがない。立春から二百十日に当る。それは節気を基本にしている。今日の生活は太陽暦のもとで暖房も冷房もあり、アパート、マンション、住宅街商店街官庁街、そして自動車、地下鉄、バイクなどで事を済ませるので節気などどうでもいい人が圧倒的。彼岸花がどうのこうの、どうでもいい。土曜か日曜か祭日か休業か出勤日かの違いだけ。太陽暦採用、一週間制の採用で、人人の生活は自然のサイクルから断ち切られてしまっている。トマトやキウリに気節・旬、がないのだから。人間はこれでいいのか。

9 月 7 日 (日)

過剰の中の暮し

過剰といえるものがたくさんある。物品、報道、広告、表装、レジャー、そして競争等々を指摘しうる。物余りをはじめ、これら過剰が人間のあり方に悪い影響を与えていると思う。こうした中で若者への考え方選択、人世観、世界観に、ゆがんだ方向への刺激を与えているのではないかと。偏差値を高くするための教師、親、子の努力、これまた過剰で、心の教育が偏向してしまっている。子供の殺人事件など、原因究明に誰もが困り果て混迷している。われわれ年を重ねたせいかな、これら過剰が嫌になる。私はテレビを殆んど見ない。

新聞も大きな見出し程度で中味に立ち入らない。広告別紙が新聞と同じ厚さ程度一緒に配達される。新聞にも広告が多いが街路の看板広告も美観を害する程である。表装は幾重も幾重も行われており、殆んど全部がゴミになるしかない。医師の処方箋も過剰のうちに入るだろう。

9月8日（月）

思考の基本を洗い直す時が来た

午後二時、飯田氏の仲介で、池袋の教会牧師本多定雄氏と東急ホテルで面談した。その結果、私は近々竣工する池袋西のシャロン・ゴスペル・チャーチに（10月13日）竣工祝辞を述べに行くことになった。平素私がいっている科学的合理主義を反省する必要について彼は大いに賛同してくれた。近頃は国内の政経分野の指導者の中からも、そうした声が上がっている。はせがわ事務所での文化交流訪中企画打合わせのあとのコーヒー席においてもRKBのOBたる阿部事務長も全く同意見であるとして、環境・高令者問題に力点を移した事業に力を入れていると、例をあげながら仕事の中味を談じていた。産廃としてのコンクリートブロックの処理費が今トン当たり一万五千円もするが、福岡市では、あと二年で産廃処理場が満配で行詰っているという。有効利用の開発、処理場の新設もだが、廃棄物を出さない努力、分別有効処理の徹底など従来の考え方、基準を根本的に洗い直すべきだ。

9月9日（火）

健康状態

八月が終わったら少々楽になるのではないかとの予測は全く逆。だのに体調についてはますます不安が大きくなって来た。数日前、県と市から、かんたんな喜寿品をいただいたが、かえって或る意味のシグナルが来たように思える。足腰の衰えが目立つ。六本松バス停まで歩くことがしばしばあるが同じ方向に行く人に次々に追越される。自分ではゆっくり歩いている積りはないが、他の人ははるかに早い。視力が衰え、歯もがたがたである。それに大腸のゆるみがつづく。薬のせいか、飲みつづけているアロエ・ジュースのせいか判断がつかない。薬の方を控えている。更に尿が近い。何回なのか数えてないが、一時間、二時間ごとに排泄に行く必要があり、これが正常な活動に嫌な影響を与えている。幸い食欲は通常で、他者から指摘される程である。今日は、九・九・九。重陽とか救急とか名づけられるが、若者による自動車交通事故、劣悪なマナーが心配である。末世的とさえ思える。

9月10日（水）

植民地はなくなったといえるだろうか

五〇余年、植民地というものがなくなったように感じられていた。しかし今、よく考えてみるとこの表現もやはり世界史的なもので過去何百年かつづいて第二次世界大戦を境にな

くなつたに過ぎず、実態はもっと前から、そして現在もつづいているといえよう。アメリカの対日諸政策はそれを現実のものとして見せてくれている。つまり原爆投下で終わった大戦後は、日本はアメリカの一州以上に残酷にアメリカの統治のもとにおかれ、日本の歴代政府はアメリカの「総督府」的役割を果たしてきた。ここ数年のアメリカ軍事要求は冷戦終結後はとくに露骨にみえてきた。日本安保条約は極東の範囲を拡大し、ガイドラインの見直し、有事法制への準備の足音も高まり、日本の自衛隊はカンボジア内紛に飛び立ち、アメリカの核空母が軍港でない日本の港に停泊するなど、戦争体制（民権への侵略）が昔の非常事態なみに地ならしが目にみえてふえてきている。福岡空港が軍専用に変換される可能性もみえてきた。

9 月 11 日（木）

サリからの手紙

九月二日に上京したとき、啓二宅（世田ヶ谷）に泊ったが、翌三日夕方羽田発で帰宅したのだが、啓二が羽田まで送って来てくれた。この時サリの学校からの帰りが遅かったので、彼ら一家全員で羽田まで来て夕方を空港で共にしようとの思惑が実現しなかった。啓二の発案で空港の書店でサリに、参考になる本を買い私からの「みやげ」として啓二にもって帰ってもらったのだが、サリからお礼の手紙が届いた。例によって小さな字でかんたんだがポイントを全て網羅しているので立派な手紙だといえるし、この子の誠心がよく伝わっていると感じた。温和でよく出来る孫だと感心し成長を期待している。あの夜直美夫妻も世田ヶ谷に来たが、みんなインターネットに興味をもち機械に寄り添う数時間で私はのけものにされていた。世の変わりが激しくて私ども興味ももてなくて若者向きの物がどんどんふえる時代だ。

9 月 12 日（金）

危険な道をかなり歩んできた日本

第二次橋本内閣が発足したとか、消費の落込みで不況が深化しているとかニュース価値ある新聞記事がつづくが、どうしてか興味がわからない。鈍感になった訳だ。ただ医療保険収支の危機の中で医療費が九月から上げられたのは早く死んでいいということのようで気になる。又日米安保の拡大政策の中で、核持ち込みを前提としたアメリカの空母が日本の民間利用港に入港したり、日本の空港や高速道が軍用に転化され民間利用者が締め出される可能性がでてきたなどいわれると、これも亦無関心ではいられなくなる。不況の深刻化もこれらの傾向と連動しているに違いない。アメリカ軍のコストを全部日本の財政支出で補う傾向にあるからこの税負担も無視できない。日本の軍事国化がにわかに進んでいるといえるだろう。政府は国民に隠せるだけ隠して、気がついたら、もう元に戻れなくなっていると推測する。

9月13日（土）

一期会という絆

近藤栄次郎氏を会長に一期会というのができていて近頃は毎年のようにその会の懇親を湯布院で行っている。今年の今日、明日信用保証協会の保養所寿荘13人集った。近藤、松尾、是松、広沢、三笠、森山、松永、星野、それに女性藤本、丸本、迫丸、そしてわれわれ夫妻。三人の女性はいつまでも独身のようで、家族を新たにもつ気持はないかのようである。子を生まない社会傾向の中にどっぷりつかっている。女も社会的に働き金銭収入を得たい、それができるなら結婚はしないでいい、子を産んで生活を狂わせたくない、親の面倒をみてやらなければならない、事務職など体力にそれほど影響がないなら継続に困難はない等々である。公務員のような比較的安定した職場なら退職後も年金で何とか凌ぎうるという心理も働く。13人のうち7人が現役でない。何かと大病に出くわしながら医術に助けられ元気である。同じ職場で体験を共にしたというので、人生数多い縁のうち、一期会というのも太い絆に属するに違いない。知事という新環境にとびこんで来て、お世話になった人々だ。

9月14日（日）

一人のコレクター

湯布院での一期会からの帰途、森山氏の車で松永、われわれ夫妻は吉井の金子文夫氏と会うことになった。筑後川温泉の佐藤氏のホテルに来てもらい松永氏も加え五人で中食会をすることとなり、そのあと吉井民俗博物館に案内してもらった。金子文夫氏は86歳というのに元気そのもの。地域文化史に通暁し、文化財といえるものは驚く程念入りに膨大な在庫を作っているコレクターである。生涯をこの分野に打込んでいるともいえる。中食会及び博物館見学の四時間ほど彼の談話や説明をきいていると「びっくり」そのものといえる。とても及びえないにしても私が一寸でもコレクトに役立つものがあれば、今後私の環境整理の中で役に立ててほしいと思った。「何でも秩序立てて集めている人」ということができるのだが、一般に「ポイ捨て」が多いので、これが光ってくる。今の人ならとてもできない、やる気がない、町に住む人にはできない、場所がない。吉井という環境、86歳という年齢、それに金子氏のもつ個性と能力、とくに金銭にこだわらぬ一途な根性、得難いものだ。

9月15日（月）

高齢者対策加重

敬老の日ということで町内会から赤飯と蒲鉾をさし入れてくれた。祝意は有難い。前以て県と市からは喜寿になる私に祝意の表明もあったので今年は何か重々しく感ずる。町内会のは七〇歳以上ということであろう。われわれ二人とも食べ物をいただいた。早速、赤飯

を食べることになったが、一人分で四食が可能である。高齢者が比率では一五歳以下の人口を上廻ることが先日発表された。高齢者にかかる費用が毎年大きくなり、公的財政を圧迫し、著しい負担増と福祉対策の抑制が狙上^めにのぼっている。働いて収入のある高齢者等々、高齢者も状況をこまかく分け、福祉対象から除外できる者は除外したいのが政省当局の方針のようだが、平凡な高齢者にとっては、その差別選別は不服だし、福祉切り捨てには反撥^{はんぱ}を感じる。軍事・安保分野の支出がどんどん膨張^{ぼうちやう}する中で国民一般は今後高齢対策費加重^{かじゆう}に今後どう反応するだろうか。

9 月 16 日 (火)

大雨、高潮、土砂崩れなど台風災害

台風 19 号が鹿児島湾に来て以後一日中その進路や被害について気づかった一日であった。夕方には瀬戸内海方面へ抜けたが、九州では福岡・佐賀・長崎の三県を除き、かなりな被害が出たようだ。福岡県でも空路、海路、高速道、鉄道に多くの運休が必要だったため、被害なしとはいえない。土砂崩れによる倒壊、高潮、浸水など、被害額や人的災害を計算するとかなりなものとなろう。昔から地震・雷・火事・親爺といわれたが、暴風雨はその次にくるのだろうか。田畑の浸水による農作物、風による果実落果も痛手のうちだろう。車体の半分近くまで水につかったテレビ幕も出たが、何百万円かの車を買って替えることになる。交通機関の運休のほか、子供の学校ストップもある。出席すべく義務付けられた子供が帰校のとき水害にあうとすれば、学校閉鎖を決める教育関係者の責任は小さくない。五時頃にはわが家も雨風が去り植木鉢が一寸倒れた程度ですんだ。

9 月 17 日 (水)

大野城市議補選清水純子祝勝式

大野城市議清水純子の補選祝勝会が六時半から商工会館で行われ私は来賓挨拶に立った。一〇〇人ほど市外の関係者も少くなかった。「支える会」の前崎会長夫妻、秋枝蕭子さんに会うこともできた。昨年市議で男女共同参画型まちづくり宣言をしたのでその路線を伸ばすべく期待するという声が高かった。女性市議を一人ふやすことができた(三人に)勝利への努力を認め合うとの声も強かった。私もだが清水さんが弁さわやかであるとの力量を認識し直す人も多かった。昨日は彼女の議会初出席でもあったが、代表質問を買って出るとの決意もきかされ、みんなの喜びと期待が充満したパーティだった。選挙運動中も今回も三重野参議の車で送迎していただいた。坂井ひろ子さんは選挙に没入していたので年末までに児童文学分野の原稿に今後は没入したいといていた。中島慶子さんにも合った。嵐で見られなかった十五夜の月は今日九時頃には見ることができた。一きわすがすがしく思った。

9月18日（木）

自然環境の破壊に注意を喚起しよう

ゴミ処理を利用して発電をしようという自治体がふえているようだ。環境問題が大きくなっている今日、ゴミ処理に責任をもつ自治体が捨て場に窮しているのも事実であり、発電が問題緩和の一助になるよう期待する。他方、ゴミ・廃棄物を出す側にも注文したいことが少ない。とくに包装の過剰には厳に流通業者に配慮を喚起したい。できるだけ包装を少なくする工夫が必要である。生産者には空瓶、空缶になるような生産はなるべくやめてほしい。便利主義をもっと控えるべきだろう。コインによる自動販売器をもっと制限できたらよいと思う。消費者の側には例えば捨てたい自転車、自動車を放置捨てにすることをやめてほしい。その他注文はいくらでもある。モラルが変わってしまっているのも情ない。今日は裏庭の植木切枝の仕末をするのに燃やすのを止めて、できるだけ土に戻すよう、鉄で小切りにしていくことにした。腐らせて土にしたいと思うわけだ。

9月19日（金）

虫の響き涼しく清い、肌にしむ

秋になった実感を味わう。空気、太陽、一昨日の満月、今日はおそい夕食だったが窓の外から虫の声が響いてくる。市街地、高層マンションでは体験できない涼しい声だ。夜寝る前に綴る日記かきの時、三つ、四つの種類の虫の音、しんしんと両耳に、さらに胸に、腹にまで響くかのように受け取る。花は姿を見て感動し、虫は姿を見ることなく、空気と一しょに耳に、肌に感ずる。古来、中国の詩にもこのような自然の中に置かれた人間の感動が詩に残されている。こおろぎも鈴虫も一斉に、いたるところで響かせるわけで、生き物としては無数だろうし、あらゆる草場に生息するとなると驚きである。何千年も、そしていつまでもだろう。不思議というしかない。蟬の時季もあつたのに、今はもう秋の最中、蟬に代った季節代表といってよかろう。政治の腐敗、金融機関の上っ調子、景気の不調が云々されている人間世界に対し、虫の秋声は何か教えているように思う。

9月20日（土）

久しぶりの姫高会

渡辺通りの「くいだおれ」で二年ぶりの姫高会が行われたが、常連の中で三木さんが亡くなられたという。みんな年を重ねまずは元気な人が寄ったが、田口さん、あと一人病気のため欠席。問題はこれまで幹事役をしていた並川さんが事業に失敗したのか音信不通、代わりに牧坂がやってくれた。山村、水野は所用で欠席という。出席は七人。八〇の坂をこえて久しい岡田さんは近頃講演会に呼ばれ忙しくなったとのこと。彼が中国陽明学を基本に、西欧、欧米の理知偏向に対し、日本伝来の感性を強調する社会観が指導層に受けているらしい。私が近代西欧の科学的合理主義偏重の限界を指摘し、わが国にも伝統的な情緒、

精神の面の復活が必要なこと、「脱亜入欧」(福沢諭吉)を反省すべき時点に来ていることを、この頃強調しているのと、口裏が一致するのには驚いた。土井氏はよく本を読んでいるらしい。高本、野村など医師組は今日の病院界の経営が保険制度の変化や高齢化の客の変化で経営は苦勞という。

9 月 21 日 (日)

ガイドライン見直しの恐怖

米軍の動きに日本政府がホイホイ呼応している現在。労働新聞九月十五日号は「ガイドライン見直し反対」の見出しで次のように述べている。詳細自分で書けないので引用してみる…米国は現在、九月下旬の日米防衛協力のための指針「ガイドライン」見直し最終報告をにらんで、わが国全土でのその先取りの攻撃をかけてきている。小樽、函館、横須賀、佐世保、鹿児島への空母などの寄港がそれである。しかし、こうした策動は、逆に全国の闘争に火をつけた。一昨年来高まった沖縄での米軍基地撤去の闘いが、いっそう全国に波及しつつある。またガイドライン見直しによって総動員される港湾、航空、海運などで働く各労働組合は、反対の動きを進めつつある。アジアと敵対するガイドライン見直しに反対しよう。またこの総動員態勢に組み込まれる各地域、職域などで反対の闘いを強化しよう…いいなり、ズルズルで事態は進むか心配だ。高速道や建造物も物資も「危い」と私は思う。

9 月 22 日 (月)

北京ゆき否定の影さえ見せぬ今日の会議

北京ゆきについては二度目の磨擦があったが、今日の会合ではどんどん具体的な話題が出てきて、溝部、阿部、呉氏らの躊躇のかけさえみせぬ陽の人物だった。今日は茶立ての話題がトップ。用品をどう準備し、発送又は手荷物に分け、会場の略図、椅子、燃料、水、茶子、花など具体的な点検の必要性の議論に及んだ。舞踊については、新しいグループの参加が決まったと報告された。参加グループ毎の人数の概略点検もなされたが、未だ一五〇人余りで、今後、一般募集に向って更に努力しようということになった。このような議論のなかでは数日前森山氏が中国の対外友好協会の李佩さんの電話だということで見せた否定的な意見は全く気にされていないことがわかる。一昨日呉氏からきいた話では、呉が李に電話したら李氏は「言わされたので」と答えたという。森山が仕掛けたということになるのか。

9 月 23 日 (火)

木の葉の生命

済生会前院長土屋呂武さんの本葬前にある通夜に出席した。福岡斎場で本葬のような高度

な通夜だなどと思った。死人に口なしという言葉があるがあの世に行くところの世のことは通じないのである。近頃木の葉の落ちるのを見ながら木の葉の生死の区別はどこで線が引かれるのだろうと考えたことを思い出す。生命がこの世に出てくるのも同じである。一つの木で枝葉の違いで生死の別があってその木の生死とは関係のないことも当然にある。アメリカは中国政府が人権を重んじないと度々指摘しているが人権とは何だろう。それを重んずる国にいる国民は幸福でそうでない国の国民は不幸かときくとそう簡単な答は出てこないだろう。民主々義とか人権というとオールマイティのように聞えるが、いくらでも疑問は残る。自然破壊の見本のようにいわれる日本の政経部門は生命、人権、民主々義に関係ない基準で動いているようだ。

9月24日（水）

師村氏のパッション

師村氏が来日の諸葛坤享氏を迎えて北九で行った諸行事に一日がかりで参加した。中国から諸葛孔明48代目の後裔を招いて愛知の豊田市で三国志関係の書、篆刻、切絵展を行ってきたばかりだが、師村氏は精力的にやっていると感心した。今日は北九若松区の花房小学校で諸葛氏の講演会をし、貯水池畔で呉昌碩生誕一五三年式を行ったが、学校の教師、父母、50人ばかりと児童六年生を体育館に集めてのことだから市の了解支援も取りつけ教育庁の幹部も動員してあった。平素から彼は北九市の書芸関係のメンバーを束ねていて、その支援があつてのことだろうから、これだけの祭りごとが実行できた背景には平素からの指導力、信頼が有効に作用したものといえよう。書芸秀でるだけではなく、大衆を束ねる力があればこそであろう。個性あつてのことである。エモーションの大事な時代であるが、ここではパッションの作用が強調されている。

9月25日（木）

大学生協さまがわり

博多駅南口近くのセントラーザで九州大学生協事業連合の取引先協力会の第四回総会があり理事長代りとして私が出席挨拶をすることとなり、一日をそれにあてることになった。私が九大生協理事長をつとめたのは六〇年代のはじめ頃だったろうか。正確でないが、その頃と今日では生協も様変わりしている。商品の中味も、会員の生活内容も生協への期待感も想像をこえている。今の学生は個室、電信情報機器の中に埋もれている。中食など生協への期待は稀薄だろう。生活視点も消費の中味はハードよりソフトに重点がおかれている。教科書・テキストも必要部分について、自室にあるコピー機で用を足す。ノートは他から借りてコピーするということになるらしい。レジャー、ツアーなどのニーズに生協はこたえなければならない。情報機品は日進月歩で新しい商品が店頭にあらわれるから、売りそこねると在庫の処理に大きな負担がかかる。今日の報告では赤字経営が話題になって

いた。

9 月 26 日 (金)

文化交流訪中企画前途にカゲあり

和太鼓の杵屋佐三造事務所から配達証明つき速達がアクロス奥田宛に届いていて、その受取りに午前中にアクロスに出かけた。コピーが事務局にも「はせがわ」にも届いているようだ。それには今回課題となっている文化交流訪中団に杵屋氏は参加しない。その理由は、ということで呉汝俊氏への不信点を五項目あげている。その中味は呉氏が私腹を肥やす方便をとっているとか、北京の人民対外友好協会はこの件を全く承知していない、九月はじめの山口怜子氏のパッチワーク訪中で呉氏が九〇〇万円を横領した等々というのである。「はせがわ」の溝部氏は事実確認に数日を要するが、こうした杵屋氏の指摘する事実があるなら、今回企画している十一月下旬の訪中旅行は中止するしかないと私に告げた。私はまだ半信半疑の心境である。呉氏がこのような集中砲火を浴びる男なのか否か、自信ある発言はできない。溝部氏は不信の方に傾いている。

9 月 27 日 (土)

大学生協でのクレジットカード活用について

三時半から千代町で行われた生協事業連合の理事会に出席した。議題の中で多くの時間がかかったのがクレジットカードのことだった。これは組合員証と結合させて組合員の組織拡大につながり購入を容易にし滞納による経営困難化打解にもつながるからである。カード利用は現今の消費流通では常識化慣行化しているが、その管理という面ではプライバシーの保護との関係もあって、多くの問題が内在しているようだ。組合員にカードをもたせると現金をもたない時でも購入できるし、広く応用でき分割払など集金が容易になるが、その間様々な情報機器が使われ、経営が近代化拡大化されるという有利さがある。カードは学生と教職員に区別され、ローンにも使える。これらをめぐって様々な発言があったが、私の如き実生活に取りこんだことのない者には、なぜそのような世界に入らねばならないのか理解しがたい。大企業に有利なことかも知れないが、事こまかく身近かな人間関係で事足りる程度の者には益なしということではなかろうか。

9 月 28 日 (日)

同窓、母校の意識が薄れてしまった私

一昨日安田利政氏から電話があったが、京都で準備されている姫高文甲二の同窓会には欠席すると答えておいた。経費のかかることにはなるべくかわりたくない心境なのである。先だつての姫高会九州は年寄りばかりで世話する人がいなくなった模様で牧坂氏はこれで終りにしたいといったが異論は出なかった。安田の電話でも文甲二のクラス会はこの辺で

打切りにしようと思っているという。似たことになるが、同窓会というものに意欲が向かない年頃になっているといえるだろう。九州寮歌祭にもグループを作る勢いがなくなっている。私の場合は別に龍野中学時代の面で一〇〇周年の案内がきているが、これにも欠席することとして返信を出していない。龍野中は女子校と合併して同窓会の意気込みは薄い。四修ということもある。又曾左小も一〇〇年をすぎたが校区が分割されて母校の消滅すら感じさせられる。小学校の場所も移っているから尚更だ。

9月29日（月）

金印友好会の第一回ゴルフ会に同行

七月に結成した金印友好会で今日穎田町の北九州カントリークラブで第一回ゴルフ会を行った。12人が参加。私は会長ということで九時半スタートに際し第一打を儀式的に行った。このゴルフ場は初めて。全体を廻らなかつたがスタート地点からの景色は心地よく受けとめた。グリーンはともかくレジャータイムを過ごすのによい所だ。メンバーは中食に一応食堂にあがってくるがグリーンに引き返す。今日は幸い雲一つないような秋晴れ。終わったときはみんな顔が赤くなっていた。平素はあまりやってない人達だ。私はリザーブされた部屋を借りて色紙書きに集中した。西陽がさしてくると汗をかく程に温度が上昇した。知事になって間もなくゴルフ技能を身につけるべく輝国のネットに行っていて県会議員と出くわし、彼が文句をいったのでそれ以後、絶対にやらないことにしてクラブも一彦に引き取ってもらい縁を切ったゴルフだったが、又今は名目のみ関与する身になった。

9月30日（火）

中国人民共和国 48 周年祝賀パーティに臨んで

夜現中国成立 48 周年祝賀レセプションが総領事館で行われた。在福岡の主要人物ら三〇〇人ほどの参会者、古い友人知人に多く会うことができた。篠原文治、谷尾欽也、福教組だった白石などなど。九月から新任の陸琪総領事は清朝のあとの孫文、毛沢東など中国の現代史のポイントを指摘しての挨拶。鹿児島から参加の二階堂氏（88 歳）は二五年前の中日国交正常化について田中角栄総理の決意の重みを生存者を代表する形で話した。毛沢東、周恩来にもふれた。鄧小平の改革開放政策にも言及した。総領事も期待をこめて説明した。香港の復帰も大きな意味をもつという。二階堂氏の挨拶がどうどうめぐりで長すぎたのも今回の特徴でそのあとに控えた麻生知事の挨拶はさわがしく混沌した雰囲気の中にまぎれ込んでしまった。四時すぎ大坪康雄氏と具島兼三郎先生を訪ねた時も私は中国の位置について注目すべきであることを強調したのだが、日中、日米、中米の動きが世界的に注目されよう。

10 月要記

痛感する老衰。まずは頻尿、次は足腰の弱化、目や歯の衰退である。頻尿の面では二時間もてるかどうか。就寝中三度ぐらい用便で起きなければならないし、会議前後に用便する心構えが必要である。これがもっとひどくなるとどうすればいいのだろうか心配である。足腰の弱さは徒歩ではつきりする。つまり足がわが身を確実に支えているとの自^マ確がえられない。段差にも弱い。建物の段差もさることながら、道路などに生じている段差もある。道路工事をする場合、車の滑り止めのつもりで意図的に段差をつける行政当局がにくらしくなる。更に歩行中後方から並ぶ人に追い抜かれるあわれさ。とくに女性の歩のテンポはまねできない速さの刻みに見える。急いで歩いてどうするの、といたいほどだが、逆に己れのテンポの遅さこそ問題といたいのである。目や歯の衰退は専門家にたよればいいのであろうが、自分のたいまんをさておくとしての感じである。眼鏡が合わなくなって久しいのに放置しているし、歯も義歯対応をすればいいのに放置している訳である。面倒しいとの判断が先に立つ。これも年のせいかなと思う。あとひどいのは皮膚。いたるところに湿疹あってひどく痒い。これも既に一年はつづいていよう。しかし対応せずに放置している。自然に対処することなくまかせてしまっている訳でとり立てていえる理由はない。自己非難で過ごしているこの頃である。

10 月 1 日 (水)

生協役員の時思い出

10 月に予定される生協連の環境保全サイクリングキャンペーンに私に一役担ってくれとの依頼で魚屋氏がアクロスに來訪してきた。私は OK といったが、魚屋氏との再会は三十余年ぶりである。私も九大生協の役員をしていたのだが、彼も専従役員だった。当時生協は左翼的動きが目立ち注目されていたが、その線で私も理事長に推されていた。ところが学生部参与として教養部から選出され、その私が学生部長に選ばれてしまった。部長と理事長を兼務することは事実上不可能なので生協の役員を辞退するしかなかった。それはとくに問題とするに当たらないが、文部省の指揮に入った私は、生協と対立する学生部行政の先頭に立たされ、例えば食堂の茶の葉は公費でなく生協のコストに転化するといった事に典型的にあらわれたような「生協攻撃」の先頭に立つことになり、生協から随分強く責められたのを思い出す。今も文部省の無理と感じている。

10 月 2 日 (木)

衰弱は自覚するが

早朝から庭松の小枝剪定に時間をかけ思いはかなったものの手に傷が生じ大変疲れた。食後点滴に行き、一時間は仮眠できると期待したのに左足の筋違いで、逆に一時間激痛に悩されつづけた。なぜこのような苦痛が生ずるかどうすればいいのかわからない。以前から

このような筋違い激痛は時にはあったので、又かと思う程度で医師の診断をと思いながら、面倒との意識もあって放任して来た。書き加えたいのは皮膚の異状である。自覚しはじめで二年は経過しただろう。湿疹のようなのがあちこちに、出たり止んだり、足のまわりから始って今は背中、脇腹にも移動している。以前は痒みがなかったのに、今は脇腹など、とても痒い。医師の対応を求める必要があるかも知れないが、今は医薬に何か求める気持が湧かない。ひたすら辛抱辛抱と思うようになっている。足腰の弱化、体力の衰えを強く感ずる状況だが、医師に頼るより、自然のなりゆきに従おうとの気持である。

10月3日（金）

長春中日友好会館の建設が進んでいる

昨日はイムズビル 13F で長春からの7人の訪日団を迎えての夕食会があった。長春中日友好会館内部設計装飾考察といい、団長は王樹彬氏、吉林の人、43歳という若さ。他の団員も皆若い。一九七一年生れが2人もいる。26歳なのだ。今長春に建設中の友好会館は10月に建ち上がり、来年七月にオープンするらしい。この会館内装には日本側の文化も取入れるので、東京・福岡を訪問してヒントを得たいということのようだ。私は一九四四年に陸軍（関東軍）經理学校にいたことを彼等に伝えた。学校は緑園にあったが、旧名新京の街並みには殆んど記憶がない。旅行社治田氏、衆院古賀一成氏の推薦でこの会館建設の支援団体の一員になっているわけで、来年夏の竣工式に、可能なら出席したいと思っている。できれば旅行団を組織して訪問したい。長春は三〇〇万近い人口を抱え、今も「東北」の中心らしい。50年をこすゆかりの地を思い出すのによいと思う。

10月4日（土）

生命を考える節度

熟柿も価値あると思って、落ちるのを待たずに取って食べているこの頃。一日に三〜四個食べることもある。味もよい。種もきちんと着いている。小鳥がついばんだのだろう、そこが黒く腐って熟柿になるのが早く、気付かぬうちに落ちて蟻その他小蠅の飼になっていく。植物の死とは何だろう。柿の実は台風などで早々と落ち土になる。熟柿は種なりとも残して死んでいく。月下美人が年に三〜四回咲く。夜の暗い時間に八時間ほど美しく花を咲かせるが、これ又やがて死んでいく。他に例は無数にある。松の小枝を剪定しながら、勝手に切ってよかろうかと、ちらり考えることがあった。人の命は何よりも大切という。でも世界で、あちこちで、人が人を殺す例が今日まだ稀ではない。鯨を取るな。イルカを殺すなときびしく注文する者がいて、生命愛強しと満足げであるが、ある面からみると、御都合主義のように思える。「節度」を主張した方がいいのではなかろうか。原爆には節度はきかないのだが。

10 月 5 日 (日)

九州少年相撲大会

九州国技振興会主催の第 12 回少年相撲大会が例年どおり大濠の武道館で行われた。秋の運動会と重なるケースもあるようで、予定を少し下廻ったが一四〇人ほど、九州各県の小学校五・六年生の子供達が参加してくれた。驚いたのは、相撲技能や体格が大人びていることである。これら諸君の中から将来大相撲の道に入る者がいても不思議ではない。特に太っているといえる者も少くなかった。もちろんわれわれが目標にしているのは、専門家の卵を養成するのではなく、礼、信、義、恕などの心を養うことを、技に付加する点にある。果敢に闘うと同時に、相手、近い人々、社会、自然をよく理解できる人間をつくることにある。ところでこの大会は昨年まで「わんぱく相撲大会」と名乗ってきたのだが、東京の方に「わんぱく」は自分達の専称するものだから、同じ名を名乗ってくれるなど文句をつける団体があって、いさかいは起すまいということで今年から「わんぱく」を「少年」に、呼称をかえたのである。

10 月 6 日 (月)

北京での文化展示交流は予定どおり決行

北京ゆきのことで五時に「はせがわ」事務所で阿部、溝部の二人に合って北京ゆきの問題点を話し合った結果、決行するしかないとの結論が出た。はせがわ社長は決行でいいとの態度を明らかにした上で今日はベトナムに行っているとのこと。混迷を引き起した波が三度あり、二ヶ月も企画がこんとんとしていたが、原因は呉汝俊にも大いにあることがほぼ明らかになった。少し具体的にいえば彼が会費を懐に入れ、それを中国側、日本旅行者側に分与しているようだ。分与にあずかれなかった一部の人が、それぞれの立場から、それぞれの日時方法によってわれわれのこの企画に不信を投げつけ、参加予定者に否定的な方向で喧伝してまわり、それが三波に及んだようで、私自身大変迷惑がかかったが、今日は決行するしかないということになった。もう妨害行動言説に目を向けないと同時に、二ヶ月もおくれた企画準備は早急に挽回しなくてはならない。書展の分野の立ち後れをどう取返すかが、私自身の今後の課題である。

10 月 7 日 (火)

北京ゆき旅行代理店がようやく決った

北京ゆきの計画で西日本日中旅行社、治田氏に代理店を頼むこととなり、六時から「はせがわ」事務で溝部、阿部、私の三人が正式に受諾を得たわけで、約二ヵ月後れていよいよ再々出発の運びとなった。何よりも後れを取り戻しつつ関係者の奮起を促すしかないが、心配なのは書展部門の停迷である。誰が、どんなのを何点ぐらい出してくれるか、どう集め、どう発送し、表装し、展示していくのか未だに雲をつかむようである。吉岡氏に頼り

たいが、停迷の中では話が前向きには出せなかった。彼は不信でも否定的でもないと思っているので連絡をしたところ、明後日拙宅に来訪してくれるようだ。安部夫妻は積極的に応答してくれているが、規模は大きくない。ともあれ今日は旅行代理店も決めたことだし、今後フルスピードで企画を進めていかなければならない。今日の点検では一〇〇人程度の参加は見込めるのではないかということであった。消極化した人がかなりあるので当初の二〇〇人には程遠い。決行が何よりも。

10月8日（水）

教育勅語を精読すればするほど

十月十日のなつメロに「赤とんぼ」のうたが予定されていて、私に何か言えと名ざされる予想なので、ひるすぎに六本松九大図書館に行き三木露風について一寸検索した。一寸言える材料はでてきた。次のなつメロでは教育勅語につき私が若干スピーチするように積りしてあるらしいので、何日か前に一日がかりで内容に関し、とくに文言について勉強していたが、まだ不十分と思って追加点検をしているのだが、勉強すればするほど、立派な内容であるし、確たる文言が使っていることに打たれるようになってきた。このような文言が使える漢学者は誰だったのだろうか。知らないことを今後悔し、近日中にわかるよう努力すべきだと思う。私どもは音だけでそう思い込んでいるが意味が違うのには字も違う。此、是、斯の区別、其、厥の区別など一例である。今の若者は機械で文章をかくからこうした区別にはますます無縁になっていくだろう。どう対応すべきか。

10月9日（木）

地球温暖化ストップ

エコリレーというのが十一月九日から十三日まで福岡県を通過する。この自転車リレーは十二月一日に京都で開かれる気候変動枠組条約締結国会議を盛り上げるための全国横縦断のキャンペーンである。「ストップ地球温暖化」がうたい文句である。五〇年後は、このままでは温暖化が二～三度上昇の予測なので、海水の水位上昇、陸地縮少^{マツ}、動物の生殖分布の変化その他現在の人類生棲に予想外のマイナス影響をもたらすことが考えられる。従来の生産様式、生活様式に根本的な反省が迫られている。石油・石炭などエネルギー、植物伐採、コンクリート化などその対象として考え易い、海岸、河川、山野など、その生物、土砂、生物^{マツ}など、もっと基本的に見つめねばならない。利益追求本位の生きざま、大きく、速く便利なほどよいとする価値観も反省する必要がある。人口集中、農山村の過疎化も再考すべきである。資本主義の行き過ぎが次々に俎上^{マツ}にあげられることだろう。

10 月 10 日 (金)

秋の花実あれこれ

玄関の木槿(もくげ)がぐんぐん伸び精一ぱい咲いたので十日程前に思い切って低く剪定した。その隣の木犀は金の小花をちりばめ、香高く毎日を楽しませてくれたが、これも一週間ほどの期限があって今は最終裏庭の鉢物としては秋海棠、鶏頭が、そして地植えものとしてはサルビアが長く長く咲いている。今改めて目をひくようになったのはホトトギス、と紫式部。この二つは紅梅の枝の下で力強く咲きはじめた。マンジュシャゲは文字どおり立秋の約束のように、コスモスは秋の女王のように咲きみだれてはいるが、これらはわが家にはないけれど外出するときはよく目につく。又ススキ、萩も目にはつくが、日常的にかなり縁遠い存在になってしまっている。裏の垣根近くで伸びているピラカンサも実が真赤ぎっしり詰って目立ってきた。鋭いトゲをもっているので二日前注意厳重に小枝を切って花瓶に挿しまじかに見えるようにしたのだが、花瓶はかなり大きく、水一ぱいにすると、テーブルの上で動かし難い置物になった。

10 月 11 日 (土)

温室効果ガス削減に積極性を出すべき

地球温暖化に歯止めをすべく、十二月はじめ、京都で気候変動枠組み条約第三回締結国会議が開かれるが、環境問題を優先させるか、それとも経済発展を重視するか、大勢は二つに分れていて、アメリカは後者が強い発言力をもっている。温室効果ガスを二〇一〇年までに一九九〇年レベルで安定化するというのが基軸だが、アメリカでは二〇%もふえる勢いなのに、日本は二%ぐらいの削減姿勢、アメリカの姿勢はもっと消極的。CO₂削減に積極的になると、経済成長が鈍化するので、経済界には消極派が優勢なのである。このままだと、アメリカは国際合意を骨抜きにすることとなり、一五%を期待している欧州連合(EU)に歩調が合わず、日米による「EUつぶし」が一層強まるだろうといわれる。何でも日本はアメリカに追従し、アジアは勿論 EU 諸国からも嫌われるという公式がここにも当てはまるのにはうんざりする。日本が資本主義の成りゆきに煩悶する現状が手にとるように見えてくる。EU 諸国のように、資本主義の汚れの部分を思い切って拭い去る国にしたいものだ。安保拡大の汚なさを先に、改めよう。

10 月 12 日 (日)

21 世紀の「宗教改革」

池袋駅にほど近くシャロンゴスペルチャーチが建設され、その献堂落成式に出席のため、二日間を費した上京となった。希望学園の飯田時生氏が、この教会の主幹牧師本多定雄氏に私を引き合わせてくれたのが縁で約一ヶ月前のこと。礼拝堂、讃美歌、説教、パイプオルガンなどに接するのは久しぶりで、かえって新鮮味を感じさせられた。ブライダル教会

でプロテスタントの流れだが、宗派は特に問題にしないようだった。今日夜の祈禱のときの秋山牧師の話では21世紀に向けて各宗派は統合の空気をもっているとのことで、五〇〇年も経つとキリスト教も変わるはずとのことであった。これは明晰な展望ある読みだと感じた。資本主義は変わりつつある。キリスト教信者も、しのぎを削るよりは共通点を見出して一つに戻る空気をかもし出しているらしい。この秋山師の発言は私の気をひいた。カトリック教会の墮落、とプロテスタントの新興又は宗教改革 M・ルター（一四八三～一五四六年）のことを思い浮ばせる。

10月13日（月）

雑踏に巻きこまれる

一人旅の心細さを感じさせられた。東京の乗物はとくに複雑である。このたび飯田氏と二人で池袋西口のメトロポリタンホテルにたどりついたが帰福は一人。シャロンゴスペルチャーチから浜松町のモノレール乗車口まで教会関係者が随行してくれたが、その終点、JAL福岡ゆきの改札口を出るまでどうなるものかと心配した。うろうろして乗りおくれるようなことがあっては大変で、そのための時間的ゆとりについても気がかりになる。今日は幸い万事順調に進んだが、その間十分気を使ったのも確かである。列車、空港利用の客の多いのにも驚かされる。人間みな日常生活のなかにあわただしい動きが組み込まれているわけだ。私からいわせると、なぜそんなにして動きまわらねばならないのか、それが何の意味をもつのか疑いたくなる。ゆっくり地道な行動はできないのか。たまに動く人が寄り集まるからこんなに雑踏になるのかわからないが、ともかく人皆がさがさしている。欲の深さなのではなかろうか。だとすれば寡欲が尊い。

10月14日（火）

タクシー運転手との車中の話し合い

タクシーで帰宅するケースが少ない。出発のときはなるべく西鉄バスを利用し、節儉と運動に役立てたいと思うが、帰宅の時は疲れもあり、坂道を考えるとタクシーを選ぶことになる。タクシーの運転手で、既に前の知事だと知っている人が少ない。先方からそのことで話しかけてくる場合がしばしばである。私の方から出す話題は当面の不況のこと、知事時代に公務のため「私」が犠牲となって不自由だった具体例が多い。どの運転手も観念的に、知事は寸暇なく多忙だとは認識していても、具体例をあげて話すとびっくりするようだ。便所にゆく不自由さ、東京出張の時三人の子の家族訪問もままならず、東京見物など横道にそれることはできず、会議が大分であろうと広島であろうと東京であろうと、最短コースを決まった時間割どおりに往復するにすぎないなどと説明すると、運転手も具体的に知事の不自由さを知ってくれる。自由時間が許されないという「特別職」であるということも知ってくれる。

10 月 15 日 (水)

戦後の県下労働運動の一端をまとめた本が出版された

半世紀前アメリカが占領軍を通じて興隆させた労働運動には数々の、有形無形の、官民の、意識の・・・仕切り直しがあったのである。中でも非合法的な世界から合法へ、陰から陽当りの場へ出てきた労働界への対応は大変だった。物が無い時代、戦災焼け跡、そして米と石炭が^(不明)動な生存発展の基本とならざるをえない時代。労働運動、石炭生産者への眼は誰にとっても熱かった。福岡県及び県労働界はそのような背景をもって事の中心ルツボ状態におかれた。県行政のエネルギーは労働分野に集中された。労働法が整備される中で専攻の菊池勇夫教授は注目の的。粉骨砕身の場におかれた労働界は結集するすべを知らず大騒ぎをするが纏め方を知らなかった時期がつづいた。でも労使の紛争調停は不可避だった。労働界では労働会館が必要であり、労働金庫設立の声も高まってきた。そうした中で中倉正城氏の立場は重かった。今日、彼の娘さんが亡後彼の行蹟の一端をまとめて活字にした一冊をアクロスの私に届けに来た。

10 月 16 日 (木)

自己を見極め自然に近づく

新聞をみていて常に気になるのが、訃報の欄、この人何歳だと目が走る。川崎市長がなくなった。私と同じ一九二〇年生まれ。いずれ順番が来そう。もっと若い人も新聞に出るケース、逆にかなり長寿だと感ずる人もある。会話の中でこのような事を口にする、その人の心境や年輩がわかるという人がある。関心のないのが当たり前なのである。関心がわくのは順番が来ている証拠である。私は今既に同窓会に関心は薄い、同窓会への関心は順番より一歩早い老化現象の一つではないだろうか。同窓会というのは卒業後の相互の情報交換の場を卒業して脊くらべみたいになってくるので面白味がなくなり、もういいということになってしまう。若々しくありたいが、これ又老化してくるのである。若い時は植木鉢に興味はなかったのに、老化が進むにつれて興味がわき、植物に愛着ができるのはそれなりの自然の成りゆきであろう。老化すると家族や同窓生に惹かれない状況が生ずる。自然は実に無限である。

10 月 17 日 (金)

北京書展ようやく動きはじめたか？

安部夫妻が北京で展示を予定している書作展のための出品を十数点アクロスまで持って来てくれ、ついでに「はせがわ」事務所に溝部氏を訪ね、それを手渡した。彼はよろこんでくれた。私と同じ気持のようであった。安部夫妻もだが、こんな調子で展示会が実現するか否か、大いに疑わしい、というのが誰しも抱えている実感である。溝部氏も心配でたまらんとっている。私からいえば自分でやろうとする人が誰もいない。安部夫妻も同じ心配

をもちつつ私が昨日電話で作品が集っているならアクロスにもって来てくれ、といったので、今日実現し、「はせがわ」に一緒に行ったら溝部氏が喜んだわけ。溝部氏は彼なりに心配していて打つ手がわからないようだった。溝部氏がそうだから、もっと距離のある人はもっと疑念を抱いている。時間は待ってくれない。あと四〇日ない。フル回転しなければならぬのに、回転の仕方が読めない。各人はそれなりの仕事にはまり込み我関不関というような態度にみえる。私自身助けてくれる人なく淋しい限りだ。

10月18日（土）

果物に囲まれて

まさに果物の秋で、わが家の食卓のまわりにはあれこれ果物が顔を並べる。まずわが家の熟柿。大牟田の三池労組からと浦川守さんからとつづいて大粒の荒尾梨の送付があった。直美夫妻が山梨蒲萄を送って来た。私の誕生祝の意をこめてだそう。そのずっと前に岡垣の小役丸さんから手づくりの蒲萄を贈って来てくれていた。今日届いたのは網干の和代から。これは何回も何回も里ものを送って来てくれる一例ともいえるが、大根、里芋、さつま芋などに添えて押ずし、枝豆に加えて栗が添えてあった。栗は奥の山里の産であろう。わが家には小さいながらミカンが一〇個ほど、もう色付きは始めている。甘夏柑は春を待って食べるが、今はどんどん大粒になっていっている。ともかく当座は秋の果物に囲まれている。味のよしあしは別として、こうして手に入れた果物は店で買ってきたものとは趣きが違う。秋の果物に囲まれた子供の頃がなつかしくあれこれ浮んでくる。

10月19日（日）

幻と消えていく世界

天神に三越がオープンして変わってしまった。川端も変わりつつある。ももち、香椎、大野城も・・・往時の姿が甦らぬ変貌である。都市化が進むだけではなく、博多駅近辺の地下街などどこをどう行けば地上の目的施設に行けるのかわからない。一面、その辺に馴れないからで、毎度行っている人にとっては、どういうことでもない、馴れるほどに行動していないということでもある。先日大野城で私が変わってしまったねという土地の人からどう変わったんですかと返言された。私には答えるすべがない。変わってしまったという印象だけで、以前何がどこにどうあったのか記憶をたぐることもできない。人間誰もそうなんではなかろうか。社会の日新月异（進）と記憶力の関係がそうになっているようだ。以前の博多駅を思い出せといっても無理。駅裏の農地などあの世に消えている。今の人は今の環境に生きている、只それだけ。旧県庁とアクロス福岡も。

10 月 20 日 (月)

新ガイドライン危機

新ガイドライン、有事法制への動きに対する反対運動がぼちぼち出かかって来た。空港、港湾が使えなくなる心配、医療や港湾荷役労働者が、軍用に動員される心配、軍事演習で日常生活への不安が募る地区住民、戦事に予想される敵側からの核攻撃目標予測の住民の恐怖があれこれ予測される。その上、海上封鎖で海外依存の食料、石油石炭の輸入ストップ、高速道路の使用制限など——心配ごとを挙げるときりがない。一九九二年ソ連崩壊後、冷戦体制崩壊後、アメリカはとくに日米安保の強化を意識し、沖縄の基地機能の強化に力を入れ、更に日本全土の「沖縄化」に力を入れるようになり、新ガイドラインを押しつけて来た。橋本内閣は易々諾々とこれに従い、有事法制による人権制限の準備を進めている現状である。平和に馴れた国民団結を放棄した労働者、我を知らぬ野党各党は、この運動を定めきらないでいる。国民運動が指針を示しはじめたとしか言えない。

10 月 21 日 (火)

秋の味わい

街並みに囲まれて仕事ばかりに熱中するので秋の味がほとんどわからない。稲穂が垂れるとか、鎌切り虫をつらつら見るとか、柿の実の枝を折るとか、ゆで栗を苦労しつつも味わうとか、ススキの穂を撫でてみるとか、こうしたチャンスを掴むことができない。それでいいのだろうか。そういう秋の味を知らない人にとっては、チャンスがないことが残念ということはない。どうでもいい。今日アクロス福岡での雑談の中で、新聞広告に外国旅行への誘いが多いという話題が出た。私は外国に行くのもいいが、国内各地で季節季節の味わいをするのもいいのではないかというのと、見たことのない外国に行くのがいいと思う人が多いのではないかとの反論が出た。この頃の若い人達はカネの使い途は外国旅行を優先させるようだ。多く知りたいというのと、深く味わいたいというのと違いがあると思うが、点数主義が勝つ時代がつづいているように思う。先日裏庭でカマキリを見た。

10 月 22 日 (水)

軍の論理が動き出す

労働党からの二人来客。十一月二十二日に福岡の教育会館で那覇市長親泊氏の記念講演と懇親会をするので出席をという依頼であった。今新ガイドライン合意後一ヶ月、ようやく全国のあちこちで方向反対の動きがみられるようになった。アメリカが突入する戦争のお先棒をかつぐとか、後押しするとか、巻き込まれるとかの危険に突入したといえる。沖縄の部分基地から全面基地への変化、本土の沖縄化への変化が危惧されている。私はもう盧溝橋事件の段階にはいった感じだと言ったのだが彼等はびっくりしていた。軍の論理というものがあって放置するとそれは止まらない。そこまで事は成長してきた。あとは実力で

止めるしかないだろう。感情や理論では進退をきめられないまでに至っている。「僕はもうこの世にいないかも知れないがね」と前置きして、軍の論理は独り歩きし、自己爆発、自己消滅に至るしかないだろう。21世紀はこうして新しい時代に移っていく。

10月23日（木）

教育勅語を考える

明治23年10月30日の教育勅語について、なつメロの時に私が若干註をすることになっているので、元文の起案者などについて知っておくべきだと思い、今日は市議会図書館でしらべることができた。侍講元田永孚である。元田はそれ以前に「教学大旨」さらには「幼学綱要」「聖諭記」を書いている。井上毅、伊藤博文らが反対したが、戦時色が戦事高ったので元田の説が有位となり、軍人勅諭の形で山県内閣の時に発布されることになった。井上毅も起稿者になっているらしい。儒教的王道論に貫かれていて第二次大戦の終るまで、軍国主義、国家主義を支える基底としての役割を果たしたので、一九四八年六月一九日国会でその排除、失効が決定された。その前年教育基本法が制定されていて戦後教育のあり方はこれによって規制されることになる。辞典には、儒教思想、軍国主義への批判が強調されている。教育の合理主義、自由主義、民主主義は基本法によるべきだという立場からである。

10月24日（金）

中国理解の重要性

一九七二年田中角栄総理のとき、アメリカにならって日中国交回復ができ、今は二十五周年。新ガイドラインでは台湾問題が依然ひっかかりをもっている。核実験も気がかりだが、日米安保が中国をはじめ、アジア諸国に対日不信をつきつけていることが、新ガイドラインでいよいよ明らかになってきている。中国に不安が残るということがガイドラインで新たに明らかになると、中国の対日不信が改めて増大する。昨年12月に日中友好会館ホールで行われた公開討論「日中関係打開の道」を要約したパンフを読むことになって、元中国大使の中江要介氏の問題提起の部分を見たのだが、氏が指摘しているように、このままでは日本は中国をはじめアジア諸国からはじき出されそうだ。なぜアメリカの言いなりにならねばならぬのか。自主性が発揮できないのか。理解に苦しむ。対アメリカ無条件降伏は五〇余年前のことで、そろそろ抜け出さねばならない時に来ている。このままでは21世紀の日本が見えない。

10月25日（土）

ラビ・バトラの史観

三年前に出た本だが、ラビ・バトラの「世界大恐慌」という本、これを今再読している。

その一二四ページにある次の文を借用する「我田引水で恐縮ですが、私自身が、東洋の思想を根幹に西洋で経済学を学び、現在アメリカの大学で教えているのは、経済学という西洋生まれで西洋育ちの学問です。しかし、経済学に基づいた私の経済予測を支えているのは、第一章に述べた『瞑想』というきわめてインド的であり東洋的な行為なのです。また、第四章で読んでいただくとよくわかるでしょうが、ポスト資本主義を目ざす『プラウト』の思想の背景には、東洋の思想哲学があります」。西洋育ちの科学、合理主義だけでは万事割切るわけにはいかないという点は近頃私があちこちでふれまわっているもので、右の引用部分はよく理解できる。科学的合理的なものが万能であると思いついてはいけません。宗教・文字・芸術・社交・国際友好など、豊かな心が弾力的に働かねばならない。歴史はかくして作られる。

10月26日(日)

「三池・たたかひの絆 51 年の集い」

14 人しか残っていないという三池労組、一応のしめくりとして「三池・たたかひの絆 51 年の集い」ということで、ガーデンホテルで五時から八時まで、関係者四二〇人の参集をえて回顧懇親の集いが開かれた。全国的規模で、北海道からは唯一残る炭鉱「太平洋」からも来た。組合・主婦会の OB たち、弁護士たち、岩崎・名田など県評役員 OB、それに社民系国会議員、講師団の仲間（衣笠、大坪、田中、荒牧、小島ら）。久しぶりに顔をあわせる人が少なかった。炭労 OB の原茂氏は立派な挨拶をした。小柳勇氏も来た。塚本、灰原はこなかった。太田薫、阿具根は病気のため欠席。現組合長芳川勝氏も多忙ながら立派な挨拶だった。新しい組合事務所は当面は OB、CO 患者の集会用及び資料保存所として利用される。今日の挨拶で原氏は世界史レベルで名を揚げた三池闘争だったと過ぎし運動をたたえていた。マスコミは悪しざまに報道するがそんなものではない。ともあれ一応の幕。

10月27日(月)

出品書作選別にまでこぎつけた

おくれを痛感するが、いよいよ今日北京での書展への出品作について論議を交わしながらの選別の段階までこぎつけることができた。場所は西区吉岡氏の書道教室の公民館。阿部牧坂夫妻が加わってくれ、まずは二〇四点というところまで来た。明日も仕事は残るが、二十九日に呉汝俊氏がこれらを北京に運んでくれる予定である。北京で裏打ちしてもらって展示する予定だから、もう時間のゆとりはなくなっている。だが一進一退の中でよくもここまできたと思う。今日の牧坂、吉岡、阿部の努力は有難い推進要因だったわけだ。天安門での展示が無事終了するまで、まだ山あり川ありであろうが、乗り越えるための協力を祈るしかない。今日みた出展品の中にひらがなが少なかったが、中国の人はどう受け取るか興味が残る。今日選別した作品の中に私のは半切もの四九枚だった。全体の四分の

一に近く漢字ばかりなのである。

10月28日（火）

残された能力を思う

北京で十一月下旬に行う予定の文化交流書展に出品する作品が今日午後の長谷川事務所でほぼ最終的に決まった。私のものは二四点にしぼり込まれた。七〇枚ほど準備していたので、まずはよかったと思う。よく考えてみると、六・七月頃に揮毫したものだが、刻一刻と力量が衰えているのがわかる。飯田さんが新年末日の劉文波氏の遺作を今日もって来て出品の中に加えることとしたのが五点ほどあるが、劉さんは最後までよく書く力を残されていたわけだ。能力を残すということが一つの目標になるのは実によいことなので、私も何か残すべきもの残しうるものを持ちたいと思う。それがないと廃品になってしまい捨てるしかなく、でないと粗大ゴミになってしまう。もっと前からその視角でわが生涯を築く努力をすべきだったのに、今やおそいと思う。でも残された時間、その気持で自分自身を支えていかねばならぬとは思ふ。自伝を書けという人があるが、これ又大変なことだ。近くにいる人に語りつづける機会があればいいのにと思う。

10月29日（水）

網干の妹の家改築

新築成った和代宅にまず泊った。五日間旅行の出発点。七月に竣工したということで若い世代の希望が生かされ、様式、用具などすべてが今様になっている。ドア、廊下、台所、風呂など時代の変化が取り入れられている。住む人の心も改ろう。でも先例をきいていたので理解できるが、土地を再利用するケースでは二度「引越」しなければならない。これが高齢者にとっては大変な負担になる。今日物余り時代といわれるだけにどこの家庭でも物があふれている。この際廃棄処分するのは当然なのに、未練があつて捨てられないものも少なくない。なぜ改築する気になるのかと思うけれど、古い世代が住んでいた住宅様式は新しい世代にとっては全く不満足なので、借入金に依存しつつも、可能な最少限の条件が充たされれば、改築を目ざす若い世代の意見が勝つ。どこともそうした諸条件で若い人が改築推進の主体者になる。電気配線など裕一君が新式に設計してくれたという。

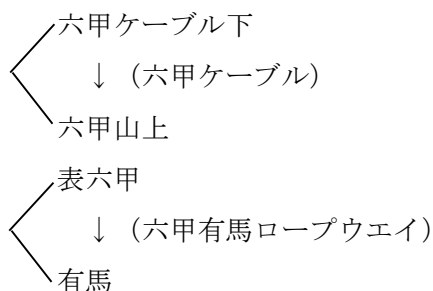
10月30日（木）

六甲の紅と水

私の喜寿祝いの気持を込めて和代夫妻がわれら夫妻を有馬温泉一泊の旅行を企画してくれ、二時すぎ四人で温泉に着いた。六甲のケーブルを使っての旅は私にとっては初経験なので有難い贈り物であった。海にせまった六甲山地は神戸には貴重な宝の環境といえるし、日本全国を念頭に浮べても総体的には同じことがいえると思う。山あり雨あり川ありでわれ

われは恵まれた自然の中に置かれているわけだ。外国旅行もそれなりの価値はあるが、私は、限りある時間とコストを考えると、今後とも国内の名所を訪ねる方途を優先させたい。六甲は紅葉には一寸早すぎただろうか。でもロープウェイ両脇に点在するピラカンサスの紅がかえって強調されてよかったとも思う。有馬湖月山荘（国立公園六甲山、六甲摩耶鉄道）ロビーで飲んだコーヒーのすばらしさには、水のよさをつくづく思い、腹にしみわたらせて大収穫だった。

【欄外記入】



【福岡市からの女性同行者に関するメモ挿入】

10 月 31 日 (金)

活潑な都市生活

十時に宿のチェック・アウトをすませバスで三宮へ。関西の一つの中心である神戸の空気に一寸ふれたが、兵庫県に生れ育ちながら神戸には疎の私。この夏京都に壮大な JR 新駅がオープンして京都は急に変ったといわれる。まだ行って見てない。神戸の一部をかいまみただけだが、にぎわいぶりは東京横浜には見劣りしないのではないかと思う。JR 列車の頻度でそれを感じる。人々が活潑に動いているわけだ。但し静かに思いをめぐらせると、これでいいのかと思いが変わってくる。なぜこの人達はめまぐるしく動いているのか、目的は、結果は、と問いたくなる。ゆったりできないか、ぼんやりできないか、時間を余せないのか。多忙、繁栄、裕福というのが誇りになるのか、それで満足できるのか。私には人間の一面だけが強調されすぎて、実は大事な点が置き忘れられていると感じられる。都市、大都市の活潑さはそのような一部を代表するに過ぎないのではないかとすら思われる。

11 月要記

「進歩と改革」に新ガイドラインにふれた原稿を書くチャンスを得た。どこまで従属甘受する日本政府だろうか。駐留米軍は「飼い犬だ」という政治家の発言に失笑する人も少ないが日本自衛隊こそアメリカの飼い犬になっているというべきだろう。それが先ずは港湾労働者など一般国民にまで及んでくる心配があるし、内乱の挑発さえ心配される。まさに「支那事変」を通り越した軍事情勢にまで行っているようにすら思える。高齢化問題（介

護問題)、少子化問題、環境問題など長期視野の諸問題が今になって急浮上してきたが、これらは以前からわかっていたのに、はっきり対応できてないことが今になって誰にもわかってきた問題だといえよう。21世紀には・・・というのでは遅すぎるということだ。教育問題も教育界だけの責にできないことが明らかになりつつある。倒産、失業などなど不況現象は限りなく多発している。これも時を待てば何とかなるとの期待はもてない。どこまで沈滞するか、混乱がどういう形で爆発するか予測がつかない。でもハングリーのゆえに生ずる知と流す汗を知る者はまれである。満腹と平和ボケは間もなく消散するに違いない。明日に備えよ——これが十一月にまとめた我が身周辺に対する実感である。他人ごとのようにいっているみたいだが、自分の残された能力には限りがあるので今後とも全力をあげて対応したいと思っている。

11月1日（土）

旧知を訪う（二人）

関西旅行のなかで今日一日ポッカリ予定日程がなかったので、旧知訪問がよいと思い、出し抜けになるが刀出など行くことにした。勉さんがバン・カルを毎度送り届けてくれるので御礼をかねて面会を求めたら姫路文学館で行われている椎名麟三展にまず案内しようといってくれてそれに応じた。以前から椎名について語った資料を福岡に送付してくれていたが軽く扱ってきたことだが、今回の紹介で出身が曾左小東坂の人であり左翼運動に関わりがあって警察からつけねられる人物だったということがわかった。興味をもつ必要があると感じた次第である。もう一つ、思いがけずも打越の小林連秀氏とあや子さんを訪ねることになったが、八〇の坂をこえた彼女は畑仕事をしていて壮健のようだったし、連秀氏は、小林家系譜をこまかく調べていて上巻を一冊くれた。近々下巻も出版に至るといっていたが、事こまかな調査古文書読みに執念をもやしつづけているのには感心した。私の父繁之助の名も、又関連しての私の名も一行でてくる上巻をみせてもらった。以上二つ今日の収穫。

11月2日（日）

七二兄の法事に際し

兄七二の13回忌、嫁門口家出身の絹子さんの17回忌の法事が今日二時から息子裕一の自宅で行われた。来客はできるだけ少くということで、われわれ残る弟妹三人、裕一は弟と妹、門口の方は兄弟二人ということだった。仏壇の横に額入りで飾られている兄の写真は死の数年前のもののように思えた。私の初の知事選の時には我が事のように手伝ってくれた。「お布施事件」というつきものも起こしたがよくやってくれたと感謝している。それよりも私は幼少年時代この七二兄とはチンクソのような生活をしていて、私の生涯に濃厚な影を残している人である。「誰を尊敬するか」との質問に合えば、躊躇なく「七二兄を敬愛

する」と答えたい。よきにつけ悪しきにつけ私の人間形成に大きな影響を与えた点で彼に比する人はないといえる。一例としては同じフトンの中で彼の読む読本を覚えさせられ、小学校の時は先生に、よくできると褒められたことがある。二年上の兄ということ、一緒に貧乏の中で育ったということが要石だろうと思う。

11 月 3 日 (月)

脚力衰弱を痛感

多忙な一週間余だった。体力の限界というか、脚力の衰えを痛感する。他からみるとヨロヨロであろう。なぜだろうと思うし、衰えは一つの症状であって回復するだろうと思ったりである。永くつづく皮膚の痒みに全く対応してないのでそれが問題だろうと思ったりである。この年になり、この体調になると医者に見てもらおうと自体に消極的になる。なるようになると思ったりする。今日はあちこちの行事消化に当たったが宇美の公民館、ベイサイドプレースのキリンジャベンゴにしろ、階段の上下に足がままならぬと感ずる。昨日の JR、そして福岡地下鉄も階段通過に苦労がある。時に躓くが段差がだんだんにが手になってきている。できるだけ手摺を掴むことにしているが、気を張らして手摺利用をひかえることもある。ともあれ階段の一段一段が気になるわけだ。全く気にせぬ(若い)人達をみると脚力に大きな差があることを痛感せざるをえない。ジョギングしている人が羨しい。

11 月 4 日 (火)

中国ゆきをチクリ刺す

アクロスに行ったのは一週間ぶり。点滴もできたが、これも間があきすぎている。いわゆる連休のせいでもある。中食は森山氏が仕掛けたようで、旅行社の治田、不動産会社の渡辺氏と四人、地階のスシ屋で雑談のうちに済ませたのだが、話題が十一月下旬の北京ゆきの準備状況、経費又は会計上の疑念、呉汝俊のかかわり方などに及んだ。どうしてもこの行事への批判が未だ底の方にあると感ぜられるのであった。こんな空気が企画を進めてきた過去三ヶ月もつづいており、そのためもあってか、参加者が半数不足する現状である。つまりあちこちに冷水がかけられてきて希望者が翻意するケースがあちこちにあらわれている。ともかく決行せざるをえないので二〇〇人が一〇〇人足らずでも事は前に進めるしかない。残るは資金不足になった場合の穴埋めをどうするかだが、結果を待って決めるしかない。ともあれ、もうそろそろ足ひっぱりは止めて欲しいと思う。江沢民の訪米日程も終わったが、マスコミもチクリ刺しての報道だ。

11 月 5 日 (水)

柿、ミカン、リンゴの皮むきに消極的!

先日、姫路に行ったとき、みやげに和代がたくさん干柿をくれた。まだ軟らかく美味を一

段上げている。彼女のいうには、これだけ家族が多いのに干柿を食べるのは自分だけのこと。きいて私もびっくりした。今頃の若い人はこのような自家製品には目を遣らないようだ。大したことなくても商店で買う菓子の方がいいようだ。ついでだが、今の若い人はリンゴの皮むきには消極的だし、ミカンも皮をむいて食べなくてはいけないので手を出したがるなとも聞く。何と、どんな人間が育っているのであろうか。リンゴやミカンの皮むき自体が楽しく感じられねばならないのに、手を出したくないとか、皮むいたリンゴなら手が出るというのだから、どういう大人に成長していくのか案じられるし、そうした人間で構成され運営される社会が心配になってくる。言いすぎることになるかも知れないが、それがここ一〇〇年の西欧的価値感^(観)が作り上げたものなのかも知れない。そろそろこの価値観とはお別れしなくてはなるまい。

11月6日（木）

北京旅行説明会にたどりつく

北京ゆきの旅行団は一〇〇人ほどの見とおしで、今日アコムビルでの旅行説明会に出席した人は約40人。多くの方は平常の仕事が忙しいようだ。ひとだのみにして自分は稼ぎたいということであろう。先方の受皿は公的だから普通なら経験できない部分を含む旅行といえよう。あと二〇日、用意万端というところへもっていきたい。かなり寒かろうからそれに対する構えに落度がないようにしなくてはなるまい。女性の数が半分以上になりそうだ。全体としては皆さん海外旅行に慣れておられるようだ。敢えての参加という人もあるので、貴重な体験が一つでも加わるようにしたいものだ。中国はどんどん変わりつつあるといわれるから、北京もそれなりに変わって来ていると聞く。戦後五〇年を経ているのに中国語に通じない我が身が残念。今更どうしようもない。戦時中習いはじめた中国語なんだから身につくよう心がけて努力すべきだった。後悔ばかりである。

11月7日（金）

晩秋の庭の中で

今年は柿の豊年である。わが家も東隣も枝がたわわに揺れ、熟した実がぶら下っている。今日は思い切って籠を手許において取ったが、尚半分は残さざるを得ない状況。放置するとまずは小鳥がついばんで駄目にしてしまうから何となく惜しいのである。南天の実も小鳥に食べられていくので一枚切って部屋に挿した。ピラカンサスと共に紅色が部屋をやわらかにしてくれる。寒さも加わるので、アロエの鉢を軒下に運んだ。ビニールでも掛けようかと思ったが、大幅のものが必要で当面準備がないので、風通しだけでもやわらかにしたように思う。ホトトギスが咲いてしまったので、落花の部分を鋏で切り取り、やや散髪した感じだ。今年は何だか秋が短く早目に冬が来たように感じられる。ただ柿が豊作でどんどん食べられる環境に恵まれ有難い。甘夏柑もそろそろ黄色味を増してきた。五〇箇近

くなっているようだ。来春の楽しみである。

11月8日(土)

天草コレジヨ印刷機

熊本天草郡河浦町の天草コレジヨ館でみたグーテンベルクの印刷機(模型)を見せられて全くのびっくりであった。これは天正年間に(一五八二～一五九〇年)に日本人としてはじめてヨーロッパに旅した四人の使節が持ち帰ったものという逸品だ。解説によるとグーテンベルクはブドウ酒のしぼり機をヒントに発明した——一四四七年——一五〇余年後日本に伝えられた。コレジヨで二九種のキリシタン本を印刷したという。ヨーロッパでは三〇〇～五〇〇部の印刷だったのに、河浦では一五〇〇あるいは三〇〇〇部を印刷したのではないかという。二〇年という短い使用期間しかなく、宣教師とともにマカオに追放されたといわれる。その後四〇〇年河浦町でコレジヨ四〇〇年祭を記念して天草コレジヨ館の建設を機に、マインツのグーテンベルク印刷博物館で復元製作された物を今私どもが見たのである。田川の県立大での講義のとき、羅針盤と印刷機が近代世界を作るバネになっていると言ったのを思い出す。ルッターに始まる宗教改革は印刷機に負うとってよい。

11月9日(日)

キリスト教排

昨夜の松本教夫氏の講話は天草キリシタン史概要というべきものであった。念のため大筋だけでも残しておこう。

- 1、天文一八年(一五四八)ザビエル鹿児島へ 布教のはじまり
- 2、永禄八年(一五六六)志岐氏トルレスに布教派遣
- 3、〃 一二年(一五六九)アルメイダ天草氏のもとで布教
- 4、寛永一八年(一六四一)鈴木支配

寛永一四年 天草・島原の乱の結果

検索制——踏絵、遠見番所、五人組、神社仏閣再建

- 5、文化二年(一八〇五)天草くずれ

五〇〇〇人余のかくれキリシタン発覚事件

- 6、明治六年(一八七五)信教の自由 大浦天主堂
- 7、明治四〇年(一九〇七)五足の靴 ガニエル神父を訪ねて

明治元年の太政官布告では邪教として扱われたキリスト教だが、開国の流れはそれを許さなかったのであろう。鎖国を勉強しなおす必要がある。

11月10日（月）

地球温暖化エコ・リレーをやってみる

ストップ地球温暖化列国縦横エコリレーが、十一月一日から多数の関心を引くべく全国六つのコースに分れてスタートし一ヵ月かかりで京都での気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3）へのアピールを試みている。九州では熊本、沖縄を出発した二つのリレー隊となっているが、一隊が久留米を経て福岡市に入った。市役所前と県庁前でリレーの儀式をして北上する。四人の選手のほかに40人ばかりの随行自転車が組まれた。労働組合の連合、生協連及び一般有志の参加である。大量生産、大量消費が自類の自然環境を破壊していることが急に自覚されてのことであるが、主として生産者側がCO₂などの汚染自粛の叫びには冷淡のようだ。大企業、アメリカ、日本に消極的姿勢が目立つ。一般消費者の生活スタイル反省、行政の責となる廃棄物処理方法施設も問題視される。あと三〇年も放置されると大変なことになるといわれる。「アメリカ的価値観の反省」といわれる多方面に亘る自己批判が要望される。自転車エコリレーで。

11月11日（火）

不況→社会保障の崩壊の時代に入る

不況がつづく、心配が表面化している。小売店で閉鎖される例が多い。対応策が見つからない。零細企業が少なくなるのは当然という考え方で地域社会を見ていいだろうか。新幹線を博多から延伸することにつき熊本の人は必ずしも賛成でないという。ストロー効果を案じている。10月から天神に三越がオープン—買物客が行列を作ったが、近くの商店は必しもいい思いでこれを見ていない。消費税のこともあるが、失業状況にみられるように、不況そのことに問題があろう。他方医療費負担が九月から引上げられ、患者の足はすくみ、かなり大きな病院でも収入は八〇%ぐらいに下降した、老人医療費は二・八倍にもなったという記事がある。介護保険の導入は目前にせまりさらに負担がきびしくなる。どちらを向いても明るい話は殆んどない。右肩上りの成長を当然と考えていた人々にもものを見る目の修正が強要される時が来たのである。年金に依存できない二十一世紀、掛け捨て年金、高齢者自活の時代必至という。（社会保障論の見直し）

11月12日（水）

大危機が近まった予感

気がかりで、たまっていた新聞切り抜きをして感じたことだが、日本政府があまりにも軍事・安保（新ガイドライン）の面でアメリカに屈従されっぱなしになっているということだ。その面で国会が全く取り上げないのも不思議きわまるわけである。アメリカッポンという造語もできているようだが、既に日本はアメリカと一体化していると同時に国民はアメリカのために巨額の税金を払わせられていることにもなる。驚いたのは三千億円近くの

自衛隊用武器購入の契約があるので前払いしているのに品物が届かないままという記事である。共同訓練などで巨額の防衛費の支出をしている上に、武器購入の前払をしてその武器が届いてない。当局は黙って問題にしない。これでは国民をバカにしているというしかない。アメリカは勝手に軍事を推進するが費用は日本国民の同意なしに日本に支払わせる。この屈従が将来どういう形で巨額な負担を強いることになるのか先が見えていたように思える。急速な現国家体制の崩壊の時を迎えそうだ。

11 月 13 日 (木)

進まぬ原稿書き

在宅の一日だったのに、頼まれた随想原稿がはかどらない。予定の内容について身辺を見わたすと、既に活字になったケースがたくさん見つかる。自分の思っていることと重なるのが少ない。むしろ古いかなど思ったり、もう書かなくてもいいのではないかと思ったりである。が、待てよ、やっぱり自分の原稿にしておかなくてはと思ったり、迷いがあり、身近なものから資料読みのつもりで読んでいってポイントを掴み直そうと思ったりして時間が過ぎ、かえって焦り気味になってしまうのが実際であった。問題は九月の安保新ガイドラインだが、既に日本はアメリカの世界覇権策に易々諾々となり、費用も進んで抛出するという姿勢になっているのだが、国会でこの点を論議することがないのはなぜなのか。この点私が一番不思議に思う点である。新ガイドラインは既に沖縄同様本土も米軍々事態勢に組み込んでいっている。いつでも戦争に突入できる準備というのに……

11 月 14 日 (金)

中村正夫氏の寺での通夜

七時から中村正夫氏の通夜が福岡の大善寺で行われ出席した。三歳若い中村氏。脑梗塞で一週間の入院だった。同じ死ぬなら長期入院でなくてよかった。何だか私にも早く逝けといわれているように思えた。寺での通夜は今後ふえるかも知れない。雰囲気が一味違う。読経の声、叩く鐘の音、仏壇遺映、参拝者の姿、線香の煙、ローソクの火、灯明などすべて俗から隔離されたものである。当事者達が作った雰囲気であり、われわれがその中へ一人の死を契機に申合わせて入っていったのである。こうした雰囲気は長い時間をかけてできたものであろう。同時誰も勝手に拒否できないし創造できもしない。終ってみて否定的に考える参会者はいなかったのではないか。私自身日常の俗な時間にまぎれている中で、短い、このような「聖なる」時間をもつことは精神的洗濯を得たような気がした。死者に思いを寄せる時間であり雰囲気であり自己見直しの時間だったと思う。

11月15日（土）

新しい求心力を求める空気が足りない

大坪の後任に鳴海が中常議長になった。六時から浄水通りの西鉄共済会館で大坪のごくろうさん会、全国レベルで六～七〇人集まり旧知の感覚で懇親の時間になった。夕食も加え八時半に散会、いったんこの会もこれで一区切りをつけたように見える。中央、国会も各党も何を考えているのか全く不透明でわが仲間にも守旧論者もいる。マルクス、レーニンを読み直そうという人もいる。21世紀を目前にアメリカ覇権の今の資本主義も終りに来ているとみる人は少い。東ドイツやソ連の崩壊を単に欠点があって負けたのだからその欠点を拾い上げ正していけばいいという考えの人も少くない。守旧派のいうのはその部属といってよい。私はもっと違った新しい思想体系をアメリカ覇権崩壊後の世界を指導する理念として別途打ち出さねばならぬのが急務だということを感じている。現実の社会には既にいろいろ試策の例がありその努力を集約したいと思っている。

11月16日（日）

旧協会の現状と将来を憂う

昨夜元社会主義協会（今は何と呼び、今後どう呼ぶようになるのかわからない）の中央常任委員会議長をしていた大坪氏が体調のこと、年齢のこともあって議長の席を去り、後任が北海道の鳴海哈二郎氏に代わり、大坪が顧問という名で呼ばれるポストに就いたので、大坪氏の激励感謝の会が開かれたのだが、全国規模で集った参加者のもつ雰囲気からは、今及び将来われわれはどういう理念・思想体系をもち、どういう組織を作り戦略的及び戦術的にどう運動するのかということに自信と意欲をもって対応していくという雰囲気が全く感じられなかった。使命感が感じられなかった。向坂協会とか太田協会といわれた時代をふりかえると、正しかったかどうかは別としても使命感も戦略もあった。なのに現在のメンバーにはそれがなくても不満がないようにみえた。仲よし会でもなく、単に旧知旧同志の集りで満足しているかに見えた。どうしよう私も迷う。

11月17日（月）

福岡ユニオンの活動

今日の仕事は一つは原稿の仕上げと、もう一つ依頼された原稿の下書きであった。後者は二〇〇〇字、久しぶりの原稿に没頭することになった一日である。外は小雨模様で木の葉が揺れ、十分に紅葉せぬまま落葉が吹き落される寒い日であったので、外出の要なく、原稿に熱中できたのは好条件だったといえる。草稿を書いたのは連合福岡「ゆにおん」からの依頼にかかわるものである。組合の組織率がどんどん低下し無関心者が多くなる今日ユニオンはよく頑張っている。一般の労働者を第一種弱者とすれば、ユニオンがかかわる労働者は第二種弱者である。臨時雇用、アルバイト、未組織労働者或いは零細企業労働

者がこの部類に入る。ユニオンは加入か否かを問わず、かけ込み寺的にも、この第二種弱者のために汗を流している組織で、日常活動は苦汁に満ちている。今日の経済状況下ではますます重要な役割を果たしているといえよう。

11 月 18 日 (火)

県関係者で喜寿祝をしてもらって

県関係の人達で秘書室職員ら六〇人ぐらい、六時半からサンヒルズで私の喜寿祝賀会をしてくれた。近藤、池田、林、松尾、家永、登島ら OB もたくさんきていて相互の懇親効果もあったようだ。女性も十人は来ていただろう高山、藤本らである。喜寿というと、わが身としては老化したなどの感じがぐっと迫る。即ち余りないぞといわれているようで、「いい加減に」と促されているようだ。謝辞の時に似た事を言ったらあとで、あんな言い方は淋しいですよと印象を語る人が二〜三あった。私は又物忘れがひどいこと俗社会に馴れるのに時間がかかったともいった。バスの乗り方にとまどったり、テレフォンカードを抜き忘れたことにもふれたが、きいている人は淋しい感じがしたようだ。いうまでもなく引退期にきているのだから毎日の生き方は自分で決めるしかない。奥さんとのんびり旅行でもしたらという人もあったが、もう既におそいと思う。ジョギング散歩をすすめる人もあるが、もう晩いといえそうだ。

11 月 19 日 (水)

黒い羽根運動の思い出

午後アクロス福岡で「黒い羽根」運動について二件の面接を消化したが、「大いなる人間模様」を中心に若干の資料を用意したにとどまる。三十八年前の話なのである。いろいろ私宅に資料がある事はわかるが、書齋をゴった返さなければならず、今の私には時間もエネルギーもないので、今日は凡そのことを口頭で話すにとどまった。FBS 記者の場合、あと四年で石炭六法が期限切れとなるが、この六法の実現に力を借した黒い羽根運動の位置づけを試みているようだ。「おんぶにだっこ」の産炭地風土を作り出したのがこの六法。その礎石の一つに黒い羽根運動があると、非難めいた視線をあてようとしているように感じさせられた。私は知事になって間もない頃、筑豊の精神的風土という言葉を作って講演し、その後何回か青年会議所系若者が知事室に抗議に来ることになったのを思い出している。六法が不当か否かの議論をすると限りなく議論が出るだろうが、社会保障の再検討に役立つだろう。

11 月 20 日 (木)

渋柿の皮むき

先日の大坪氏を励ます会の時に頼んでいたら結局、浮羽の淵上貞雄参議が引きうけてくれ

て渋柿を三梱送って来てくれた。九時すぎ帰宅したのだが、今日中にということで、私も皮むきを手伝った。十一時には凡そ作業は終わったが、今年も念願の干柿を吊すことができた。例年より十日ほど早く、今年は今既におそいということだったが、漸く入手しえたわけだ。甘柿もたくさん実って近頃は毎日のように柿を食べている。若い者は皮むきが面倒ということで、柿など目もくれないが、私どもは皮むきこそ楽しいのである。大学にいたその昔「甘柿と渋柿」の違いについて書けと試験問題に出したのが思い出される。渋柿の効用は少くない。柿の皮をむいていると、いろいろなことを考える。手は別の働きをしているのに、頭は人生に関することについて何か考えめぐらせている。おもしろい時間だとも思う。三人の子に柿を送る。明日これが残された仕事。

11月21日（金）

ゴルフ・カラオケ・ダンスは別世界の私

師村氏らが北九カントリークラブでのゴルフのあと忘年会を兼ねて私の喜寿祝もしてくれるので、夕刻までに会場飯塚会館に行った。参加は八人ほど。往きも帰りも送ってもらった。小雨でゴルフがおそく終わったようだ。ゴルフの会も年輩者折々の楽しみの会として作用している。今日は私の喜寿祝も兼ねてということで皆さんから祝意を送っていただき、バーでの二次会にも誘っていただいた。師村氏は墨筆を贈ってくれた。県議の高橋氏が地元と称してサービスをしてくれたらしい。バーに行くなんて私にとっては滅多にないことだった。カラオケやらダンスを楽しむのは当たり前であるが、私はその点仲間には入れない。何十年もこうした世界にうとかったというほかはないし、カラオケなど、どうしても好きになれないし、今でも近づこうとは思わない。ゴルフがまた然り。知事になった直後やりはじめたが、県議から批判され、絶対やるまいと決意した十五年ばかり前のことである。

11月22日（土）

第五回「国民連合」全国総会に期待できた

労働党上村氏からさそわれていて途中断ったが、又行く気になり、「広範な国民連合」第五回全国総会（於福岡教育会館）に行くことにした。総会をはじめ一時から那覇市長親泊氏の講演から始まるので、市長や榎枝氏に会いたかったのが大きな動機。聴衆は全国からも来ていて二階の会場一ぱい、二五〇ばかり満席になった。米軍基地、新ガイドライン有事立法、社会保障切捨、不況、雇用不安などが全国的に大きな関心を呼び、これを訴え政治を動かそうという団体がない中、国民連合はよくやっている。私もこの仲間に加わりたい程である。よく資料をみると福岡県もかなり運動はあちこちに見えるようになってきているようだ。労働党もその仲間に入っている。福岡県をまとめる組織は既に動き出している。奴間古賀市議、わたなべひろやす宮田町議にも合うことができた。市長の講演に前座の一人として私も挨拶させられ、よかったと思う。政党がどこもふやけている現在、「国民連合」

がこうした形で気運を支え盛り上げてくれることは力強く感じさせられる。縁があればつづいてかかわりたい。

11 月 23 日 (日)

金融界の激震

大手の一つ山一証券会社が破産した。たいていの人びびり。金融面で次々に起こっている。どこまで続くのか、何社を信用していいのか、これから先どうしたらいいのか、今もっている庶民の預金債金はどうなるのか、たいていの人び不安を訴えている。アジア諸国も高い発展率で世界の注目をあびていたが、タイ、韓国をはじめ、生産に勢いなく金融不安で揺れている。アメリカが震源地であり、金融動揺、低成長は当面止まず、激化の方向に行くのではないかと思うが、確たる理くつがあつてのことではない。軍備がべらぼうに膨張しているのだから、これは社会をくいつぶす一因になっていると思う。数字を用いて説明できるとよいのだが、その用意がない、七〇年代はじめにアメリカが金との兌換を停止して以来、国債発行が主導し、「バブル」の方向が止まなくなり、不良債権も競争上の常識となり今日に至ったと思う。

11 月 24 日 (月)

目が弱っている

日記がだんだん各行ごとに添わなくなった。明らかに目が悪いのである。この記録本のような線ではよく見分けがつかない。黒い線なら何とかわかるが、それ以外はかなり大きくないと読めない。近頃の新聞でもいろいろ工夫して黒という単調さを避けようとしているが、それは私には不利が強られる思いで拡大鏡に手が伸びる。白内障がひどくなっているのではないかと思っている。中国から帰って十二月になるが、眼底検査をお願いしようとは考えている。肉体のあちこち、特に眼・歯・肝が衰え目立つ。食欲あり、睡眠も程々に、仕事もゆったりとしているのに、この三つが気になり、他との比較でひとなみ以上に衰えていることがわかる。日記の行間が乱れる理由に、病のほか、電光が弱すぎる、ボールペンが薄いということもあろう。スタンドを利用したり、濃いペンを使うことが必要のようだ。もっとわが身をいたわろう。

11 月 25 日 (火)

やっと実現に至った二つの訪中旅行

諸事調整がつき、上海ゆき今日が発発で同行、のち北京グループに合流することでおさまった。浦東地区華夏文化公園内に昨年オープンされた呉昌碩記念館で同舟画社友好展がオープンされるので記念館の名誉顧問として出席することになったし、一日おくれの北京華命歴史博物館での日中文化交流団による展示会にも名誉団長として出席するほかない。二

つの企画が重なって折合いがつきにくかったのに、西日本日中旅行社の治田社長が万事調整してくれた。後者については私や呉汝俊氏が主唱した企画だが尺八の杵屋さんを筆頭に猛烈な妨害がはいり一時は企画放棄のほかないとすら考えられたが、辛抱しつつ事務を進めていくうちに、予定の半分の参加者が得られ、実現にこぎつけえたのである。RKBのOB阿部、はせがわの部長溝部の二人がよくやってくれたと感謝する。今回のような執拗大規模な妨害は私には未曾有の経験であった。準備も錯乱遅延し、一時はどうなることかと思っただ。失敗すれば国際的な恥、迷惑になっていた…

11月26日（水）

同舟画社上海展

呉昌碩記念館での同舟社上海友好展、これは上海の文化交流協会、西泠印社、呉昌碩記念館、呉昌碩芸術研究協会などが後楯になってくれている二回目の展示会であった。浦東新区の華夏公園内の記念館だが、周辺が急速に都市化経済化する中で残された貴重な文化スペースだとすら思えるに至った。呉越さんが通訳をかねてわれわれの面倒をよくみてくれた。呉長艷さん、呉超さんにも合うことができた。中食会のあと一行は次の行程、列車で金華に行くので、ここでお別れ、私は小休憩ののち、上海・北京空路のコースとなる。どうなることかと心配したが、師村嬢七（なな）さんが行路万事北京飯店まで同行し、私は指図に従って万事OKだった。彼女は筆墨の世界に入るため上海で勉強中という。今回も出品していた。北京は上海より寒い。しかし厚著をして備えると問題はない。国交回復25周年、香港回帰の年という区切りよい年の交流事業だが、あとあと続かせる口実が欲しい。文化交流こそ大切だから。

11月27日（木）

外資で変貌する北京

上海も北京も急速に変わっていることが街並みにもあらわれている。「国際化」改革開放政策のあらわれといえよう。あるいは外資の進出によるともいえよう。その規模の大なること。とても福岡の比ではない。北京飯店も二倍以上になっているが日本からの出資もあつてのこと。もとのままの建物も残ってはいるがどんどん新しく造りかえられていく。しかし、私は新しいものよりもいわれある古いものの方が価値があると思う。中国伝統美が残されているものの方が重みがある。天安門周辺にもそれが感じられる。西欧風のものには後世に残していいという信念が感じられない。それはわが国にもあてはまる。今の中国の近代化にはそのような軽さが感じられる。まさに外資導入ということであろうか。守るべき伝統ということが考えられる必要があるだろう。それは外資という言葉の中には見当らない。でも中国はよく守っているなどと思う。北京の街路は日本・福岡よりはるかにましだ。

11 月 28 日 (金)

総合レジャー施設天津蔓楽国際交流中心

今日は一日天津。絨繻を織っている工場を見学してのち、販売場にも行ったが、私のごとき古い人間には今更買う物がない。それに大きさからいって旅行者の買物にはなり難い。あと蔓楽国際交流中心いわば総合レジャー地区である。ホテル、レストラン、ナイトクラブ、サウナ、ボーリング場などが一箇所に一経営体に集められている。案内書によると従業員五〇〇人、日・中の合弁で日本側は「はせがわ」日本からの役職員も少くない。企業というのは誰かの着想から始まるのだろうが、人々の協力を得てどんどん大きくなると、当然のような存在になり、裏にある人との努力団結力が見えなくなってくる。まずはここまでもって来た努力に敬意を表し、この新鮮潑刺とした施設の立派に祝意をあらわしたい。旅行団一行は、「はせがわ」の宣伝の対象にされたことに気付いたかも知れないが、来訪者に敬意を表した点にも気づいてほしい。長い一日の旅程を使つてのことだが、それぞれ交換の価値はあったと思う。

11 月 29 日 (土)

皇帝の権力

万里の長城 (八達嶺) と明の十三陵 (定陵) が今日の主要行路である。参考資料によると紀元前五世紀周時代から築城が始まり、秦始皇帝は 30 万の軍と数百万の農民を動して本格的築城を始めたという。全長六七〇〇km、(北海道一九州二・五倍) に達する。明の十三陵は第 14 代神宗万曆帝の陵墓。域内には水中龍宮も建設されているという。北京よりも三度ほど寒いといわれる長城だったが、女坂の墩台^{とんたい}二つをこえたところまで登ってみた。幸い快晴そう寒いとは感じなかった。長い歴史の中、又観光地として訪れる人も少くないので城壁内通路の石が磨耗し、かえって継ぎ目が浮んでいるほど。ロープウェイをはじめいろいろの付加施設がついているが、今回は利用しないままだった。国を守るためだろうが国の何を守ることになるのだろうか。未だ理解に苦しむ。内なる敵はこれだけの努力をしても守れないに違いない。十三陵では参道の石像 (象・馬・ラクダ・功臣・武将らの像) は通らなかった。地下宮殿の重厚さは今も驚く。

11 月 30 日 (日)

空港で待たされる

北京から福岡まで旅の一日。荷物もさることながら手続きなど待たされる心の荷物も重い。国内旅行なら半分の重みですむだろう。トランクの中に身辺入用の物を入れる。そして出して平素の身辺になる国境を通過するのにそれほどエネルギーを使う。国が小さければどうかなと思うが経験がない。南アジア、中東、西欧、アフリカ、南米など小国の密集はある。それほどではないと思う。でも福岡、上海、北京の間は大変だった。疲れてしまう。

通過客が多いのも一因だろう。検疫と関税、パスポートこれだけなのに時間がかかる。安全検査もある。ここではポケットの鍵までチェックにかかる。銃、小刀はもちろんダメ、この安全検査は国内線でもなされる。国際線の特徴ではない。ハイジャック防止なのだが、麻薬爆薬はどう扱われているのか知らない。ともかく空の旅はチェックがうるさい。悪はどこにかくれているか、いつ爪をあらわすかわからない。いやでもこの種公的なチェックは認めざるをえない。旅装を解いた夜を迎えて疲れを消す段になった。

12月要記

十一月下旬到北京での文化交流展を何とか実現してやれやれの十一月だったが、そのやれやれのための軸物の整理に随分気を使い時間を使ったのが十二月だった。もちろん、いわゆる忘年会への関与も必要だった。ただ一年つづいたマスコミの公費監視の目が一般に忘年会などをかなり引き締めてた今年だったといえるだろう。金融不安に伴う消費心理への圧力と共に、この公費支出への監視が加重作用をおこし、消費支出はぐっと減少しているようだ。この年末ほどに不況が不安を刺激したのは戦後史の中で珍しい現象ではないだろうか。新聞広告、新聞折込広告がやたらと多いと思うこの頃であるが、広告費を出すだけのゆとりがあるなら、あとしばらくはつづく景況といえようが、私には先は決して明るくないとの予測がある。あと一年もつだらうかといえる。金融機関にも閉鎖の順番待ちという情報すらあるようだ。大企業なら解雇されても退職金あり、職探し援助もあるが、零細企業の人にはまさに地獄に突き落とされるようになるだろう。社会不安に転化されなければいいと思うほどである。新規学卒者が求職難に陥り、借契約就職をできたと思っていたら契約取消しをうけたり、——ともかく社会不安急増のこの歳末である。ゼニを握ってしまっただけでなかなか放そうとしない消費者が急増したこの年末、海外旅行もぐっと減っているようだ。こわくなった九七年。

12月1日（月）

年の変わり目が来た

12月になった。中国から帰って西側の庭に藤の枯葉が地面一ぱいに散っているのに打たれた。落葉も段落を伝えてくれる。今日は終日の小雨、南側の庭にキンカンが枝もたわわに色づき雨を受けていて、その上に甘夏柑がぶら下がっている。冬のわが家の庭、表玄関右側のサザンカは満開が過ぎようとしている。あと、カニバサボテンだが赤は満開をこし、紅白はこれからが満開というところ。梅や臘梅は年明けに春をまっさきに知らせる準備をしている。ピラカンサスは頑として真紅の味を守っている。今日から地球温暖化防止の世界会議が日本を議長国として京都で開かれるがアメリカを保守の先頭としてなかなか満足できる成果がえられないだろうとの見方が強い。カネ稼ぎ根性をもっと引っこめてほしいものだ。国内の政治も今月から重要議題が山積しているようでここでも新ガイドライン関係

有事法制でアメリカに寄り切られたような法が頭を出してきそうだ。介護保険で弱い者を泣かせないよう法案の修正を祈る。

12 月 2 日 (火)

売らんかな、買ったらすぐ捨てなさい体制

資本主義は自滅の方向に歩んでいるのではないか。昨日もふれたがそのほかにもう一つ、私見であるが消費者無視の傾向である。ボールペンが揃って出にくくなって来た。買ってダメなら捨てて早く新規に買なおせとっている。モンブラン万年筆もインクが漏る。そうならないようにする技術はつとに超えているはずなのに。パンツ靴下のゴムがすぐ伸縮作用を失う。昔のように別にゴム紐を新たに通すような手段も塞がれ、ゴムが駄目なら捨てて買なおせとっているのである。近頃あちこちの洗面所ホテルの浴場で気づくのは水栓コックが千差万別、一律に右まわしで止まり左まわしで開栓するようにできるはずなのに、箇所により全く違う。家庭なら馴れでいいが、ホテルや集合所ビルでは馴れがなく、あわてとまどう。生産者は形を新た売りには魅力を与えるかも知れないが、使用する者にとってはとまどいの時間ロスを感じず。そうまでして製品の販路を獲保せねばならないのか。身辺で使う薬も名称チンプンカンプンだ。

12 月 3 日 (水)

山本正一郎氏と老後について語り合う

新京経理学校時代横のベッドで暮した山本正一郎氏が、来福し、午後 3 時から 9 時まで、アクロスから始まり宿所グリーンホテルまでいろいろ思い出話や現実問題について意見感想、思い出ばなしを出しあい楽しい時間を過ごすことができた。今後のこと、老後設計については似ていながらも一致しない面があった。子と住居を共にするという問題をめぐってである。彼は娘と同じ住所で暮らすべく計画は終っており、現在の別居から引退同居への移行の時点の問題として残しているという。早目に同居に切りかえて馴れた方がいいという考えと、いよいよ引退するほかなくなるまで、今の別居がいいという考えとが錯綜するようだ。二世代の同居には「嫁」の方が辛抱しきれない例が多いようだ。今の女性は「男女同権」で固っている場合が多いからであろう。私は既に同居の考えすらない。自然死が選択できるなら最高で、一人で孤独で去りたい。

12 月 4 日 (木)

日本発世界恐慌

すでに始っている金融恐慌について書いてあるようだったので昨日週刊朝日を買った。以前からもそうだが、大前研一が「日本発世界恐慌」ということで 3 ページにわたって書いている。…大蔵省は二年にわたって腕力で恐慌を押えてきたが、もう有効性を失った。十

一月二十四日に破綻を発表した今、日本経済が底知れぬ大混乱に突入したことは誰の目にも明らか。大蔵が山一から手を引くしかなくなったことは全国的に波紋をひろげているし、世界的規模を日本への信頼を低めて、発展めまぐるしかつた東アジアへの信頼性を狂わせている。さらに数十兆円にのぼる日本保有の米国債が放出されるとなると、米ドルの急落は世界経済をゆさぶるだろうに、アメリカの仕掛で山一は潰さざるをえなくなって来たようだ。すべてアメリカの操作。アメリカは火の元は日本だとしながらも自分達にもふりかかる火の粉をどの程度避けられると見ているのであろう。不良債権のなすり合いですむか。

12月5日（金）

宮本氏

↓

赤村氏

↓

中村氏—中村工房

頭の中を変えなくては社会を理解できぬ

今日は思いがけなくもコンピューターを使っての今日のプリンティング業界の変り様についてショッキングな勉強をすることができた。九大元学長高橋良平その子中村昭平、その子中村聖児氏が経営するGIMMICという会社でのこの社長の話とコンピューター操作職員の働く現場拝見ということだけで受けた私のショックは測り知れないものがある。印刷業界の情報機器技術による様変わりは一〇〇年の産業革命と質的に違う新たな産業革命といえるだろう。今まで知らぬ分野に入って一寸のぞかせてもらったわけ。新聞その折込広告、看板などの分野で一寸感じてはいたものの、現場社長からこまごま話が聞けたので感謝の連続であった。今日の社会全分野にこのプリント界のような革命が進んでいるわけだ。大企業・中小企業といった区分、印刷業といった産業区分そして従来の統計表現は、もう骨として埋められねばならない。新しい統計学表現を知りたい。

12月6日（土）

年金、掛金はふえ収入は減、それとも制度廃止か

経済恐慌や戦争の心配は表に出てくる大問題であるが、他方長期的視点から真暗い世界が感じられるのが超高齢化、それに関わる年金問題、もっと拮げていけば社会保障の問題である。今日の朝刊は厚生省が国民に投げつけたこの分野の五つの選択肢をめぐる情報でにぎわっている。内容は①現行料金と年金収入水準でいくか、②現行 26.4%負担を 23%、③ 20%、④ 15%、⑤厚生年金の廃止というもの。これは夫婦二人妻は専業主婦、40年間加入者、という標準世帯二〇二五年という標本で表現される。二〇二五年の高齢化のピーク、①では年金月額 23 万円、②は 20 万円 7 千円、③は 18 万 6 千円、④は 18 万 9 千円となる。

要するに料金はどんどん高くなり、年金収入はきびしくなる。それとも廃止してしまって民間レベルの保険でも「どうぞ」ということになる。省側としては③ではどうだろうと狙っているようだ。年収の 2 割の料金を払い、月 18 万 6 千円もらうという線である。

12 月 7 日 (日)

北鮮は仮想敵国たりえない

復古堂社長の河原田氏の送迎で車による八幡往復だが、配慮してくれて楽々、助かった。大いなる苦勞の節約であった。市の勤労者会館レインボープラザが会場である。北九書の祭典と朝日カルチャーセンター共催の 32 回書展優秀作者の表彰式と懇親会が基本にあるが、竹田信一県議の南北朝鮮視察報告、とくに「今北鮮は」という点にしぼった報告スピーチが加えられた形になった。私は挨拶の中で日米安保新ガイドラインが有事立法を、そして戦争を求めつつあるが、北鮮を仮想敵国とする空気がつくられつつある現在、北鮮は仮想敵国たりうるかどうかを竹田さんの話の中からはとらえてほしいと指摘したが、竹田氏は、とてもその段ではない、軍備も南にくらべ、著しく劣っているし、ここ数年の食料不足、それに油がないので動きがとれないといていた。農耕機械も油がないので旧式のものすら眠ったままだとのこと。ガイドラインの仮想敵国づくり一つはダメ。

12 月 8 日 (月)

北京展での書作返還される

六時から東急ホテルで北京ゆきの時のスナップ交換の夕食会があった。三〇人ほど出席。展示した書も仮表装の形で送り返されてきており各自で持ち帰ることになった。私の分は 37 本もあった。その場で安部すみ子さんが私のを 5 本もち帰ったが、呉汝俊に一本を譲った他は自宅にもち帰り、今後手数もかかるが、徐々に処理していきたいと思う。北京の展示では各自観賞する時間が十分なかった。日程が詰まりすぎたためである。書展では牧坂、吉岡、安部夫妻らも多くの友人弟子達の作品を預ってきていたのに、どう選別され、展示されていたのか十分に頭に入れることができなかったのではないだろうか。私のも、四五点ぐらい運び入れたのに、二五点ぐらい展示されていたようだ。いずれにせよ不精確さが残ったまま今日の作品引取りに至ったが、不備な点は反省するほかないと思う。ただみんな表装されていたので後で利用できる。

12 月 9 日 (火)

偏向している男女同権論

小倉で朝日新聞の社会部長をしている広瀬輝文氏がアクロスに来て私に中食を共にしたいといっていると森山から電話連絡があつて正午頃アクロスに出かけた。中食の時に妙な雑談のつながりから近頃の女性の強さにゆがみがあるとの指摘が一寸話題の中心になった。

広瀬氏も給料の一部を自分の預金口座にするのに苦労していて、夫婦異和感の一つとなっているという。又交際費というのは遊び費用のように思われ、環境変化と共にこれが激増するのに妻が理解してくれないし不信の素になっているという。男女同権といえば言葉はいいが、振込口座に入った部分は妻が牛耳り、主婦業は自分の汗の結晶という訳で、感謝の意を夫に押しつけるという態度が主流になり、収入の労苦への感謝は振込制によって無になった。家事への努力への感謝が価値判断の主な尺度となっていた。この男女同権論は偏向があるという話であった。

12月10日（水）

大樹の枝が大風で折られていく感じ

ある小学校で支配直前のボーナスが、金銭配送の車が着いた地点で強奪にあったという。つけねらわれていたのである。ただ近頃の私には全く意識にない分野の話である。振込制にしていた人は助かった。この点よいことだと気がつく程度である。一般社会は不況で泣く人が少ない。失業率は三・五%これは近年最高値といわれている。辛抱すれば改善なると見透している人もあるようだが、甘い観測ではあるまいか。山一証券で七〇〇〇人が先行き深刻さを味っている。四月の三池と違った分野の暗さである。来年四月の学卒の就職にも今になって解約を申出る企業がある。就職戦線異状ありである。枝の枝の産業分野が樹根を支配していて、それが大風でポキポキ折れて吹きとんでいくような感じで、その大風が木を裸にしてしまいそうである。国民の政治判断にもそれがある。

12月11日（木）

下前歯二本抜歯

九大歯科病院で甲斐先生から下前歯二本を抜いてもらった。九時半頃、しばらく施術後の歯周の痛みがあって先が心配になったが、薬の作用もあってか五時頃には全く痛みを感じなくなった。義歯をどうするかは後日寺田先生にまかせることになる。八〇二〇という言葉がよく使われるが、私はすでに失敗者で一〇本もあるだろうか。子供の頃は高齢の時の歯のことなど全く考えなかった。後悔というよりは無関心だったわけで、もうおそい。一般に、寿命よりも歯の方が早く駄目になっているといわれるが、歯の方が長持ちしてもらいたい。幸い今の私はかなり硬いものでも押し割って食べる能力は残っている。これが何時まで持続するのか判断はできないが、噛みつぶす力があるのは有難い限りと思っている。下前歯が二本ないと食べにくい事がたくさんある。歯は上下何本もあるが、それぞれ分業しているのである。

12 月 12 日 (金)

冬の中国

短冊形の紙片に墨書する一日だったが、「瓶中有酒爐有炭」というのが興味をひいた。出典は出てないが、いかにも中国的ではなかろうか。ゆっくり動いて成長していく中国なのである。瓶、酒、炉、炭すべて人類進歩の足跡を利用しているが、無理が感じられない。暖房に文明技術は無限に利用される今日からみると、野趣豊かといえる。この表現は今でも通用するかと思える。寒生酒思という句にもでくわした。寒巖一樹松という句も前から筆にしていたものである。自然の中に己れをおくのであって、決して自然に背かない、嫌がらない冬来幽興長と受けとる。月照萬家霜というわけで冬に包みこまれその自分を知ろうとする。喜びすらそこに求めるのである。冬・霜の克服など考えない。その気持が詩句に豊かに残されている。何かしたいなら一燈独守寒宵となるのである。

12 月 13 日 (土)

岡崎次郎氏の行方

天神小野屋で嶋崎譲を囲む懇親会があったが、彼とはずいぶん会ってなかった。6才下という。元気一ぱい。今は議院活動を終って研究所活動をしている。彼の話の中で、元九大教養部にいた岡崎次郎氏の話が珍しかった。「資本論」の訳を岩波から出した背景で向坂先生とのごたごたが起り二人の縁は切れ、十歳上の奥さんとの秘話中でも高齢化する中で、夫妻は思う存分旅行に明け暮れ、山陰瀬戸内海大阪と動いたあと行方不明になって今日に至っていて足跡のたどりようもないという。嶋崎は夫妻の旅行出発の一ヵ月前に高輪のプリンスホテルで食事を共にし、その時消えてなくなるとの決意予言はきいたという。第三郎氏の娘さんが遺品の後始末はしたはずで、誰も想像は海か山での合意自殺で、遺体が残らぬよう準備は万全を期した筈というのである。常人が考えぬ最期をよく検討し奥さんも同意した筈とのこと。預金通帳には一〇〇万円近い残があり足跡も判る資料らしい。

12 月 14 日 (日)

赤穂浪士討入り俵屋玄蕃

(コピー転写)

【三波春夫「俵屋玄蕃」の歌詞コピー貼付】

12 月 15 日 (月)

時代感覚古錆びて

北京ゆき主要者の打上げ夕食会に行くため六本松バス停に行ったら、久しぶりに英語の野口氏に会い車内天神まで雑談を交わした。中村正夫氏が亡くなった話も出たが、あれこれきいていると、多くの教授たちが既に OB となって第三の人生を歩んでいる。彼も含めて

それぞれに適職を見つけている。よくもあるものだと感心する。不況の厳しさが報道される今日この頃だが大学教授 OB には影響ないように思える。野口氏も、これからの展望を見出すことが大変といていた。若者がだんだん少くなるからである。私は県立大学の非常勤講師を半年受持った経験からして「今浦島」との実感を思い出す。われわれ年寄りとはとても若い学生の気持が理解できないので教壇に立つ資格がないと思えるのだが、野口氏程度なら学生の気持がより近く理解できそうだ。古い者は早く去れといわれているように感ずる。せめて七〇歳ぐらいまでで古いのは使い物にならないのだ。

12月16日（火）

十指有長短

下前歯二本を補綴してもらいながら「十指有長短」という中国の言葉を思い浮べた。歯にはどれもそれぞれの役割があるということが、歯が痛み抜歯されてはじめて感じられたのである。この二本で食べにくい食物がでてきたのと、関係なく食べ得た場合との区別がでてきた。直してもらって何でも食べられると思ったのである。十指長短ありという場合も、片手の五指ではいけない。右と左は違うのだ。五本の指が同じ長さではいけないし、小指が長ければいけない。左右の親指は他の指と明らかに角度が違ってむしろ内向きになっている。夜の山紫会忘年会でこの思いをスピーチしたら感心してきてくれた。彫刻をする時に左右の手が、そして十本の指がそれぞれの役割を果たしているということが気付かされたとの感想だった。小指の短いということをいうのではなく、その短かさに効用があると気付くのである。帰宅して家族一しょにこのことをよく考えてみてほしいといっておいた。

12月17日（水）

今後の環境保全運動のリーダー

大手門会館で十一月のエコリレーについての反省会があった。今年に限らず今後も何らかの形で同じような環境問題をテーマとする運動をしようではないかということが結びとなった。反省会は連合福岡と地域生協からの実行委員で構成されたが、出席者は若者が少なく、今日の労働組合の幹部はふやけてしまっているとの見方が吐露された会でもあった。労使関係の「平和」ボケがつづき、組合の使命がわかっていないとの指摘があり、一皮むいた大衆運動が必要だとの意見が強く出された。私は大衆団体が闘争の主体になることを越えて人間生活を共同で守っていくリーダーとして使用者や行政を連れ込むことを目指すべきだと主張した。21世紀はその意味でも共存の新しい世紀の開幕といえるのではないかと見える。つまり労使対決ではなく労働側が使用者、行政、民主団体を人間共存の努力の先頭に立つという流れを作るべきだ。

12 月 18 日 (木)

韓国の経済危機を日本が支える？

金融通貨の問題が日本のあとを追ってタイ・韓国へと移り大騒ぎになってきたし、わが国の経済成長も消費の減退などでゼロ又はマイナスになってきた。さらに韓国支援や経済対策のための大量の国債が発行されるようになりこうした分野についての報道で新聞がにぎわっている。倒産支援の国債というのが、結局は価格や税を通じて庶民、弱い者が被害をうけることになる。つまりシワ寄せを被るのは弱い者なのである。韓国支援といってもシワ寄せ額の増加の一分野である。どうもこうした騒ぎの中でアメリカはニタニタほくそえんでいるようだ。逆にいえばアメリカ経済のシワ寄せを日本が媒介者となってアジア諸国にばらまき、日本の弱者に押しつけているように思われる。戦前の植民地支配が自由化・規制緩和・金融問題となって形をかえているのである。アメリカ覇権だ。

12 月 19 日 (金)

韓国金大統領の時代となる

(金大中が大統領に 18 日選挙)

昨日おこなわれた韓国大統領選挙で、野党の国民会議の金大中氏がハンナラ党李全晶氏を破って当選したと新聞に大きく報道された。得票率は四〇・二七%と三八・七四%というから小差激戦だったようだ。金大中は一九七一年以来四度目の挑戦でその間拉致軟禁、投獄死刑判決というような苦難をのりこえてきているし、日本人にも、これら事件を通してよく知られた人物である。反米という姿勢はなく、北鮮に向けては「和解・不可侵・交流・協力」という態度を貫いていくであろうから、安心して将来をまかせうるのではないかと思われる。但し、現時点での金融崩壊に示されているような経済界の難問、WTO との関係はどう乗り切っていくかとなると、韓国自体の先行きは闇であろう。アメリカがその面で、日本を使って韓国をあやつることが、今後の展開だろう。

12 月 20 日 (土)

参院選で自治労が藤田候補を推すという意味

自治労の村上委員長などから呼ばれて春吉の春駒で夕食懇談をしたが、藤田一枝さんが渡辺四郎のあとをうけて次の参議選地方区から出馬することになったので私にもよろしくという趣旨の会であった。適任者がみつかったものだと思ったが話をきくと他にも立候補したい人がいて若干もつれが残っているという。よくあることだが仕方がないだろう。克服するしかない。今日の話の概要は社民、民主、新進など自民以外の政党の組み合わせが全国ばらばらという現状の中で、自治労出身という候補をどう位置づけるか、全国揃える規準がないという現状の中で、福岡は社民と民主、それに自治労という古いままの集団の名をどう使えば有権者にアピールするかということ、自治労が出すぎるとよくないという

ことと、全国統一の旗印・スローガンがまだ見えないということ、こうした状況の中では福岡県が頑張って見本を作るチャンスが来ているとの自覚が必要ということに意見が一致した。

12月21日（日）

クリスチャン説教

深江さんに誘われて案内されたのが草ヶ江小学校に近いキリスト宣教会館。今日は72人の出席だったという。二時から四時までの二時間、前半はお説教講演、後半は聖書を原本とする問答。幸い今日は温度も低くなく、暖い日だった。みんな熱心に説教をきき、問答に応じ厳粛裏に集会は終わった。六本松会衆と名づけられる会である。こういう会は初の体験だが、キリスト教会の雰囲気は初めてではないので別段驚きはなかったが、独特の言葉が少くないので、意味を十分に把握できぬことがたくさんあった。知らないから、早口にきこえ、意味が受取れないのである。習字をするとき漢字の典例に儒教的な言葉が少くないので、キリスト教も儒教と似た思考方法を使うのだなと感じた点が数回あった。聖と俗とか、中庸と神の国とか、ひとに当たるとき一方的な受け止めをされるようなことがあってはならぬとか、貧の中に楽があるとか、いろんな事例をあげることができる。が一寸、一寸違うことも事実。

12月22日（月）

名護市民ヘリポート建設反対表明

昨日米軍普天間飛行場返還に伴う海上航空基地（ヘリポート）建設の是非をとう名護市の市民投票があり、結果は反対53%と出た。投票率は82%——有権者三万八千——アメリカはにたにたとこれを見ている模様。処置に困るのはまず市長、知事そして橋本政府である。一兆円投げ出してこのヘリポートを作って米軍に使ってもらおう。そのために市民がこの方針を賛成して欲しかったので反対派をおさえるために政府は市民にさまざまな経済的利得策（餌）をちらつかせ、釣ったのだが、「基地反対」の原則派がそれに負けなかったといえる。「反対」派の多い名護市に対し知事がどう対応するか、橋本首相が次の追加餌を何とするかが今後の問題点。大田知事は原則的には「基地反対」ではあるが、実際的に板挟みとなって苦慮しなければならない。アメリカは「いずれにせよ・・・」と構えている。軍事基地、軍事、安保そのものがナンセンスなのに。・・・

12月23日（火）

米軍基地の不合理（無理強い）、もういい

沖縄のヘリポートが今後どう展開するか注目されるころだが政府は大田知事をはじめ、さらに圧力を加えて初志貫徹に力を入れるに違いない。21日の名護市民の投票の結果は賛

否半々に近いという解釈もあるようだが、それはゴリ押しの側の解釈である。別表のように賛成は 8% 余でしかない。条件つき賛成が 37% あるが、これは当局側からさし出された餌が条件だというのに違いない。地元の発展とか別途収入とか餌を待ってということではないだろうか。だとすると無条件賛成 8% に絞ってごく少数派と読むのが自然だといえないだろうか。ともかくヘリポート、米軍基地には反対する人が一ぱいあるわけで、これは「良識」をあらわしている。なぜに米軍が？なぜにヘリポートか？と問うなら、無理が重なっていることが誰にもわかる筈。米軍基地の不合理がそこまで――

【「確定開票結果」(掲載紙・日付不明)の切り抜き貼付】

12 月 24 日 (水)

沈みきったクリスマス

不況のゆえの困窮がどんどん広がっていくようだ。小経営、即ち中小零細商業や農業者、弱肉強食の原理をそのままかぶっている人達である。東北の農家で一町ほどの耕作を辛うじて守ってきた人達は、政府がこれ以上減反をおしつけてくると収入の限度をこえ農耕をやめ、収入の道を捨てるため東京に出ていく外ないといわれる。東京では零細企業の閉鎖がどんどんふえて失業者の山、東北から職を求めて上京した農業者もホームレス失業を覚悟するしかないといった筋書きである。ここしばらくの不況と思う人も多かろうが、これが体制的なものであると考え直すしかないと思う。「自由化」「グローバル化」は美しい響きをもつので錯覚する人が多いが、実は弱肉強食の拡大化が実態なのである。規制緩和も同じである。アメリカは自己保存のため国境をこえた自由化を各国に強要してきたのである。クリスマス・イヴも静か夜の沈沈といえる。

12 月 25 日 (木)

教育を担う者の主体性を求めて

21 世紀の教育を語る青年フォーラムが、福岡市内清川の若鶴旅館で三時半から九時まで開かれ、招かれて出席した。福岡高教組の大塚委員長を核とした任意集団全国組織である。今日の集りは予定より少なく 35 人程度。全国から任意に又は主体的に集っている。大塚氏の最近出版した教育再生宣言での主張がこの集会、研究討論会の基調になっているといってもいい。教育の再生は教師又は教員組合の目ざめ、自主性、主体性の回復にあるという主張といってよい。大塚氏は講話する中で、教員組合の行政当局との対立姿勢を反省し、教員と当局の関係はパートナーシップであること、そのゆえに、自立、主体性の自覚が何よりも大切であると説いていた。私が知事になった直後、筑豊ハイツで教員組合員に「君が代、日の丸」は、もう教員組合の主戦場ではない」と演説して物議をかもしたものだが、この青年フォーラムもそこに源流を求めてくれているといってもよい。

12月26日（金）

年末大掃除

年末大掃除の一端、在宅で午前中から四辺のガラス窓などの泥おとしが中心。アルミ・サッシの部位すべて、二日はかかると見て、今日は先ず南面から。サッシは敷居が大変。塵がへばりついているからだ。また高い部分も面倒である。去年は掃除してないのではなかったろうか。ともかく塵が積っていて掃除の仕甲斐はある。今日は玄関の門扉を磨き、表札を書きかえた。近頃の建築はどうなっているのだろうか。わが家は一昔前の建築様式だが、もう一昔前の、そしてわれわれの幼少時代の建物はアルミ・サッシではありえない。今日は掃除しながら、カラスなら掃除をしないだろうし、新春もない、人間は昔は昔ながらの、今は今風の掃除に悩むんだなというようなことを頭に浮べ働く自分をふりかえった。門扉横の表札が消えてしまって久しいので、姓の二字を書き替えて貼り出してみた。いつまでもてるだろうか。掃除は気分の掃除でもあるので、あと暫くの期間への再出発だ。

12月27日（土）

高速道での旅

北京上海ゆきでお世話になった人に賀状を少々書いたが、本年も全体は受身を守ることとする。ところで啓二・直美の二組は今朝早くレンタカーで九州に向った。夜八時四〇分にわが家に到着、急ににぎやかな夜になった。三人で運転二時間ずつ二回交代で来たというが疲れがひどいようだ。運転しなくて乗るだけでも十二時間も乗せられると疲れるのは当然である。何万円かの節約のために疲れに耐えるのだが、高速道路は高速で走れるというだけで他に利点はない。両脇の風景は単純化され地域性がない。休憩する場の土産物の差程度である。スピードだけを高価に買っているわけだ。その点航空路も同じだといえる。スピードに何の価値を求めるのだろうか。近頃の人間は少しおかしくなっているのではないかとすら思う。時間を有効に使うにはほかにいくらでも方法がある筈である。軍事目的が婉曲的にだが少しは混入されてはいないかとも思う。それとも建設産業市場拡大？

12月28日（日）

アクロスのシンフォニーホール舞台納め

夜九時半からアクロスのシンフォニーホールで舞台納めの式を行った。舞台専属の職員アクロス福岡（管理側）両方で一五人ほど清らかで静かな舞台のまん中に二列に席を並べ、おみき杯をテーブルに並べ、正面中央に鏡餅・スルメ・榊・杯を供えた小神棚を作り、舞台の客席側の両端にも杯をおき、二礼二拍手一礼をして神棚のオミキをくばり注ぎ理事長挨拶、乾杯というようなやり方で式をしめるのである。何でもないことだが、一年をふりかえり、安全と発展に感謝し、迎える来年も一そうよくなることを祈り誓い合うという趣旨がしみじみ感じられた。年末の締めくくりをこういう形にするということは大切なこと

である。心の中になっとくできている筈であるが、かんたんでも、形に表わすことの必要性が改めてわかる。その形の中に清めと杯が付随する、これ又必要だと思う。他国はどうなっているか知らないが、日本では神式のもつ伝統美である。簡略した形で今日のような方式はよかったと思う。

12 月 29 日 (月)

世代間の対話が乏しい

荒江四角まで出向いてサリを入れ七人でフグ料理を食べたが、サリは食べるのに積極性がない。性格のようにも感じられる。他の六人はそれぞれ雑談しながら過ごした二時間余、何かまとまった話題、興味の集中した話題があったともいえない。それぞれが関心を異にしているようで、意味ある食事会であったとは思えない。年齢、職業、生活上の関心が違ったまま統轄するものが見当らぬし、誰もそれを欲してないようでもある。今日の社会の一端が反映されているようにも思える。親子ならそれがわかるような話が出てもいいのに、意識の連結が求められていないように思える。興味の共通性はフグを食べているということに尽きているともいえる。世代の意識差が今日一般的に著しいが、わが身边にも同様のことがいえる。将来とも差が広がるのか、少しは以前のように戻るか。生活上の問題についてもっと対話が欲しい。ゲーム・テレビに目が向くのでなくて。

12 月 30 日 (火)

医療保険の心配

こまかく点検したわけではないが、既に今、そしてさらに今後、保健医療の分野での行政改革が貧者、高齢者にとってますます厳しさが増すようだ。帰省してきた啓二がこの点を会話の中でひどくつつくのである。新聞は保険会計のきびしさ、高令者医療費の増嵩を報道し、当局の方針を弁護しているかにみえる。「薬漬け」の一面もあれば過剰医療の実態もあって、何とかせねばならぬことも事実で、国民の保険制への甘えは正さねばならないことはいままでもない。けれどもその方向への改革が弱い者いじめに傾くのも事実である。私の皮膚病も長い期間不治と観念しているほどだが、医師にとっては収入に効果が薄いせいかふり向いてくれない。社会保障分野全体がとくに厚生年金など次の世代の人々は頼りにならない程にしめつけられる。介護保険制がスタートしても、自治体が苦慮し弱い者がいじめられて保障の名に値しなくなるように思える。

12 月 31 日 (水)

庭の草木も迎春を

鉢の梅が一輪だけ咲いた。蕾がふくらんでざっと並んでいる。この寒中に己れを支えている姿は心強い感を与える。いい新年を迎えてくれていると思う。吉岡さんが来宅されたの

で、きん柑数粒と ママ の小鉢を一つ、アロエの一鉢を差上げた。甘夏柑が重々しくぶら下っていて心強い。臘梅は盛りが過ぎたようだ。水仙はこれからが絶頂という時に来たようだ。侘助椿は花が毎日のようにどンドン落ちる。切花には向かないらしい。アロエの花三本と水仙とを花瓶に生けて新年を迎えることとした。山田さんがもってきてくれたシンビジウムの大鉢は玄関に飾っておくしかない。千両と万両が数株ずつ、今は赤い実を美しく日に照らしている。万両は白実のもある。千両は切花的に瓶にさしても何日も耐える力をもっていて、美しさと共に貴重さを教えてくれた。正月を迎えるために庭の草木もわが思うように整頓し、落葉も掃除して清らかさは増した感は得られたものの、平素からの熱意の不足を思う。

年末所感

昨年正月を迎えるに当って旅費、カラ出張、公金不正使用のテーマをひっさげて西日本新聞記者がわが家の前の石段に坐り込むようにして、私に質問回答を引き出すためにねばり抜き、帰省していた啓二たちを怒らせるシーンがあった。オンブズマンを名乗るグループが私に不正使用額を弁償せよ、アクロス理事長職を辞任せよ、受賞を返還せよと要求しているが、前知事はどう答えるかというのが坐り込み記者の私への質問強要の中味であった。私はこれに直接答えず結局記者は引揚げたが、後日、県への不正額返還については個々に話合いが進み、職員はそれなりの方法で返還するようになった。例えば三〇〇万円を月給から割振りしつつ返還するとか、知事は減給だとか。前職の副知事は六〇〇万、出納長は五〇〇万円、これは一括支払いをした。前知事の私には一六〇〇万円が割振られた。文句をいえば混乱するので私はこの割振を黙認したが、支払は月々一〇〇万円と決めた。不平をいう人もいたが追及する術はない。総額五八億の不正というが、オンブズマンは福岡県だけの追及、割振返還金の当不当の追及は放棄して知らぬ顔の連中だった。その頭、名和田某。

補遺

日記所見

毎日何か書き残していきたい。何が目的か、それは自分にも説明できない。ある意味では理屈抜きの行為、一種の執念の産物といってよいだろう。敢ていえば、四〇歳半ばすぎに物忘れがひどくなったことにしみじみ打たれ、何か書き残しておくしかない。日常使う手帳で事足りるかも知れないが、手帳だけだと何か足りないもの、不便なものを感じさせられる。「三日坊主」ということで、書きはじめても続かないということが、他の人からの体験でも自覚しうるのであるが、私は、それならそれでもいいのではないかと自恕することによって書きはじめていくうちに、執念のようになってしまったのである。利用価値はそれほど強調することはできないが、時に、めくってみて、そうだったのかと思うことがある。

このことの意味、価値は誰にも説明できないし、判ってもらえないし、その必要もないのであるが、何ともいえぬ自己満足が得られる。更に、ま、あの日はどうしていたかを回顧せねばならぬことに出くわすことがあるが、なる程あの日は・・・と回顧する無二の糧ともなる。私が日記を書いていることを知って貴重な資料に、と私の死後の処分に関し意見をもっている人がたまにあるが、私は己れの死後につき、いかなる指図もする積りはない。財産処分や人身取扱さらには勿論、評価についても同じである。(一月一日夜)

1 月 1 日、この日記帳は年末に帰福した一彦が先月 30 日に買って来てくれ、サイズが大きくなったが、やむなく使うこととした。年末が近づくまで寿命という観点から新しく買うのを控えていたが、年末になって私自身マスコミ記者から封鎖監視される身となり、行動を塞がれてしまったので、このような結果になった。いわば記念品ともいえる品物である。命ある限りそして可能な限り今年も何かと書き綴っていきたい。

ひそかに出てきて、ひそかに去る。これが人生というものか。出現するときも、去ってしまうときも限られた人の関心と呼ぶだけ。出生してだんだん多くの人と関係し、逝去の時はほんの少しの人にしか関心を寄せられない。以前から、ペットたる犬や猫が知らぬうちに、知らぬ場所で死んでいくようだと感じたことがある。鳥や昆虫や野獣はどうなのであろう。遺体をあちこちで見かけた事は例が少い。人間は霊長といわれるだけに少しだけ違うようだが、つきつめると、あまり変わらないのではなかろうか。思うに人も含めて各個体は自分のことは自分でしなければならぬので、他のことは自身に関係がなくなれば、知らぬ顔の立場態度になってしまう。当然であろう。近頃の一日一日を見つめていて、以上のような感じを懐くことが少くない。孤独というのはそれ自体というよりは他との関係がだんだん薄くなっていくことだ。借金や病気でも孤独でなく人をつなぐ関係になるようだ。レジャー、趣味、娯楽、争いごと、何でも関係を取り結ぶ縁である。よいことだけだと、それがなくなると孤独に近よってしまう。(三月十八日)

一〇月十四日 シャロンゴスペルチャチの竣工式に飯田さんと二人で行ったが帰路は独りになった。池袋から浜松町まで山手線は送り人がついてくれたので、ややこしいな思いながら進んだが、それから先は飛行機の出発手続きや時刻に間違わぬように進んで行かねばならぬのに独りでは心細かった。チェックインのところで係の人にききながらも何とか進んだが、羽田空港も新規になったので、迷いが少くないだろうと思っていた。福岡空港も新たに拡大されたし、地下鉄との関連もあって馴れないといけない。人波に従って行けばいい場合とそれでは済まぬ場合とがある。すべては都合よくできている筈なのに、主観がその通り沿わないのである。関西空港が迷いやすかったのを思い出す。福岡天神は西鉄駅はじめ模様替えが進み、デパート三越がオープンしたので、この界限馴れるには何回もの

経験が必要である。世の変化とか進歩といえればそれまでだが、必要、ニーズの少ない者にとっては同じ世界がよそ者扱いすることになってしまう。環境の変化が悪いといっているでもはじまらない。自分が主体的に、その中に飛び込んで自己変革をテストする以外に対処する方法はないだろう。隠居したいのはやまやまだが、それでは生きていけない。長い間知事をしていて定められたコースしか歩まないでいるうちに世の中は変わってしまう。そのあとになって「今浦島」だと歎いていても仕方がない部分と、今は既にとても追付けない部分とがあることを心得るしかないのではないか。

十二月三十一日

今年も啓二、直美の一家計五人が帰福して、賑やかな年末年始となった。一番気になるのは年後半不況が一段と深刻化したことだ。一彦も、この二人も、そうした景況の中でうまくやっていっているのだが、いいとはいえない中で、今暫くは何とかつないでいく方法はあるようだ。私自身、交際費・交通費の支出に心配しつつ凌いでいる状況。四月以降毎月支払う県への不正旅費返還金の一〇〇万円は誠に厳しい圧力ながら保険・信用関連の満期を待ちつつ凌いでいる。県はこれを集めてどう使っているのか、知らない。ウヤムヤであるし、オンブズマンの旗を掲げていかにも正義の味方づらをした名和田某も今は音なしで、福岡県をかきまぜて事終れりと済まし顔をしているとしか私にはみえない。この名和田方式で社会の浄化が進むはずがない。掻きまぜをただけ。弁護士と称する人間がいかにも俗人かがよく証明されたと思う。それで困った人も罪を逃れた人もいるわけで掻きまぜたにすぎない。これが実際の世事なのだ。こうした俗世事を逃れて隠棲できたのは昔の人、又はかなりな財力があって自由になれる人である。わが身を思うと隠逃する能力すらない。名和田のような男を質す力もない。まことに残念だが俗事に流されて時を送るしかない。せめて清水の流れに身を委ねる努力を少しでもできればと、毎日自分に言って聞かせるのが最良の生き方だと思う。あと何年生きられるだろう。以前から二〇世紀が終るまでとの念願があり、あと二年残すだけとなった。それ以前に逝去となっても惜しむ気持は勿論全くないが、仮に希望するとすれば二〇世紀一ぱいで十分と思う。

ところで今年は呉汝俊との関係で、中国ゆきについて何とか凌がねばならぬ苦勞の多い年であった。春の段階での竹炭寄贈は立花、松尾氏らその後どう処理したのだろうか。何の知らせもないなら頓挫したとしか思えないし、私が利用されたに過ぎないとの結論になってしまうし、逆に相手中国側の交流協会、発展基金会などに迷惑のかけっぱなしになってしまい、失礼失礼大変申訳ないということになってしまうのである。中国ゆきでもう一つ問題になったのは十一月下旬のことである。師村氏が同舟画社展を上海の呉昌碩記念館で開き、諸葛村に足をのばす計画と当方が呉汝俊と組んで天安門の革命歴史博物館で書展を中心にした文化交流訪中団を組もうとした企画が日程上重なり、双方に関係した私が股ざき状態になったということである。日程調整だけなら話し合いで何とかできるように努力

すればと思うが、北京での書展企画に対して反対攻撃が起った。師村氏の側から更には当方企画内部尺八の杵屋氏からも呉汝俊への攻撃が頑張に行われることになり、アクロス福岡の森山、白土もその方向で私に対応を迫ってきた。中国の人民対外友好協会の李佩さんも、これに乗った。要は呉汝俊は信用できない、企画は無理というのである。当初は二〇〇人ほどの参加を予定していたこの企画は実際は八五人になってしまった。刺激をうけて脱落する人がどんでんできたのである。いわば組織破壊であり、これに乗る予定者ができたのである。企画推進が混乱された。そのため会議の数がふえ、時間がかかり、中止もやむなしといえる状況にもなったことがある。平気で妨害する人の心境が憎らしい。私の心残りなのは、部内で訪中団人数の減少のため、生じた赤字はいくらなのか、その処理をどうするかである。事務局担当の阿部さんの努力に感謝するし、事務所あげて奉仕してくれたはせがわ仏壇及びその総務部長溝部氏には、心から感謝するのだが、決算処理について新年には事情をきいてみたい。いずれにせよ、この北京ゆきには妨害が嫌という程の痕蹟が残ってしまって、今年の大きな傷痕になった。呉汝俊に何らかの欠点があったとしても、それはそれとして指摘したり意見開陳するのは勝手だろうが、われわれの北京ゆき事業にまで妨害しなくてもいいのではないだろうか。江戸の仇を長崎で討つもの。この問題で今年半年が掻き乱されたわけである。

今年のことでもう一つ書きとめておきたいのは私の喜寿到達である。兄弟のなかで私が一番長寿したといえるのでうれしいことだ。終戦の年に亡くなった父は 61 歳ではなかったろうか。私が 15 歳か、母は 46 歳。七二兄は私が知事になった翌年か、65 歳だったろうか。だがともかく近頃は何かにつけ老衰を感じず。何時死んでもおかしくないだろうし、己れ自身思い残すこともない。人生ってこんなものだなと思うだけである。伸びたくもないし、続きたくもない。今日は何もしなかったとの後悔もないし、明日はぜひこれをという希望もない。ただこれまでの連続の上で、あれこれ用件ができて、それを消化するほかない立場には置かれている。残念なことが一つある。周辺の人がもう少し敬意を払ってくれてもいいのではないかということだ。邪魔者扱いとまではいえないが、いなくてよいと思っている人が多いように思う。その人の発言で感ずる。みんな我が強いなと思う。権力にもカネにも縁がなくなったからに違いない。窮極は孤独ということになる。喜寿をすぎるとやむなしと自覚するのがよいだろう。

2001年

1月1日（月）曇

コウさん

安田伊三男夫妻

元旦。病院にいると正月という気分なし

直美達は早朝二時頃家に帰る。

午後お正月料理を直美が持って来てくれて、三人で夕食をとる。

十二月三十日から食事はキザミになる。

直美、天野さん泊。

1月2日（火）曇

森山さん

二時三十分頃みゆき病院へ。

直美達と交替する。

夜八時に帰途につく。帰って三十一日に食べるはずだったそばを食べる。

1月3日（水）晴

吉村さん

十時頃天野さんと直美病院へ。

五時すぎみゆき病院へ。夕食持参。

二人で夕食の後天野さんは八時すぎのヒコーキで帰宅する。

直美泊り。

1月4日（木）晴後曇り

十二時昨夜泊った直美と交替する。

食事以外は何もすることもない。ずっとねむっているから。

食事もスプーンに四・五杯食べたらいいいところ。

鮎川先生は病状はよくなっていると言われたが？

直美泊り。

1月5日（金）快晴

コウさん

岩木さん

弁護士、教え子

朝食はスプーン三杯位しか食べなかった。

足がやせ細ってあわれな姿になっているのが痛々しい。

七時すぎ直美と交替する。

みゆき泊り。

1 月 6 日 (木) 晴

森山さん

吉村さん

一彦夫妻来福

十一時頃一彦達が来てくれた。

私は家に帰る直美と入れかわり。

夜は四人で家で食事をする。

1 月 7 日 (日) 雨

小林雅明

橋本さん

一彦夫妻が一日病院にいてくれた。

夜八時、直美と交替して帰宅する。

直美泊り。

1 月 8 日 (月) 晴後曇

十二時みゆき病院へ。直美と交替する。

一彦夫妻は早朝の便で帰京する。

昼食は 1/3 くらい食べたが時間がかかる。

何事もなく長い一日だった。

直美泊り。

1 月 9 日 (火) 雨

渡辺四郎

福原さん

深見さん

手を洗ってもらう。

朝歯学部に行き、十二時半頃病室で食事をする。

直美は帰宅する。

首のチューブの取替え、手術あり。(四時頃)

熱三十七・五あり氷枕。

夕食は割に食べた。（スプーンかみくだく）

夜八時交替。

直美泊り。

1月10日（水）晴

松田さん

森山さん

お昼十二時頃交替する。

尿管の入れ替え、少し痛かった様子。

安田さんから電話あり。

直美泊り。

1月11日（木）雨

青木さん（中国語）

森山さん

波多江さん親子

コウさん

十二時交替。

食事は二割くらい食べた。

昨日と変わりなく眠っている時間が長い、

直美泊り、

1月12日（金）晴

佐々木さん

二時頃直美と交替する。

みゆき泊り。

1月13日（土）

淵上さん

吉村さん

1月14日（日）曇、夜雪

食事がとれなくなって来ている。

私は一日休み。

直美泊り。

1 月 15 日 (月) 雪

森山さん

先生のお話を聞く。

もう手のほどこしようがない。今日から絶食になる。

お父さんはこの雪がわかっただろうか。

雪がすごく降っている。

十二時すぎ交替する。みゆき午後八時までいる。

直美泊り。

1 月 16 日 (火) 雪時々晴

森山さん

松田さん

深見さん

首のチューブの入れ替え。

直美は三時三〇分頃帰途につく。(埼玉へ)

1 月 17 日 (水) 曇後晴

森山さん

大屋さん

吉村さん

緒方夫妻

今日は大きな声でうなることが多かった。

時々パッと目を開いて、顔を近づけるとうんうんという様に首をふる。何かわかっているのだろうか。

夕方からは薬がきいておとなしくなった。

1 月 18 日 (木) 晴

森山さん

今日はよく話し、目もよくあいて、字も書こうとしたがペンを持つ手に力がない。

おこしてくれとせがみ、たくさん事を言おうとしたがその中でよくわかったことは「小郡で子供の歌を唄う会があり、自分は会長で行かなければいけないのに行けなかった」。

十三日 十三夜の月が出る。節をつけて口ずさんだ。

十四日 アイヌ。

十五日 申し残しておく。

啓二が十二時頃来福。夜九時頃まで二人で病院にいる。

1月19日（金）晴

河野さん

今日から観察室にずっといることになった。

私共も個室にいて時々のおぞくだけの仕事になった。

河野さんが来て下さったらはっきりと河野君と言ったそう。意しきは、はっきりしている。

啓二は八時頃まで病院にいた。

1月20日（土）雨

夜七時頃直美、一彦に電話する。

啓二が朝から行ってくれる。

私は二時頃病院へ行く。様子がおかしい。

自室に移り、あとはもう何を言ってもわからない風だった。

1月21日（日）

啓二と二人で病院に泊ることにして先生の話聞く。もう今日明日があぶないとのこと。私はそんなことはないと思った。

だがだんだんと息も細くなり、足先も冷たくなり、血圧が下るばかり。

森山さん、深見さんも来て下さって四人で見守る。

最後は静かに息が止った。

三時十八分。お亡くなりになりましたと鮎川先生の声にハッと我に帰る。

その後はあまり思い出せない。

七時に病院を出て家に帰る。

お通夜のため、夕方には積善社に移る。

祭だんのお父さんはニコニコ笑っていて私達よけい悲しい。